

円満寺遺跡 II
(古代編)

2006年3月

島根県

奥出雲町教育委員会

『円満寺遺跡II』に誤植がありました。

御手数ですが次のように訂正をお願いします。

頁・欄・行	誤	正
挿図目次 左 4~7	遺物堆積状況	遺物堆積状況
3 図3タイトル	堆積土の簡易…	堆積土の簡易…
4~7 図4~7タイトル	遺物堆積状況	遺物堆積状況
8 図8 図中説明	粘土數	粘土數
11 図11タイトル	要(No1068)内堆積状況 要(No1068)内堆積状況	要(No1068)内堆積状況 要(No1068)内堆積状況
20 図説明	○ 祭祀遺跡	○ 祭祀遺跡
76 最下行註2	2 例えば…	※2 例えば…
88 (表1出土場所欄中)	(土品溜り)	(土器溜り)
104 図13のうち	No4赤塗土品片	No4赤塗土器片
112 中段(写真説明)	上も下も土器堆積	上も下も土器堆積



羽口 1

縦断面及び髓心の石こう型と現生の竹



羽口 2

楕円形鉄滓
(分析試料)

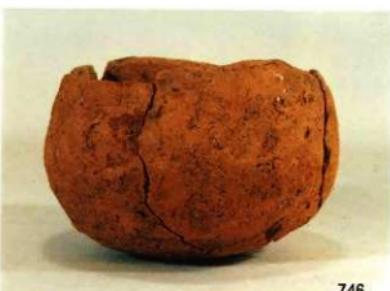
羽口と鉄滓



手捏ね土器とその他の遺物



745



746

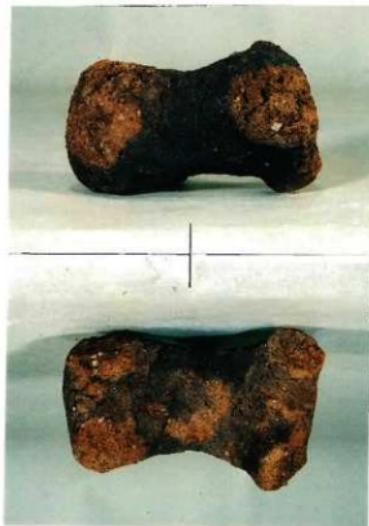


747



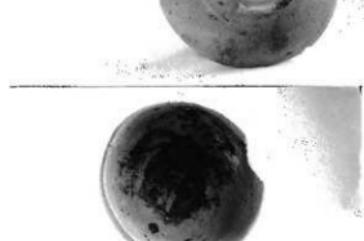
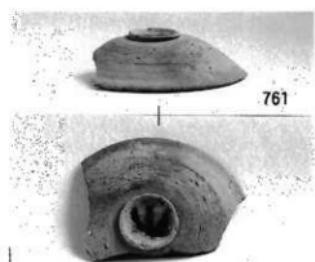
748

手捏ね土器



749

土馬



墨書土器等



761



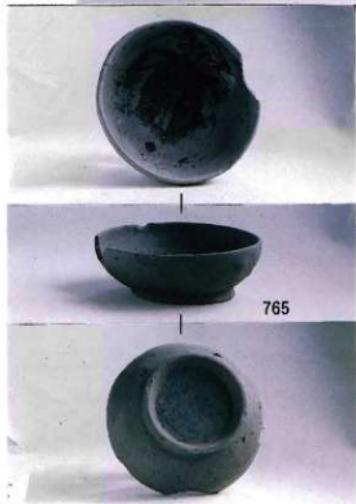
762



764



763

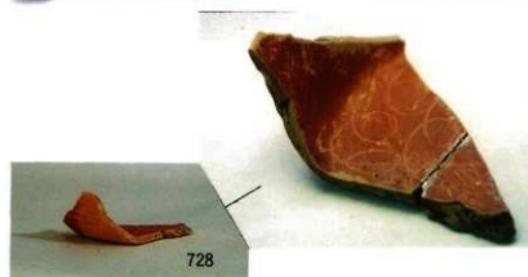


765



766

墨書土器等



赤木椀

暗文土器と赤木椀



ステージA

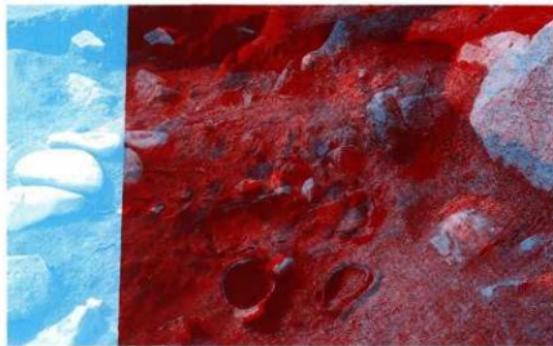


遺構

ステレオ写真 1

(添付 [赤・青] メガネで見て下さい)

2 - 4 次
(ステージ A)
全景

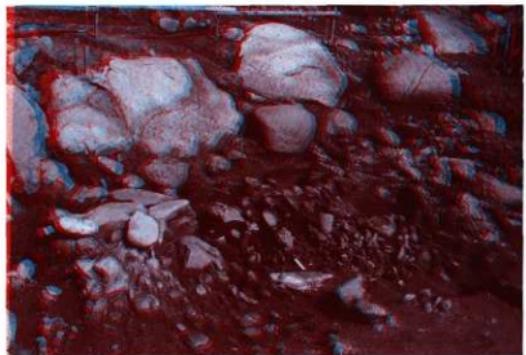


3 - 2 次
(ステージ B)
全景

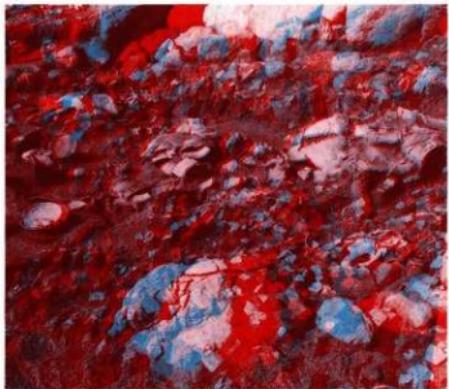


ステレオ写真2
(添付 メガネで見て下さい)

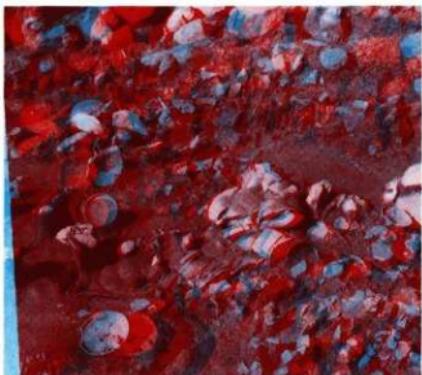
3 - 4 次
(ステージB)



3 - 6 次状況
(ステージC)



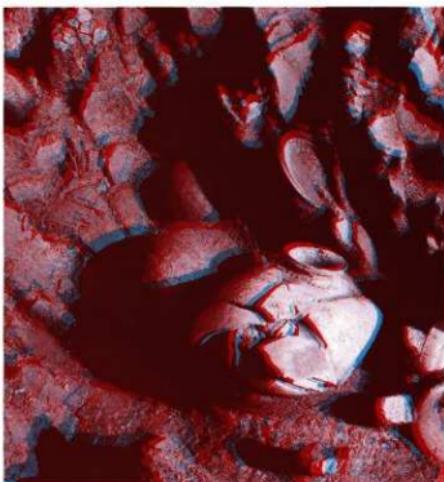
3 - 6 次状況
(部分)



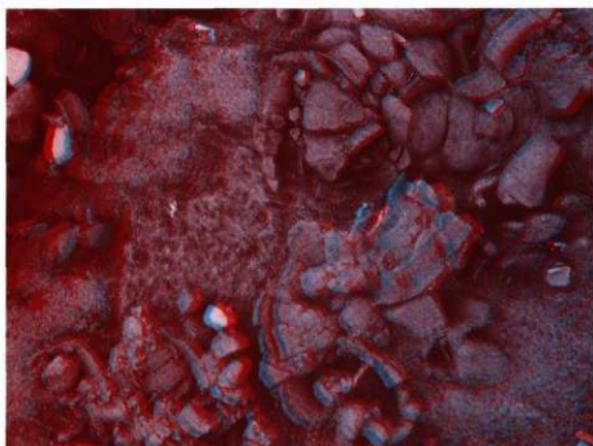
ステレオ写真 3

(添付 メガネで見て下さい)

3-5 次
(部分)



3-5 次
(粘土貼りの上と下に土器)



例 言 付 記

1. 例言についてはI集首記に示したとおりである。
2. 平成17年3月31日の行政合併に伴い町名変更、“奥出雲町”となる。
3. 平成17年度体制は次のようにある。

調査主体者 奥出雲町教育委員会 教育長 若槻慎二
事務局 右見公男（教育課長） 徳江良弘（教育課長補佐）
広野 進（生涯学習係長） 平田昭憲（社会教育主事）
三成由美（生涯学習係）
調査員 野津 旭 杉原清一 藤原友子
調査補助員 佐野木信義 伊藤正樹 家熊 猛 元山貴光
遺物整理 藤原厚子

凡 例

報告書中の遺物Noは、次のように配した。

種類	器種	個体No
須恵器	蓋	1~29
	壺・高台壺	101~169
	高壺	201~220
	壺・甕類	301~323
土師器	瓶・把手	501~529
	土製支脚	601~650
特殊遺物	赤彩・暗文、手捏 製塙、墨・漆	701~766
	玉・石類	801~
土師器	甕	1001~1236

目 次

〔第1分冊〕

- 序文
- 例言
- I 調査に至る経緯と経過
- II 位置と範囲
- III 調査の概要
- IV 調査成果
- V まとめ

〔第2分冊〕

- VI 土器溜り部の調査
- 付編 I
- 付編 II

〔第2分冊〕

巻頭写真 1～6

ステレオ写真 1～3

VI 土器溜り部の調査

1 調査の概要	…	(杉原) 1
2 遺構立地の微地形と環境	…	(杉原) 2
3 遺構と土器類の堆積状況	…	(杉原) 3
4 祭祀遺構の検討と復元の試み	…	(杉原) 17
5 出土遺物（須恵器類 上師器類 特殊遺物）	…	(野津) 21
6 遺物の年代観	…	(野津) 63
7 混入した製鉄関係遺物の検討	…	(杉原) 75
8 “赤い水”について	…	(杉原) 76
9 むすび	…	(杉原・野津) 77

付編 I 円満寺遺跡より出土木材および木炭の¹⁴C年代測定 ……川野 庚子・柴田せつ子 81

II 円満寺遺跡 出土品の調査 …… 村川義行・三奈木義博 88

挿図目次

図1 遺物取上げ次別区分	1	図27 壺(3)	34
2 上石に開まれた祭祀跡	2	28 壺(4)	35
3 推積土の簡易粒度分析結果	3	29 壺(5)	36
4 遺物推積状況1	4	30 壺(6)	38
5 遺物推積状況1	5	31 壺(7)	39
6 遺物推積状況2	6	32 壺(8)	40
7 遺物推積状況2	7	33 壺(9)	41
8 ステージA 遺物配置	8	34 壺(10)	42
9 ステージA (Iライン断面)	9	35 壺(11)	43
10 ステージB 遺物配置	10	36 壺(12)	44
11 壺(Na1068)内推積状況	11	37 壺(13)	45
12 赤泥付着状況	12	38 壺(14)	46
13 ステージC・C' 遺物配置	13	39 壺形状とコゲ・煤の付着状況	47
14 ステージD 遺物配置	14	40 瓶(1)	49
15 土器溜り遺構 完掘状況	15~16	41 瓶(2)	50
16 須恵壊・高坏の年代観別と 特殊遺物の分析状況	19	42 把手	51
17 祭祀関連遺跡	20	43 土製支脚(1)	52
18 須恵器(壺)	21	44 土製支脚(2)	53
19 須恵器(坏)	23	45 土製支脚(3)	54
20 須恵器(高台坏)	24	46 土製支脚(4)	55
21 須恵器(高台坏)	25	47 土製支脚(5)	56
22 須恵器(高坏)	27	48 上製支脚 形式別構成図	57
23 須恵器(壺)	28	49 赤彩上器	59
24 須恵器(壺・横瓶・他)	29	50 手捏上器・上馬	61
25 壺(1)	32	51 製塙土器・他	62
26 壺(2)	33	52 鉄闇連遺物	75

表目次

表1 円満寺遺跡出土須恵器観察表	64	表5 円満寺遺跡出土赤彩土器観察表	73
2 円満寺遺跡出土土器観察表	67	6 円満寺遺跡出土土器観察表	74
3 円満寺遺跡出土瓶観察表	71	7 円満寺遺跡出土土製塙土器等観察表	74
4 円満寺遺跡出土土製支脚観察表	72		

図版目次

PL 1 遺物出土状況（1）	107	Pl.23 壺（6）(図30)	129
2 " (2)	108	24 壺（7）(図31)	130
3 " (3)	109	25 壺（8）(図32)	131
4 " (4)	110	26 壺（9）(図33)	132
5 祭壇状遺構－ステージA－	111	27 壺（10）(図34)	133
6 粘土敷きと遺物の散布状況	112	28 壺（11）(図34・35)	134
7 ステージC 石敷祭壇部－上段の部－	113	29 壺（12）(図35)	135
8 石敷祭壇部－下段の部－	114	30 壺（13）(図35・36)	136
9 現地説明会と指導会	115	31 壺（14）(図36)	137
10 気恵器（蓋）(図18)	116	32 壺（15）(図37)	138
11 須恵器（壺）(図19)	117	33 壺（16）(図37・38)	139
12 須恵器（高台壺）(図20)	118	34 壺（17）(図38)	140
13 須恵器（高台壺）(図21)	119	35 風（図40・41）	141
14 気恵器（高壺）(図22)	120	36 把手(図42)	142
15 気恵器（高壺）(図22)	121	37 土製支脚（1）(図43・44)	143
16 気恵器（蓋）(図23)	122	38 土製支脚（2）(図45・46)	144
17 須恵器（横瓶・他）(図23・24)	123	39 土製支脚（3）(図46・47)	145
18 壺（1）(図25)	124	40 赤彩土器（1）(図49)	146
19 壺（2）(図26)	125	41 赤彩土器（2）(図49)	147
20 壺（3）(図27)	126	42 手握上器（1）(図50)	148
21 壺（4）(図28)	127	43 手握上器（2）(図50)	149
22 壺（5）(図29)	128	44 製瓶上器・他(図51)	150

VI 調査に至る経緯と経過

1. 調査の概要 (図1)

七器溜り部は、円満寺遺跡調査区の東端位置に所在した（第I編P14図4参照）。局部地形は、小谷下端の巨岩で囲まれる湾入状斜面である。この巨石群を含む7×8m、面積約50m²で、深さ1.4mほどに、上器片等の集堆積したところである。

この部分の発掘調査は平成14年度10月から開始し、浅いサブトレンチで確認しながら層状に検出・取上げを繰返す方法を行った。都合、平成14年度は8次まで及び翌平成15年度も8次まで行い、平成15年12月に現地調査を終えた。

対象範囲を1m方眼に区分しA・B…、a・b…の組合せで区名とした。

取り上げ次は、結果として高位置のB d区から漸次、谷水流れに沿ってG e～H f区に至った。因みにこの間の地山面での落差は2.3mである。

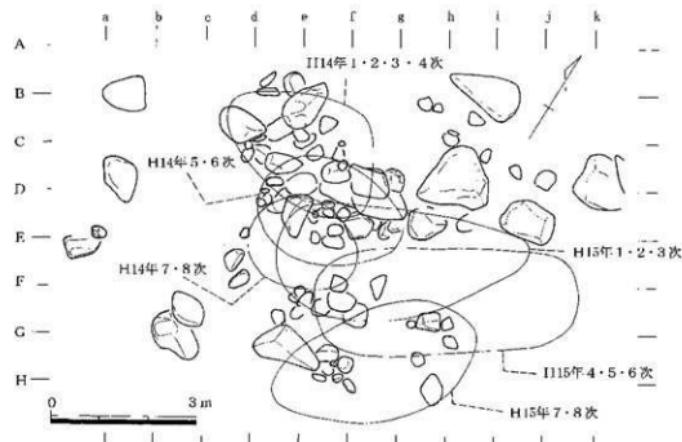


図1 遺物取上げ次別区分

取り上げた遺物は主に上器であり、すべて破片となっていて、その内訳は次のようである。

	七 師 器					須 惠 器					その他
	壺・壷	瓶・土製支脚	赤彩杯・皿	その他	壺・壺類	高杯	甕・甕	その他			
33400	708	391	—	346	396	85	171	341	—	—	—
計	34845					993					69
合計											

これらは細片が多く、器種の特定しがたいものも多いが、ほとんどが律令期に属するもので土

師器の壺類、瓶が最も多く、七製支脚も多い。須恵器は数が少ないが坏類が多い。その他とした内には鉄滓や羽口或は桃核なども含まれている。

2. 遺構立地の微地形と環境（図2）

七器溜りは南西する山麓下端で斐伊川本流の旧河岸で、その上端に位置する。幅7～8mにわたり高さ1m余りの巨岩が斜立して囲み、その隙間は大小の石礫が累積する。花崗岩質母岩のやや湾入した微地形である。これは小さな谷の入口部の旧河岸が漸次洗い出された様相であり、そこへ谷間からの水が滲み出している。そしてこの6～7m間の平均勾配は25～30°ほどであり、落差は約2mを測る。そして自然の流入土で粘質湿地となるところである。

この谷間を登ると上布施集落に至り、左手（西側）は孤立する山頂で、中世の山城となっている。上布施地区は既に述べたように古代の布勢郷のうちにあたり、古墳や横穴墓等も散在することなどから拠点的集落の一つであったと思われる（I編3頁参照）。



図2 巨石に囲まれた祭祀跡

3. 遺構と土器類の堆積状況

1) 土器滴りの堆積状況

この上器滴りは土器片が泥状粘質土にまみれて埋めつくされ堆積していた。外周域の土層によつてみると、経年の累積であることは明らかであるが、堆積内にその層準或は理層などは識別が出来なかつた。

これらの状況から、調査作業は滴り部の高位置（北西部）から作業可能な深さである10~15cm毎に漸次低位置（南東部）へと、少しづつその位置を移しつゝ掘り下げて2か年合計16次にわたつてやっと全面の発掘調査を終えた。

従つて遺物の出土は“層”ではなく、任意の“次”であることをことわつておく。

（以下、2002年第1次取り上げは“2-1次”と記し、位置は1m方眼でA~Hとa~jの組み合わせで表示する）（図4~7）。

因みに上器片の集中堆積する部位のE g ~ hの間において採取した泥土の簡易な粒度分析を行つてその組成をみた。風乾細土18kgについて粒径0.4mm以上は水中篩選で、以下は水中沈降速度で区分した。結果をグラフで示すと次のようである。

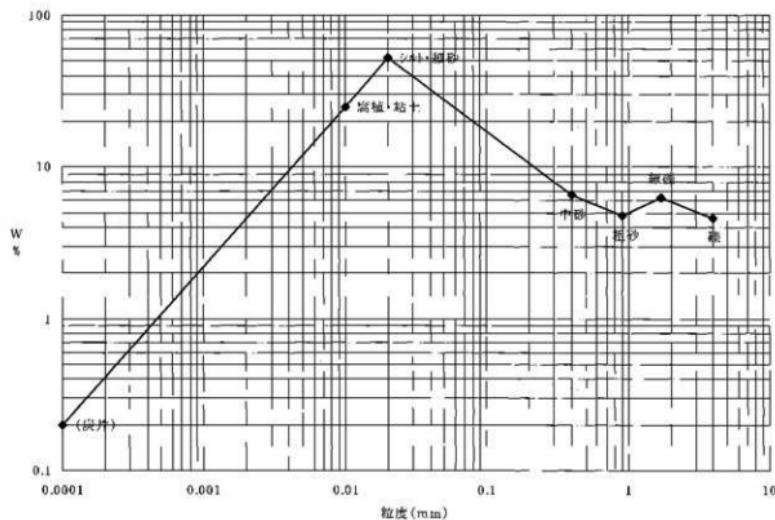
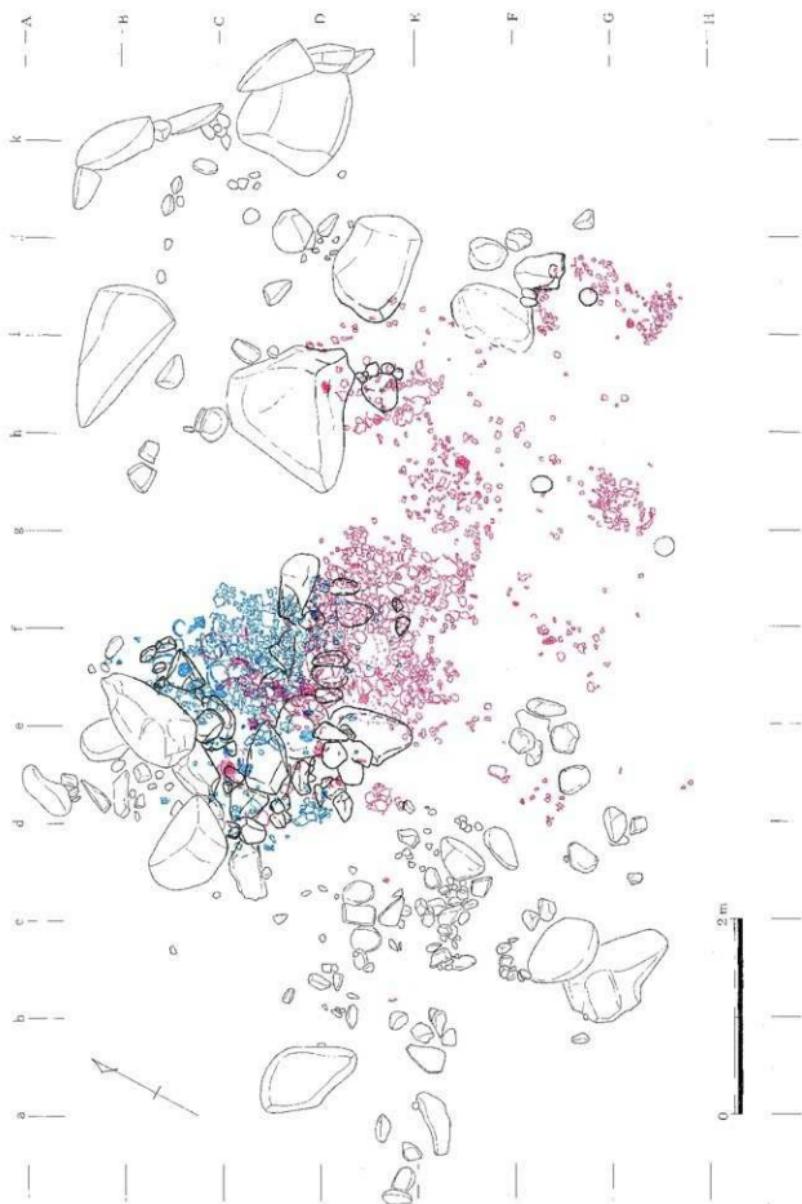


図3 推積土の簡易粒度分析結果

この結果は細砂～シルトが大半であり、粘質の地表土が流入を絶けて土器片等を埋没したものと判断した。

图4 遗物堆积状况1 (2-1~3-2次平面)



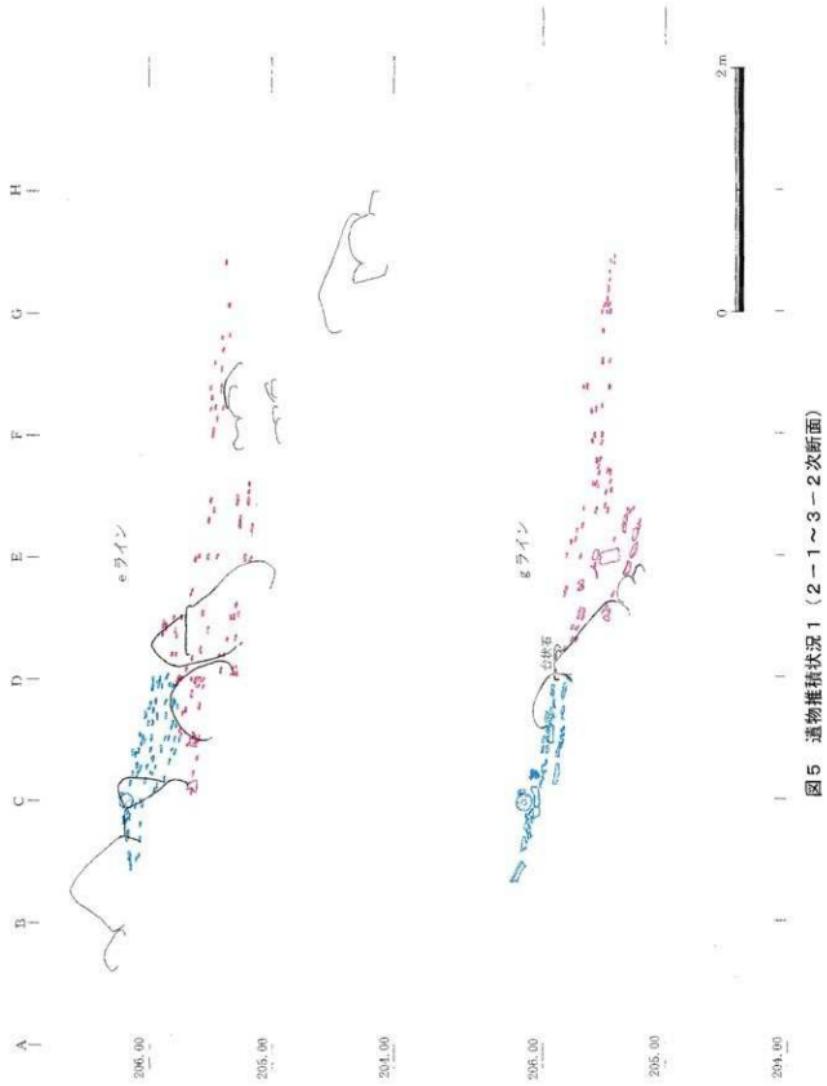
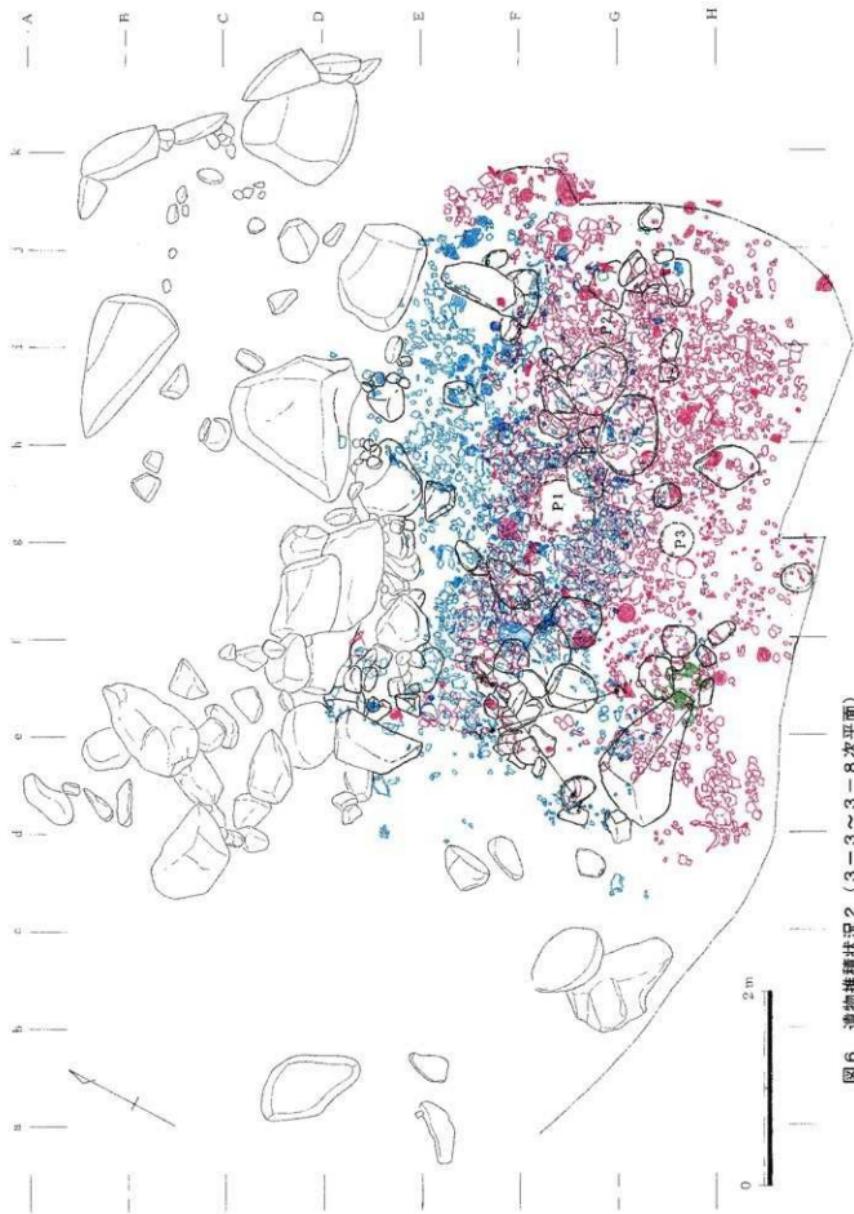


図5 遺物堆積状況1(2-1～3-2次断面)

圖 6 遺物堆積狀況 2 (3—3 ~ 3—8 次平面)



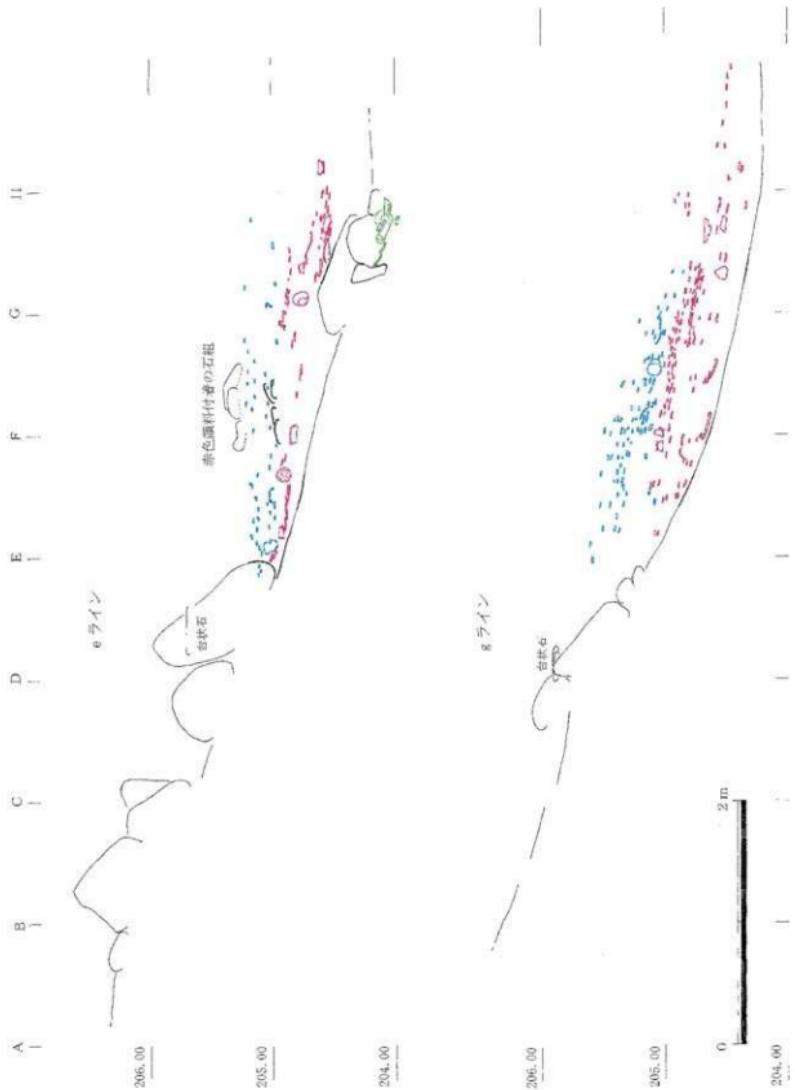
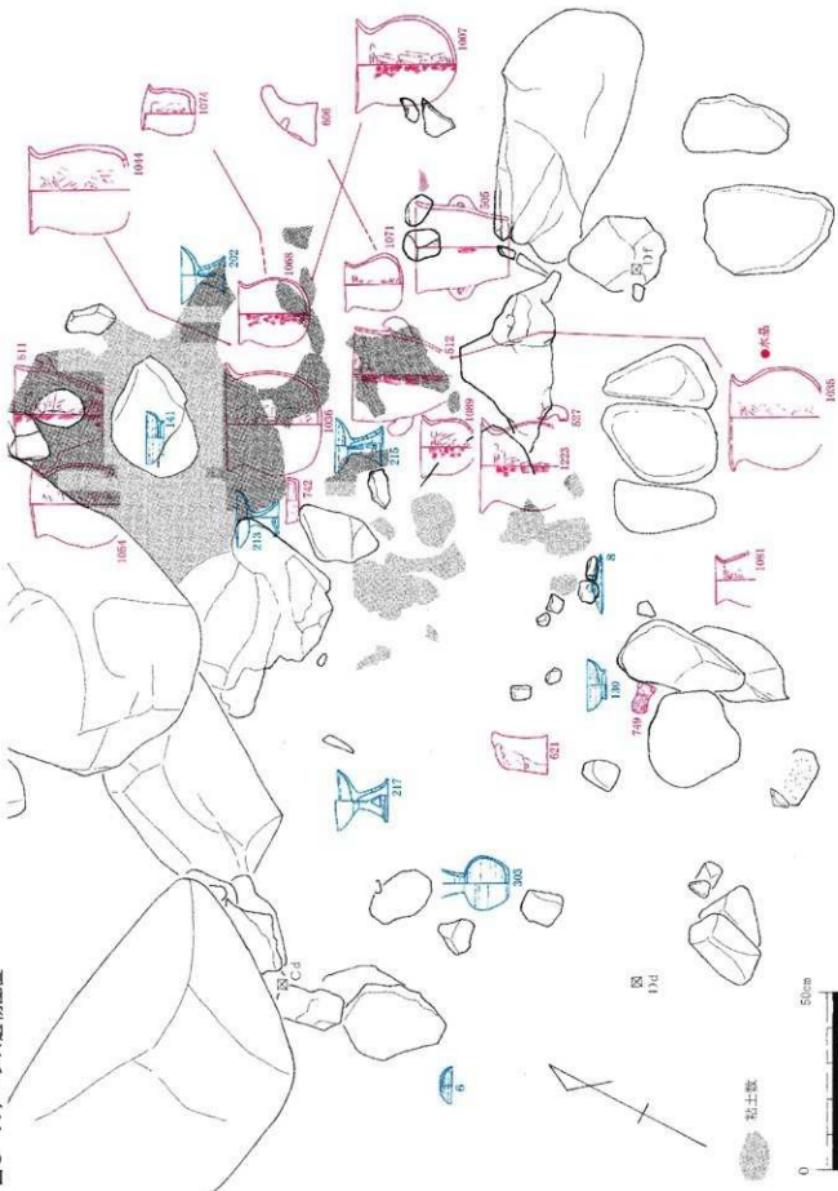


図7 遺物推積状況2

図8 ステージA遺物配置



2) 2-1~4次状況 一ステージA-(図8・9)

最も高位置にあたり、巨石群の頭部がわずかに露出する前面の約3×2.5mの範囲で、B-d～e及びC-d～e区が中心である。

堆積表土の一隅に土師器の散布が認められ、これを4次にわたって、厚さ約20cmを掘り下げるとな密な散布面は広がり、土師の甕体が横転して圧し潰れたままの状況のものを含む土器片多数が略円形で浅い皿状面にまとまりをなしていた。この土器片の間には10~15cmほどの山礫がかなり混入しており、厚さ20cm以上の堆積となっている。そのベースとも言うべきあたりの3か所ほどに熱変色した膨潤な粘土塊がみられた。しかし粘土の張り床面というほどではない。

さらにD区にかかる前方の縁辺部位には円磨度の高い偏平長円形の川石3個が敷き並んでおり、祭壇様のものとみられる。

この遺構と覚しき範囲については2-4次取り上げが最終面と思われた。2-1~2-4次において検出した遺物のうち原形が分かり、図化出来た品は10点以上に及ぶ。

これらの出土地点からその位置をみると、最も奥まる巨石の近くには須恵器の高杯や杯類がほぼ横に並び、中央あたりには土師器の煤の付いた大小の甕が6個体以上置かれている。その右手傍から奥あたりには甕が2体以上認められる。また祭壇状石敷きのすぐ右脇あたりでは自然形の水晶1個も検出している。なお、赤塗り杯と思われる細片もまれに混入しているが明瞭ではなかった。

この発掘面を“ステージA”と呼ぶことにする。

以上のような出土状況はその時点での一つの祭祀情景を示唆しているものと考える。

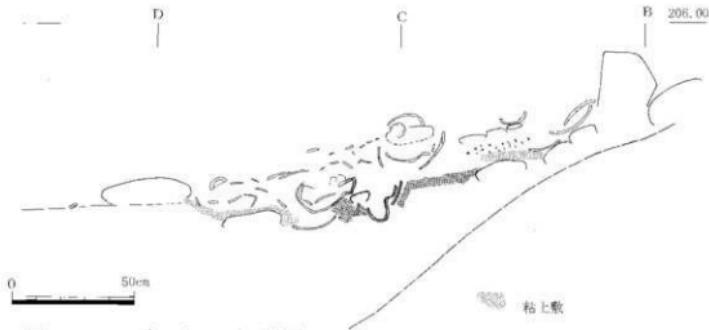


図9 ステージA(fライン断面)

3) 2-6~8次、3-1・2次 一ステージB-(図9)

2-6次からは遺物包含の位置が若干南前に移る。上記のステージA部の下面是流入土と若干の小粘土塊の下は巨岩が斜立しており、その隙間に須恵器等の混入もみられるが、単なる落ち込みとみられた。

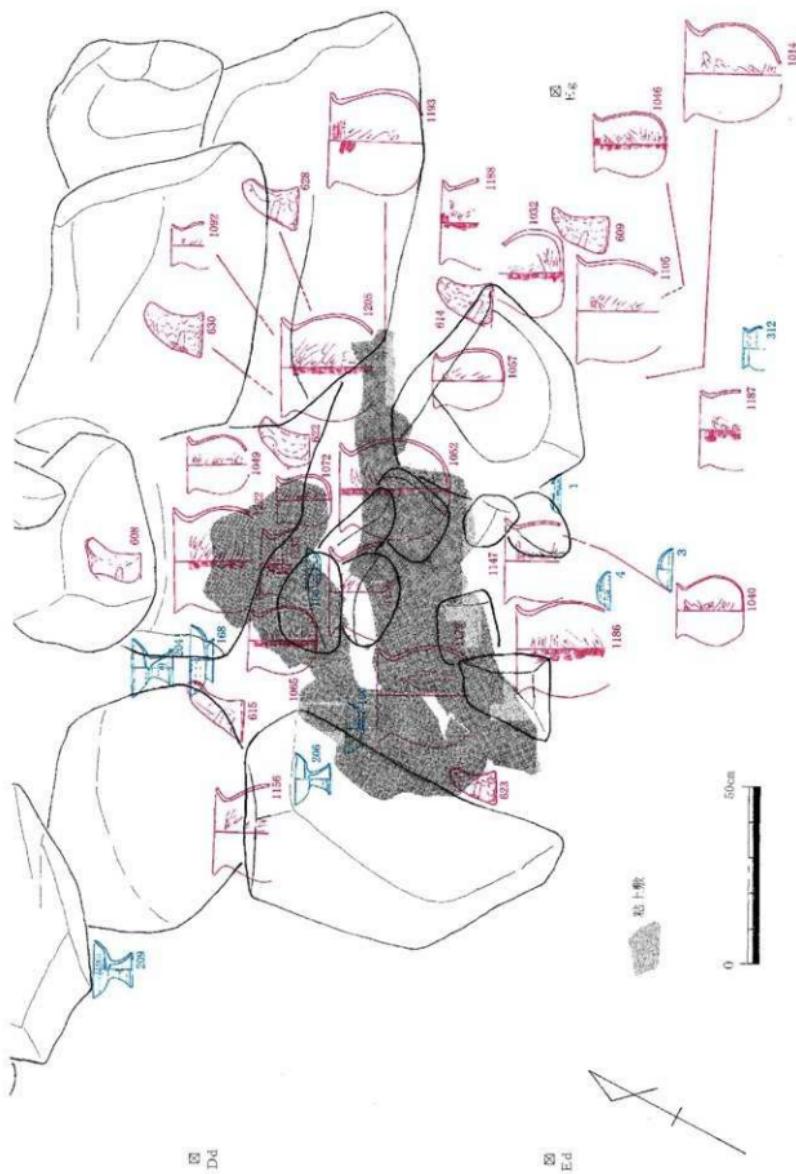


図10 ステージB 遺物配置

ステージAのレベルから約40cm下ったこの巨岩の前方下端からは遺物散布面が大きく拡がっていた。D c 区あたりは破損の程度の軽いものや須恵の完形品などが特に目につく(2~6次)。しかし g ラインあたりから右手は細かく破片化したものの分布が著しく、堆積の差異が感じられる。

前方ではE d と E e 区にかけて川石6個以上を組み敷いたところがあり、原形は一部損じているようだが祭壇としたところであろう。しかしその直近は幅約60cmほどは遺物が殆どなく、泥渕状であり、後世に搅乱を受けたところと思われる。

この範囲内に於いては、巨岩を背景に右組み祭壇までの約1.5×2mほどのスペースは一つのステージとみられ、押しつぶれてはいるものの原位置を保つとみられるものが多い。器種としてはやはり甕が多く、瓶もあり須恵の高杯や高台付杯がある。また土製支脚も多数あり下面には粘土が敷かれている状態で認められる。しかし、この地点は特にカナケ水の滲出が多く、泥質であることから明瞭な分層は出来なかった。

そこでこれをステージBと仮定して器種形状の分かる品によってその配置をみることにする。

奥まるあたりはステージAの下底あたりから前方へ巨岩が斜立しており、その下端はさらに下方の土器片を被うように粘土を敷いて、そこに土器を並べている。須恵の高台付杯や高杯があり、そのあたりから前方へ約1mほどの範囲に土製支脚や甕体の潰れが敷きつめたように一面にひろがっている。特異なものとしてやや離れてではあるが小鳥のものと思われる長管骨一片が出たし。土器の個体数は明瞭ではないが、1×1.5mほどの面に土製支脚13基以上、甕体10個体分以上及び瓶1個体分を数えることができる。この個体数は祭事1回のみの量であるのか複数次であるのかについては明瞭でない。これを仮にステージBと呼ぶことにする。

なお前述の如く石組み付近は搅乱のためかほとんど原形に復する遺物は無かった。この石組みは山石の露頭部を下敷きに、ひと抱えほどの川石6個を組み敷いたもので、この右の隙間や下面の接地面には赤色の泥質物が著しく付着していた(図12)。この地点あたりは前述のように“カナケ水”的滲出がみられるところで全体に濁った赤橙色の浸潤があるが、この石組部は特別に濃厚で、やや異質かと思われた。この赤泥物については、後日依頼しての分析の結果、“水酸化鉄が主体で部分的ながらCa、Pも見られることからアバタイト(矯灰石)かともおもわれる”とあり、付近のカナケとは幾分の差異があり動物質の混入も考えられよう。

また、ほぼ同レベルでさらに右手(東)側約2.5m隔てたC h ~ D h 区あたりにも破損の軽微なものがやや多く、また透明な石英片や桃核もあるなど、大石3個を背景にするこの位置も、もうひとつの場であった可能性がある。しかし直上近くまで表土の搅乱の痕跡があり、また遺物の原位置も特定し難く、結果として明らかなプランは把握出来なかった。



図11 墓(No.1068)内堆積状況

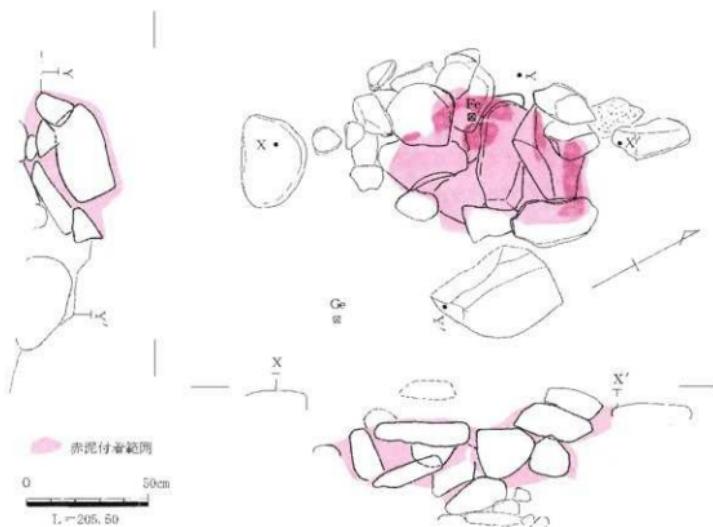


図12 赤泥付着状況

これらの状況のさらに下底にも土器片の散布は中央で厚さ50cmほどにも及ぶが、細片が流入した状態での出土であることから経時の流入堆積と判断した。

このほか、中世の掘立柱の柱穴も3穴以上穿たれており、その為に搅乱を受けている部位があった。

4) 3-4・5次 一ステージC・C' — (図13)

斜立する巨石を背景に中段位にあたるF f区及びF i区を中心に、ほとんど圧平されて敷き詰められたような土師壺体の間に須恵器がやや密に分布した。付近には50cm以上の山石又は川石があり、祭祀場面を思わせるステージが2面以上あったと考えられる。

これを仮にステージC及びC' と呼ぶ。

しかし、中世の掘立柱による柱穴掘削で2か所以上が消滅しており、また、軟弱地面踏圧のためか、土器の破片は細片化していて、復元の困難なものが多いがそのほとんどは壺体である。Ef区及びE j区あたりには赤彩の坏が暗文の施したものと混在し、須恵器では高台付やなしの坏や蓋が多く、横瓶もみられた。また、遺物取上げ時の途中、特に4次取り上げに際してはメノウや水晶の破片が混入しており、これも祭祀用かと思われた。

5) 3-6~8次 一ステージD — (図14)

上記のF f～F i区から緩斜して下ったG fからH h区にも同様に圧平され敷き詰めた状態で多くの土師壺片がやや厚く存在した。その間にあって転がり込みを思わせる個体の大破片も混在

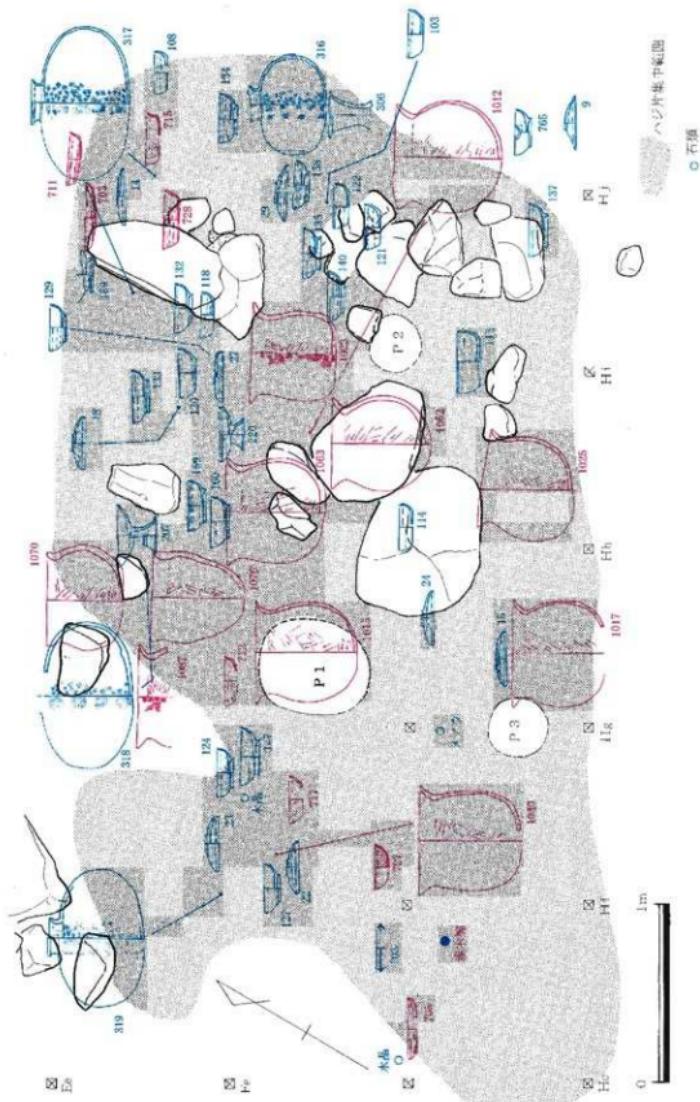


図13 ステージC・C' 遺物配置

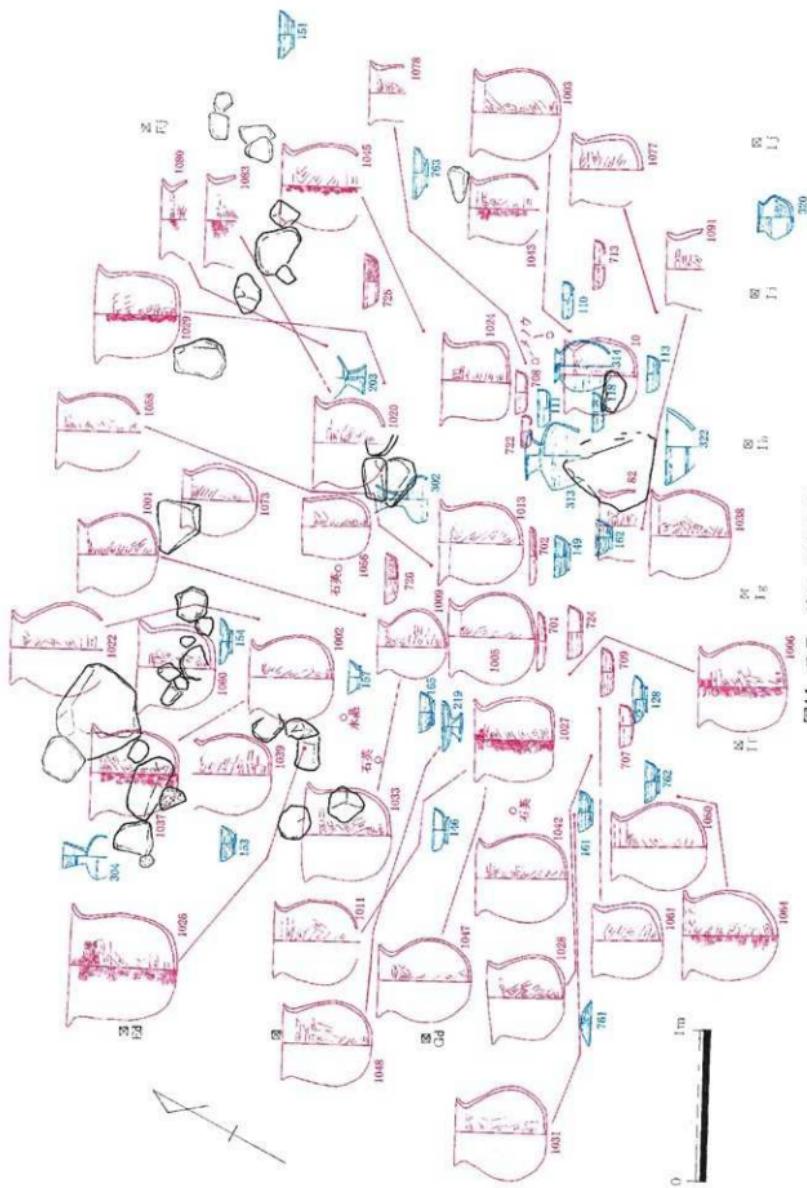


図14 ステージD 遺物配置



図15 土器満り造構 完掘状況

するようになった。赤彩や暗文土器、また器壁の極く薄い布目痕のある土器細片が混入するのもこのあたりである。

上記したように粘土の敷き詰め状況や土製支脚のまとった出土はみられない。しかし人破片の甕体や赤塗り坏片も混っていて、極く近い位置からの投入又は移動を想させる。因みに、ベースの甕片の多くは踏圧されたと思われる部位もあり、大石又は巨岩もなく、より上方のステージA～Cの場合と様相が異なる。

最下方8次取り上げ部分は、斜立する大石が漏斗状になっている部分で、この中に破損の軽微な須恵高坏や甕体が転がり込んだ状態であった。おそらく、かつて集った水の漏下するところであつただろう。

4 祭祀遺構の検討と復元の試み

2ヶ年にわたって合計16次の遺物取り上げ状況を述べたが、その中途において、要検討場面をステージA～Dとしていた。以下、これについてその共通点や相違点をふまえて、復元的仮想を試みる。

先ず各ステージの推移順を須恵器の編年観（出雲大谷編年4期～8期）によって辿ると、大まかに上方のステージAから漸次降下してステージDへと移る（図8～14参照）。

これは概ね取上げ次の順とみなしてよからう。

またステージA及びBは斜めに立つ巨石群の狭間や脇あたりの場で相対的に上段地にあたる。これに対し、ステージC・C'は巨石群の根あたりから前方で、前者から約40cm落差の中段位であり、ステージDはさらにその前方の傾斜する緩斜面で大石等が目立たない下方位置である。

祭壇状に川石を並べた遺構はステージA～Cにみられるが、C'及び下段位置のステージDには明瞭でない。

ベースとなる面についてみるとステージAでは地面をわずかに窪ませているが、Bでは粘土を敷きC・C'では多数の投棄又は遺棄された上師甕片等を踏圧した面をベースとしている。Dについてはベースの存在が疑わしく、無いとみるのが適當であろう。土器についてみると既に述べたように須恵器ではA・Bにおいて蓋坏が、C～Dでは高台付坏等が多くなり、高坏はAから漸次Dへと減していく。大まかにステージBあたりに須恵蓋坏の上下逆転期があたるようだ。土師器では甕は主としてA・Bにあり、甕は小形はA・Bに、大形では全体に長胴で下膨れ気味の器形ではあるが丸底がB・Cに、へたり気味平底はDに著しい。土製支脚はほぼ全域にわたって存在するが当地方通有の典型的な又状は少なく、角頭が鈍く、ヘラ先或はカモノハシ状に幅広くなるもの、そしてその先端を押圧して擬似双頭状にしたものなど、便化した形態であり、焼成も著しく弱い。これらは主としてB・Cに多い。

その他祭祀用とされるものについてみると、土馬はAに1点のみ。手捏ね土器は多くは坏状でB・C・C'に、漆付着や漆書き（墨書きとして扱った）等もC・C'に関与している。メノウ片

や水晶片及び色調ある川砂利等も同様のステージに認められる。

これらの状況から配置等を予想してみたい。

ステージAはカナケ水の滲出するあたりのすぐ上にあたる。

後背に半ば埋もれた巨石群が並び、それに倣って2~3個須恵の高坏が置かれる。約1mほど前方には扁平な川石3個を敷き並べて祭壇とし、蓋坏と土馬を供える。中央から右寄りにかけて山石の頭位がのぞく地面に土製支脚や石を支えに甕が据えられ、上には瓶が乗る。左手には須恵の小壺があったのか。器に何を盛ったかは分からぬが、ごく近くで桃核が出土したことからすると、このような品であったろう、また季節も示唆しているといえよう。そして此處で度数ほぼ同様に繰返し行われたものであろうが、その次数は少なく(図版5参照)、やがて場が移動する。

ステージBはAと一部重複する前方の位置で巨石の根本あたりからはカナケ水がわずかに滲出する。またその巨石の狭間にはAからの遺棄転入とみられる上器類がみられるが、その上から前方へ粘土を粗略に敷いてベースとするが範囲は広くない。この斜立する巨石群にそって須恵の坏を数個並べ、1.5mほど前方手前には川石を並べた祭壇をつくる。その付近は粗略な粘土敷きとし、右手寄りに又形の土製支脚上に甕を据える。わずかな粉炭があることから小規模な焚火を行ったと思われる。甕で煮沸する行事であったろう。その間には小形の甕も置かれていたと思われる。手捏ねや赤彩上器等の所謂祭祀土器はあまり用いられていないようだ。

このステージBでの継続期間は短いとみられる。

ステージCでは巨石群は背景となり、Bでの祭壇右組みのほぼ上あたりに重ねて川石を並べた同様の祭壇をつくる。これはいわば巨石群の前部にある。このベースには粘土貼りは認められず、軟弱地に遺棄された土器を踏圧した面であり、平坦ではない。あるいはほぼ同じ場での繰返しの結果次別の区別が出来なくなってしまったとも考えられる。凡そ2×3mほどの面で、中央奥の石の狭間からは赤いカナケ水が滲み出していたと思われる。庭面左手寄り気味に横瓶を置き、その前に須恵の輪つまみ蓋と糸切底や高台付の坏が赤彩坏とともに置かれる。また極く薄い布目痕のある所謂製塙土器と呼ばれる細片や水晶、メノウ片も用いられていた。中央から右方へかけては土製支脚に甕を乗せ、火を焚いている。そのまま遺棄したこの甕や上製支脚等は次のときにも踏圧されて次のベースとなつたようだ。

ステージC'はステージCの石に隣接していてこの間の区分は不明瞭である。ひと抱えから人頃大の石が散在する面で、土器片等の踏圧は厚さがやや薄い。土製支脚や甕を中心に据えて火を焚いたため半分炭が若干残っている。それをとりまく散在する石の上に須恵の坏を置き、右やや奥ままで赤彩坏を配する。さらに右手やや高目に横瓶や時に長颈甕を置く。ステージCに近い左手あたりには手捏上器や丈の低い須恵の高坏も置かれることがある。また2~3か所には赤や青色の川砂利が拳大程度散布するところがある。ここでは甕の底部は丸底のものが目につく。土製支脚はヘラ先き状或はカモノハシ状のものが多く又状(双頭)は数が少ない。

このC'はステージCとレベルに大差なく、C・C'は一体の遺構である可能性がある。と

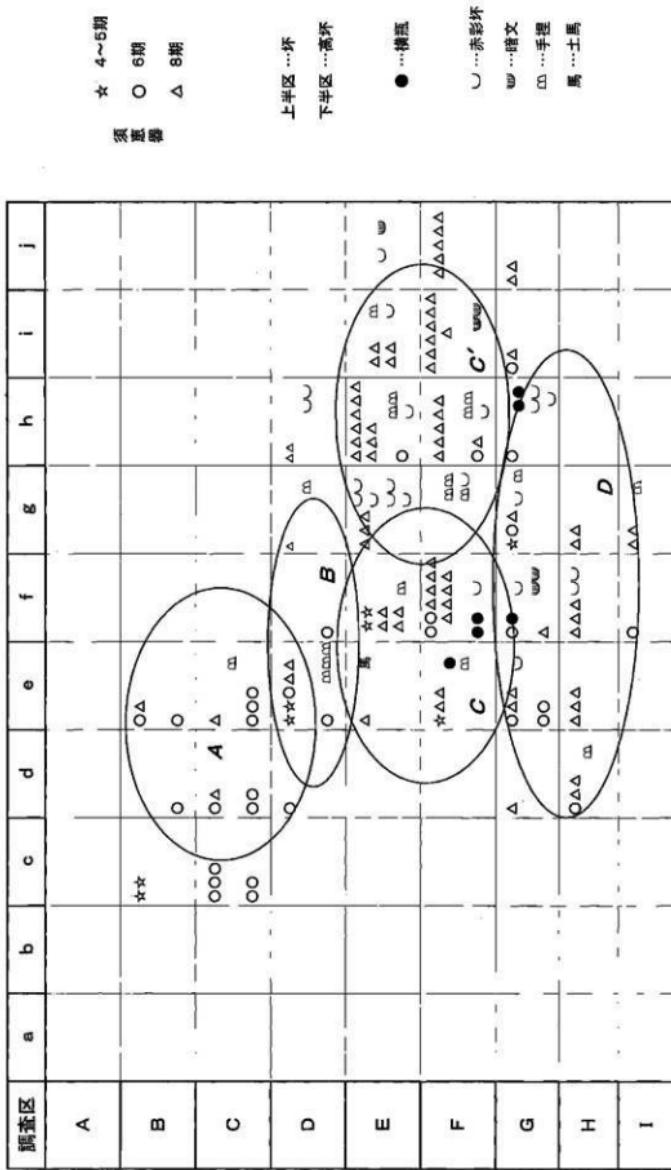


図16 猿惠・高杯の年代観別と特殊遺物の分布状況

するとそれまでのA～Bの場合は小規模であった祭事がC・C'段階に移るとその規模が拡大され、その結果器種の配置での差異であると考えることが出来よう。

ステージDとしたところは遺物が最も多く堆積していた場所であるが、明らかなベースは認め難かった。概ね地山面は赤いカナケ水が浸潤する泥質の緩斜面である。湿度の高い堆積上層には須恵の高台付壺や土師の甕、暗文を施した赤彩壺などが頗著であったが、遺構と覺しきものは見当たらなく、ステージCやC'からの転入又は投入の堆積がみられる。下端近くの2群の狭間に嵌入していた土器は投入された状況を示している。

以上の状況からここでの祭祀はA・Bステージとした高位置に始まり、C・C'ステージでその規模が拡大したと考えられる。石を並べた祭壇と実用の須恵の壺、土師の甕、上製支脚、帳を基本に横瓶や壺或はうるしを用いた墨書き上器或はメノウや水晶、カラフルな川砂利等と、特別な意味をもって上馬や赤彩上器を用いている。

特に多く用いられている土師・須恵器は実用の品であることが特異である。

なお、近隣で土馬等の出土から祭祀遺跡とされたところは次の図のようである。



図17 祭祀関連遺跡

5 出土遺物

1) 須恵器類 (図18~23)

須恵器は993点検出した。土器類出土遺物全体の3%弱ほどである。このうち、復元し図化したのは、150点にほどであった。以下、器種ごとに述べる。なお、各個体の詳細については観察表をつけてある。

図18の1~29は坏蓋である。

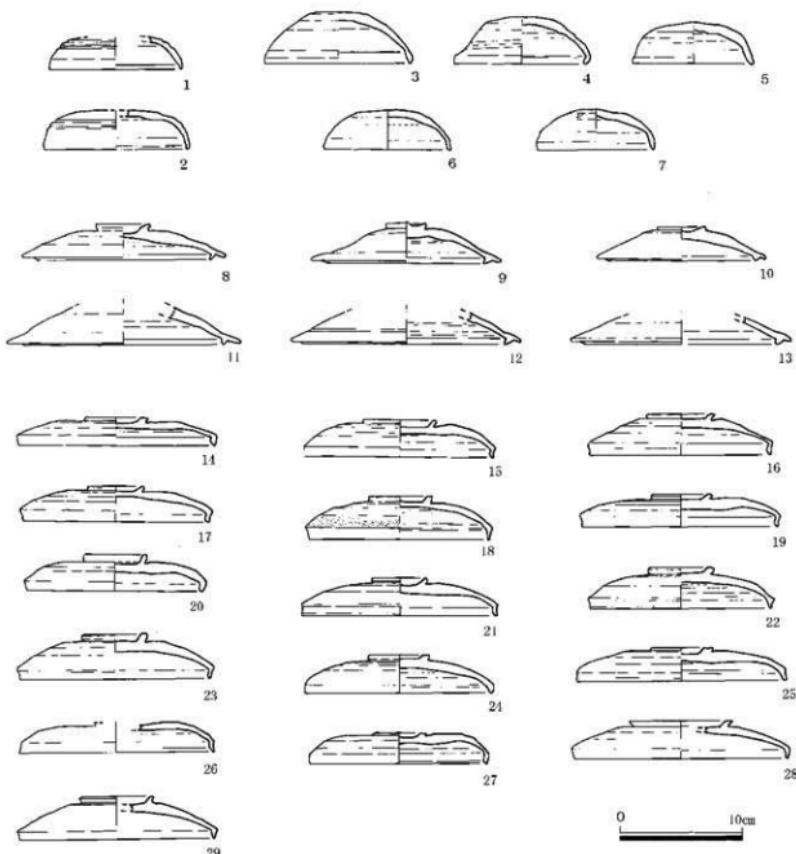


図18 須恵器（蓋）

1・2は口径10.6cm、11.7cmを測り、内外面回転ナデし、2は天井部ヘラケズリである。体部と天井部の界線は2条の沈線により表現し、端部内面の段は曖昧である。大谷編年出雲4期。この時期の小片はこの他にも数点存在した。

3は口径11.8cm、器高4.3cmで、外面の界線も、内面の段も消滅している。天井部はヘラ切り後ナデする。出雲5期である。

4～7は3がさらに小型化し、口径9.4～10.5cmで体部は丸味をもち、天井部はヘラ切り、蓋坏反転する直前のものである。4は天井部に“×”ヘラ記号がある。出雲6期。

8～13は輪状撮みと口縁部内面にかえりがつくものである。8・11・27は酸化焰焼成の為、外面全体或は一部が赤褐色を呈す。8～10は口径12.0～14.2cmでやや小型のもの。8・9は撮み周辺を削る。10は外面に灰釉が被り表面が痕痕状で調整不明である。11～13は撮み部を欠くが、推定復元による口径は15.6～16.4cmとやや大型のものである。内外面とも回転ナデ調整、天井部は不明である。小径のものは大径のものよりやや古朴であろう。いずれも出雲6B期の範疇であろう。

14～29は輪状撮みを有し、口縁内面にかえりがつかないものである。いずれも口径15cm前後のもので、内面、外面体部はナデ、天井部はヘラケズリのものと後ナデするものがある。口縁端部は垂直に強く屈曲する。器高が低く撮みが埋没傾向にあるもの（25～27）はやや新相で、26の撮み内には静止糸切り痕が認められる。出雲8期である。その他の器高が高く短く外傾する撮みを有するものは、出雲7期に遡るかもしれない。

図19の101～123は無高台の坏身である。

101～103は口縁内面にやや外傾し、やや高口のかえりがつくもので、101は底部はケズリ、他は回転ナデ調整を施す。いずれも口径12cm前後である。出雲4期。

104・105は口径11.6cm・12.0cmを測り、内外面回転ナデ、底部はヘラ切り後粗くナデする。106は口径11.4cm、器高3.0cm、底径5.5cmを測るもので底部切離し、回転糸切り後軽くナデする。107～123は底部切離しが回転糸切りのもので、口径12～14cmで、総じて内湾気味に立ち上がり口縁端部で短く僅かに屈曲するものである。115は口径17.0cm、器高6.5cmを測る大型の坏で、口縁は内湾しほとんど屈曲しない。112は壺底部の可能性もある。113は胎土に黒色微粒子を含む。117は底部内面に1.8mm径の円形文あり。107～123は口縁端の僅かに屈曲する器形、静止糸切りでなくすべてが回転糸切り調整であることから8世紀中葉以降のものと思われる。

図20・21の124～169は高台坏である。

器形は口縁が内湾するものと直線的に伸びるものがある。底面は明瞭に回転糸切りのもの（129・160・163・164）、静止糸切りのもの（159・161・162）と判別できる個体もあるが、底部切離し後、丁寧にナデ整形したものについては判別できないものがほとんどである。明確に糸切り、ま

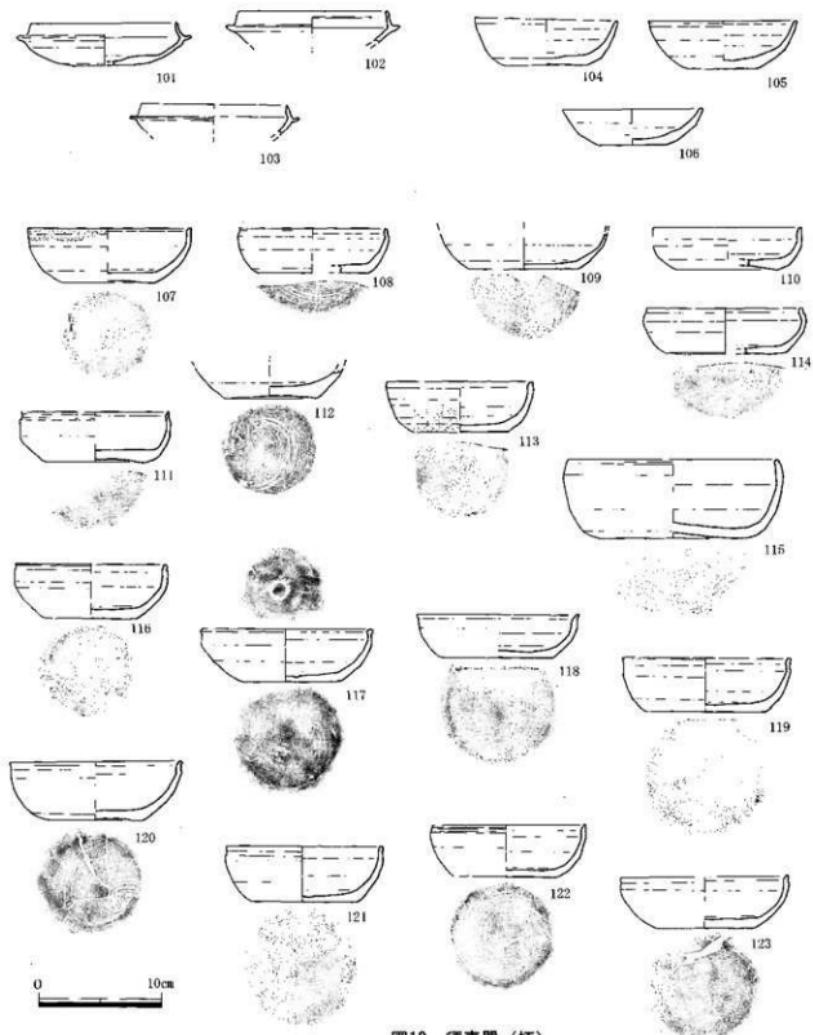


図19 須恵器（坏）

たは痕跡の残るものは土器滴り造構内の南側のレベルの低い範囲からの出土である。糸切り底のものは底部から口縁にかけての立ち上がりが直線的なものが多く、ナデたり、糸切りが明瞭でないものは内湾傾向にある。129は底面に小角三点スタンプ文が押印されている。縦印であろうか。

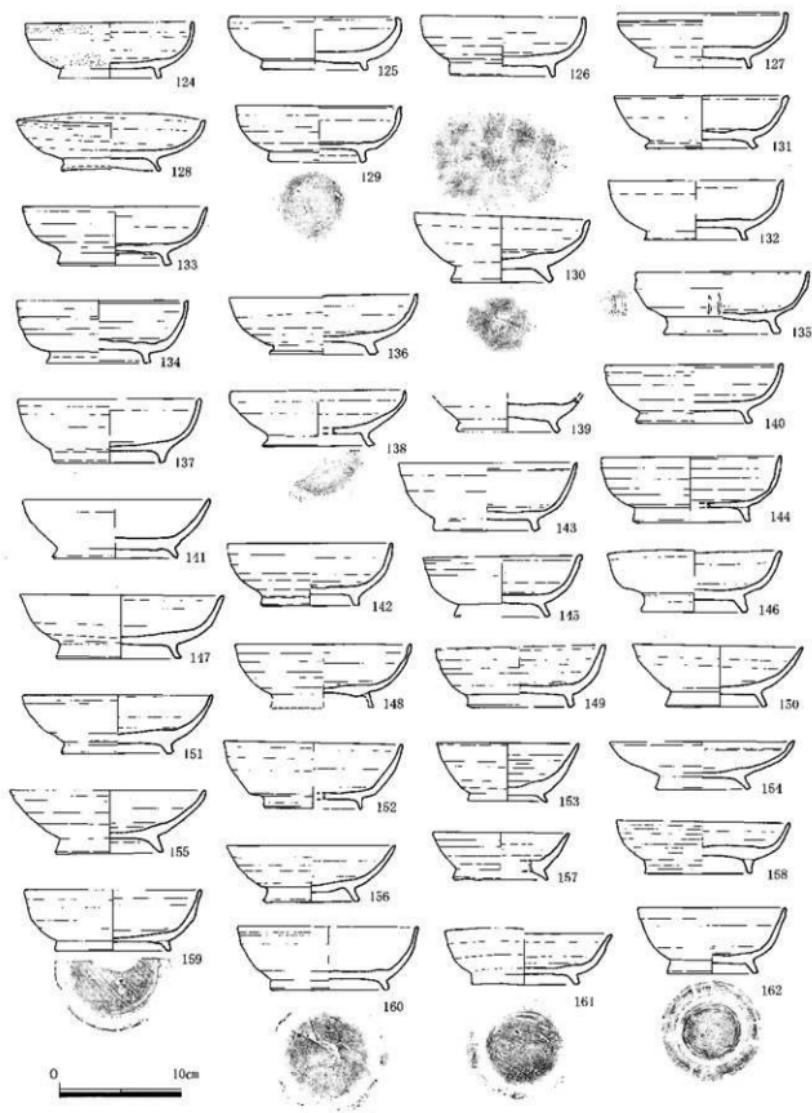


図20 須恵器（高台坏）

130の底内面にはランダムなヘラ描き線、底外面にはヘラ描き直線が認められる。135体部外面には2条の刻印がある。138の高台内外底面には8mm径の円形竹管文が認められる。153外面口縁部には3条のヘラ描き線あり。158の胎土には黒色微粒子を含む。165は高台内外底面に○の中に×したようなヘラ記号がある。168はやや大型の壺で口径19.8cmをはかる。外に踏ん張った高目の高台がつく。

169は壺というより高台付の皿で、外面回転糸切りし、底面は切離し後強くナデる。他の高台壺よりやや後出するものと考えられる。調整で静止糸切りは回転糸切りに先行し、平行する時期もあると考えられる^{註1}が、当遺跡においては土器満り出土で明確な土層区分はできない為時期の細分は困難である。以上は、概ね8世紀の内のそんなに下らない時期とみて大過ないであろう。

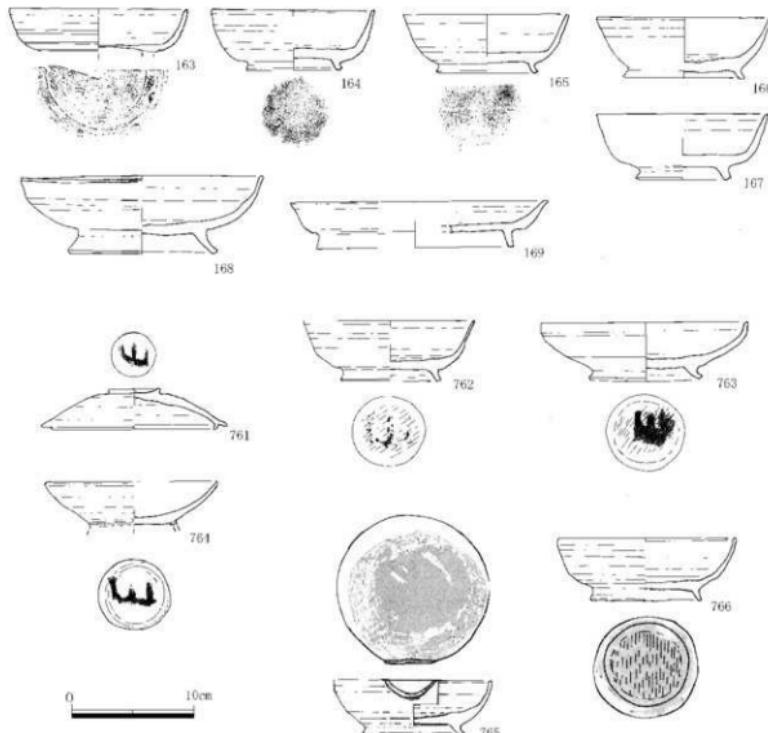


図21 須恵器（高台壺）

図21の761～766は墨書きまたは漆書きした須恵器である。

761は輪状撮みと口縁内面にかえりをもつ出雲6期の坏蓋で、天井部周辺はヘラケズリ、撮み部はナデる。その撮み内に“山”？の字を書く。墨書きか漆書きであるかは判然としない。762は高台坏で体部から口縁への立ち上がりは直線的で、高台内には静止糸切り痕を残す。高台内に漆書きの“山”？を書いている。漆書きの為かなり風化して剥落ちている。763も高台坏。外傾しながら立ち上がる体部が口縁部で強く垂直に屈曲するもので、高台内に静止糸切り痕を微かに残す。763に書かれた文字もやはり“山”？であるが、器壁に墨書きの染みこんだ痕跡が判る程度である。764も高台坏で底部から口縁に皿状に大きくひらく器形で底面はヘラケズリ後ナデている。

“山”の字を淡く墨書きする。器形・胎土・法量等から1とセットであるかもしれない。765の高台坏は口縁の一部を打欠くもの。高台内には一面に淡墨が認められ、内底面と打欠き部にも黒色樹脂（漆）が認められ、転用硯、または転用片口としての使用を窺わせるものである。類例として、出雲国府跡²²においてハソウの口頸部を欠き、円孔に木製の栓がはめ込まれて、内部全面、外面肩部及び頸部の割れ口に漆が付着しているものが出土している。器種は異なるが、器の一部を打欠き、漆を入れ、注ぐという転用の事例として類似するものと考えられる。高台坏766の高台内にも黒色樹脂（漆）が一面に認められ、転用硯と思われる。これらは土器溜りの下位からの出土であった。

図22の201～220は高坏である。

201～214は低脚無蓋高坏である。いずれも坏部は浅い皿状を呈し、すかしは一段である。

201～203はすかしが台形状で1方向のみである。204は直径1.0cmの円形すかしをもつ。205は三角形すかしと線刻すかしが2方向にはいる。206～213はすかしが線刻になるもので206～209・211～213は2方向、210は3方向にすかしをもつ。214はすかしが消滅するものである。これらは出雲6期を中心とする時期のもので、やや遡るものもあるかもしれない。

215～218は長脚無蓋高坏である。やはり坏部は浅く、すかしはいずれも2方2段すかしである。217は上段のすかしが線刻となるものである。218は長脚とするには脚部が低いが2方2段すかしで、上下段ともすかしが線刻になるものである。これらも低脚のものと同様の時期と考えられる。

219・220は非常に脚部が低く坏部は浅い皿状の体部をもち口縁部で垂直に強く屈曲するタイプである。口径は16.8・15.5cm、器高6.9・7.2cmを測る。219の坏部の下方はヘラケズリする。このタイプの品は管見の限り周辺の遺跡では知らない。口縁端、脚端のつくり等から上記のものよりやや後出するものであろうか。

図23・24の301～323は壺・甕類である。

301～307は長頸壺で、口がラッパ状に大きく開きやや肩が張るもの（301・302・306）と口縁部が直行し、なで肩もの（303・304）がある。前者は03年度5・6次出土で形態的に底部に高台

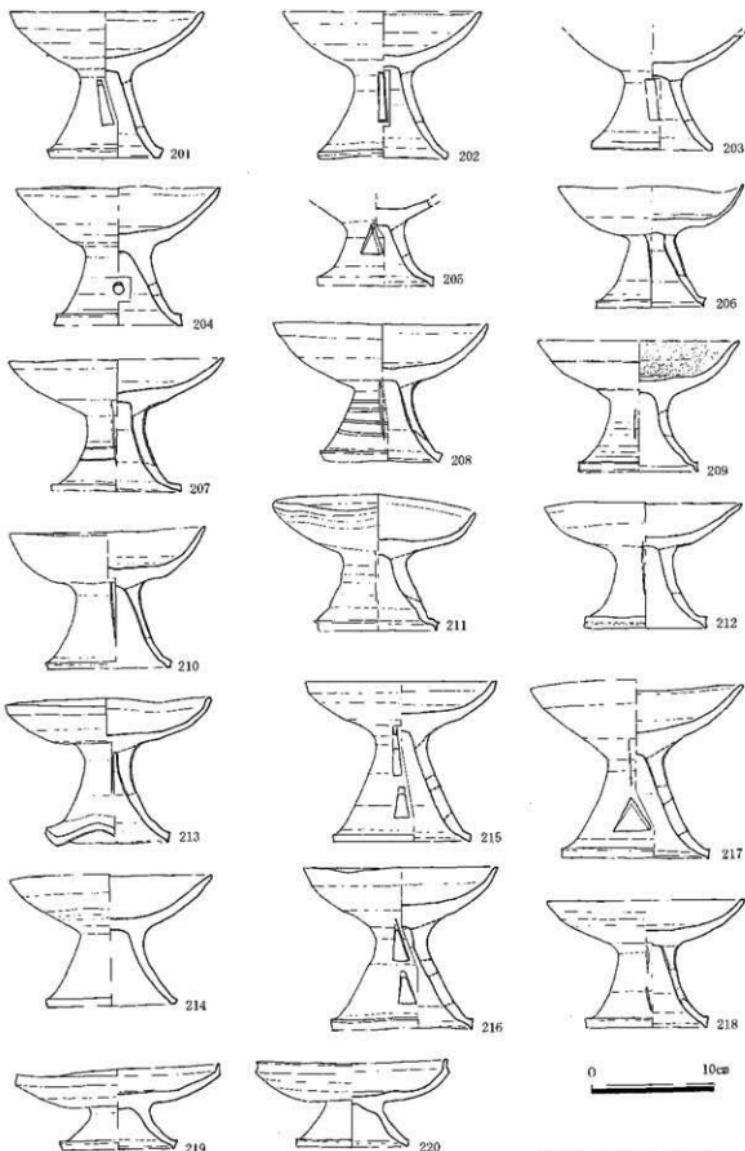


圖22 須惠器（高坏）

が付くものと考えられ、後者は深浅なく出土し無高台と考えられる。

305・307は胴部のみの残存であるが後者のグループであろう。303・305には体部に“×”のヘラ記号が、307には頭部に円形刺突文が施される。前者は大谷編年出雲7～8期、後者は5～6期であろう。

308は小型壺の底部で、底部切り離しは回転糸切りである。坏身である可能性もある。309～311は壺の底部で309は無高台、310・311は高台が付く。309は胴部下半から回転ヘラケズリし、底部はヘラ切り後ナデる。310は高台にすかしの退化したようなヘラ切り痕が認められる。309は出雲

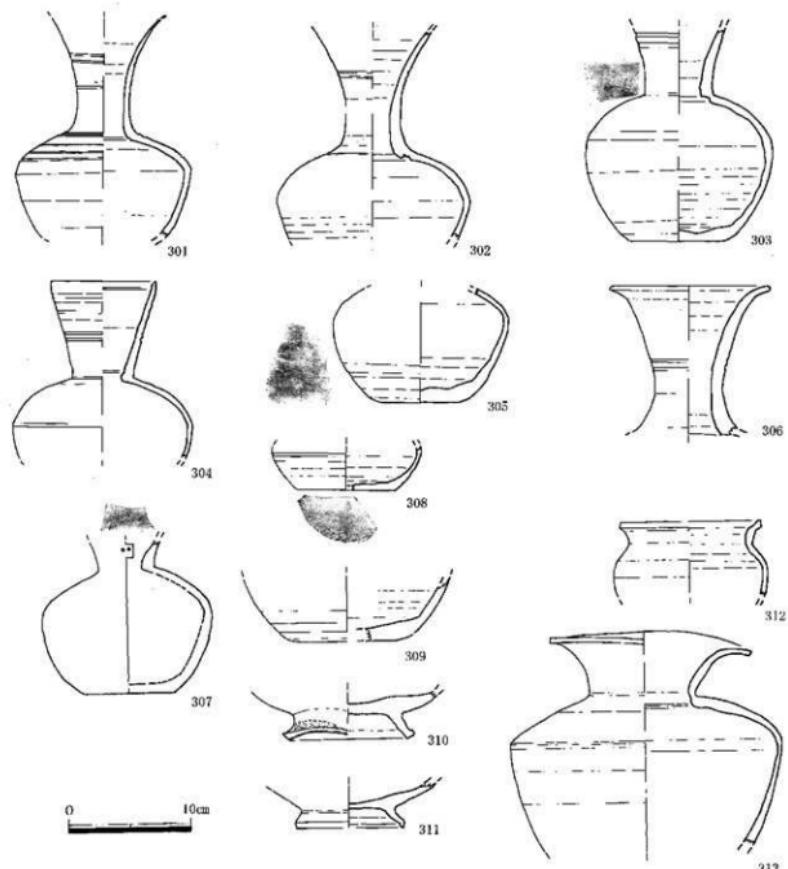


図23 須恵器（壺）

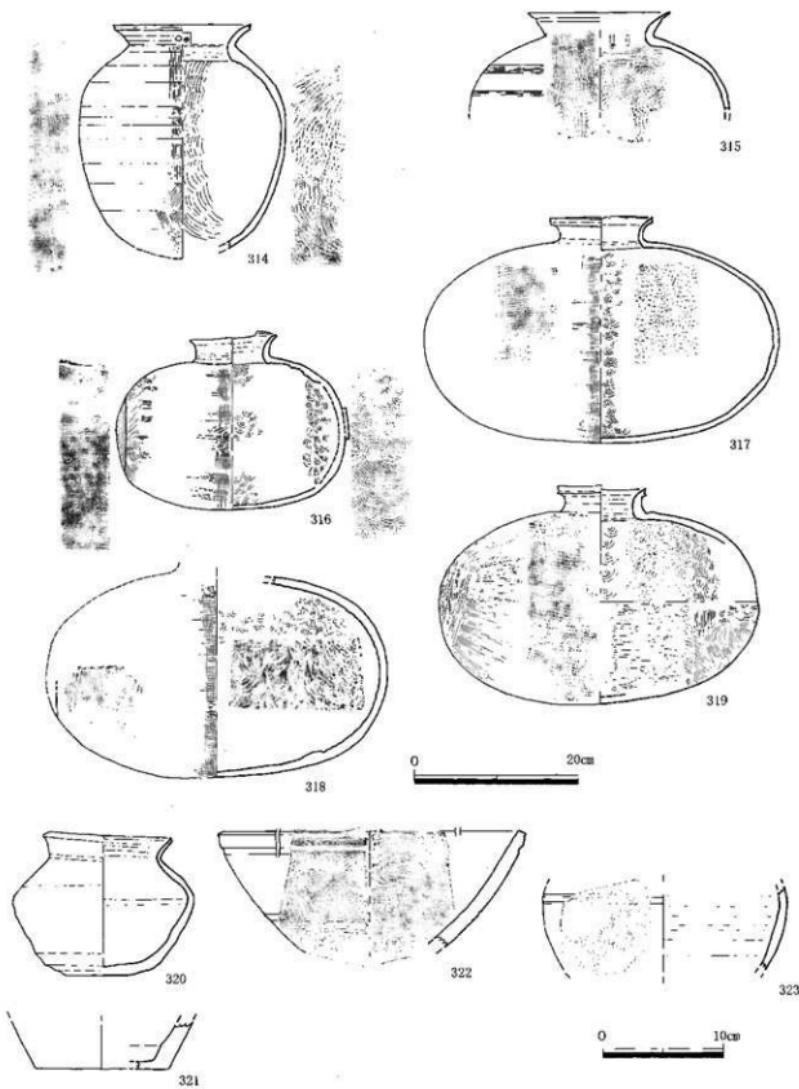


図24 須恵器（壺・横瓶・他）

5期、長い高台を有する310・311は6期の範疇であろう。312は小型壺で口縁外面にはっきりと稜をもつもので内外とも回転ナデである。313は広口壺で口縁は広くラッパ状に外反し、肩は強く張る。

314・315は壺である。314は口径16.7cm、器高28.8cm、最大胴径25.0cmを測り、容量を推算すると7.3ℓほどである。頸部から短く外反した口縁外面には面をつくり、外面は格子状タタキ、内面は同心円状タタキを施す。頸部には円形浮文と四弁の単花文？が横並びに施される。窯印であろうか。315は頸部から短く外反した口縁は先尖り気味におさめるので、内外面タタキ調整で、外面・口縁内面に灰釉を被り淡い緑色を呈す。

316～319は横瓶である。何れも03年度4～7次出土である。316～318には重ね焼きの痕跡が認められ、316・319には閉塞取り付けの痕跡がある。316には外面に須恵器片が付着している。316～318は外面はタタキ、カキメ調整し、内面は同心円状タタキを施す。319には外面にカキメ調整はみられない。316は口径10.5cm、器高21.7cm、胴長28.0cmを測り、口縁は頸部から単純に外反する口縁である。317～319は口径11.0cm～12.7cm、胴長40cm前後と316より大型の一群である。口縁端部も317・319は外面に稜をもち面をなす。

320は短頸の壺で内外面とも自然釉を被る。底部周辺はケズる。321は底径11cmを測り砂粒を多く含むが焼成はよい。焼締陶であろうか。322は鉢形状のもので内外の特徴的なタタキがみられる。323は排土上出土のもので器形は丸味を帯びる破片で、外面には櫛状工具による紋様、その直下に2条の沈線が巡る。その他は回転ナデ調整である。321～323は上器溜りの中心となる時期よりやや下る時期のものであろう。

以上、様々な須恵器をみてみると遺物のボリュームが増す中心となる時期は7世紀後葉～8世紀中葉と考えられる。

註

※1 「史跡出雲国府跡『風上記の丘』地内遺跡発掘調査報告書14」P145に、14号土坑出土遺物は环身底部の切り離しは静止糸切り・回転糸切りの両者があるが、前者の比率が高い（8世紀前半）、5号土坑下層出土遺物の环身底部の切り離しは回転糸切り（8世紀後半）とある。

※2 島根県教育委員会：『史跡出雲国府跡』昭和50年3月

参考文献

島根県教育委員会：『高庄遺跡発掘調査報告書』1984.3

大谷晃一：『出雲地域の須恵器の編年と地城色』『島根考古学会誌第11集』 島根考古学会 1991

島根県教育委員会：『家の協遺跡 荻田遺跡1区 前田遺跡4区』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』2004.3

島根県教育委員会：『家の後1遺跡 垣ノ内遺跡』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』2003.3

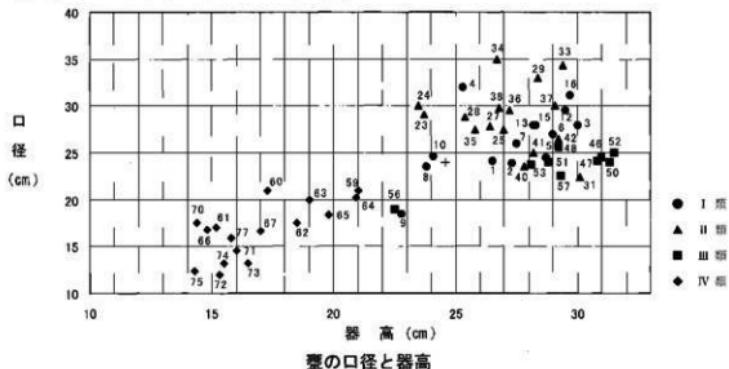
松江市教育委員会：『出雲国庁跡発掘調査報』1970

大川 清 鈴木公雄 工業普通 鑑：『日本土器事典』 雄山閣 1996

2) 土師器類 (図25~51)

土師器は34845片を数え、土器溜り出土遺物全体の約97%を占め、その内訳は壺類・土製支脚・瓶等であった。それぞれ250点・50点・14点を復元した。なお、赤彩土器・製塙土器・手捏ね土器・七馬については特殊遺物として後述する。

図25~38は壺類である。今回出土した壺類は個体数で言えば、250点を超える。これだけまとまって出土するのは近隣では希有な事例である。また、底部が平底というか、“へたる”形のもののが多くみられた。この壺類を残りの良いものを中心に形状に着目し分類する。壺個々の詳細については観察表を見て頂きたい。口径・器高ともに計れるものは分布図にあげている。分布図の数字は図の個体番号と同じである。口径40cmを超える大型のもの（グラフには未掲載）、口径23~35cm・器高23~32cmの中型のもの、口径12~22cm・器高13~22cmの小型のものとはつきりと分布がまとまっている。これは、壺の使用用途によるものかどうか判らないが、製作時に既に意識的に造り分けていると考えることができよう。



I 壺 … 中型・大型の品で、底部が丸底を呈すもの。

II 壺 … 中型・大型の品で、底部がへたり^{てたり}底（平底）を呈すもの。

III 壺 … 中型・大型の品で、長胴型を呈すもの。

IV 壺 … 小型のもの。概ね口径が20cm以下のもの。

V 壺 … 上記の分類が不可能なもの。

また、この壺類についても煤・コゲ等の有無での分類も試みた。

I 壺 (1001~1022)

ここに分類できたものは22点である。口縁部は総じて頸部で強く屈曲し短く外反した端部を丸くおさめるものが多いようである。この中で外面調整がハケメのもの (1004・1006~1008・1019・1021) とナデるもの (1001~1003・1005・1009~1018・1020・1022) がある。1006・1019は外面

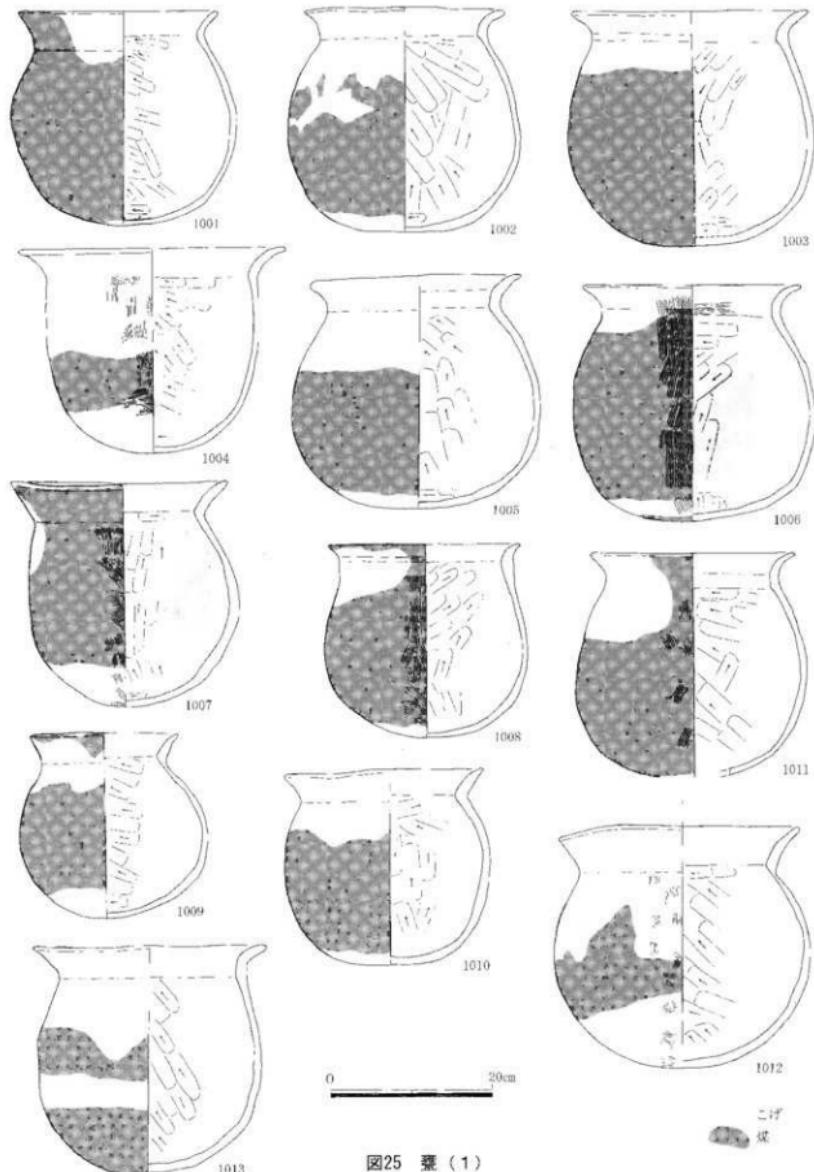


図25 罩 (1)

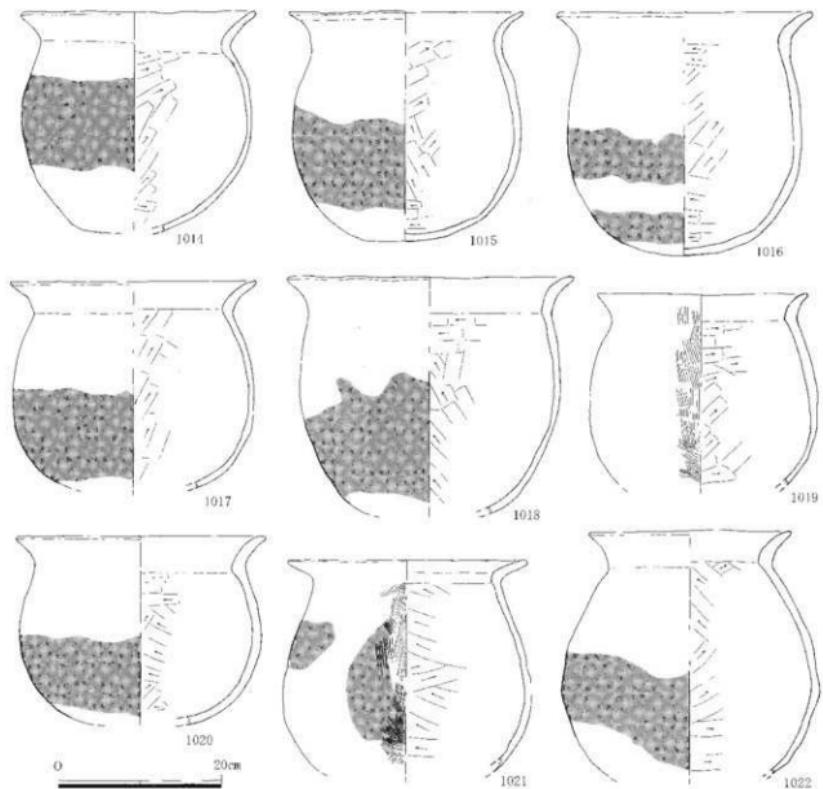


図26 壺(2)

だけでなく内面口縁～頸部にも横方向にハケメがみられる。内面頸部以下はケズリ調整である。口径<胴径タイプの安定した壺がほとんどであるが、口径>胴径タイプ、やや錐型にちかいもの(1004・1016・1018・1020)も数点みられる。1001は外面の煤の付着が底部から口縁にかけて帶状に3単位みられる。このことは他のものでははつきりとは判らなかつたが、この個体に限っては土器の下に支点を三つ用いて煮炊きした明確な証拠と考えられる。

II類(1023～1045)

II類は底部を意識して平坦に作っているグループである。I類と比して外側ハケメ調整のものが目立つ(1023・1026・1027・1029・1032・1036・1037・1043～1045)。内面は頸部までがナデ、

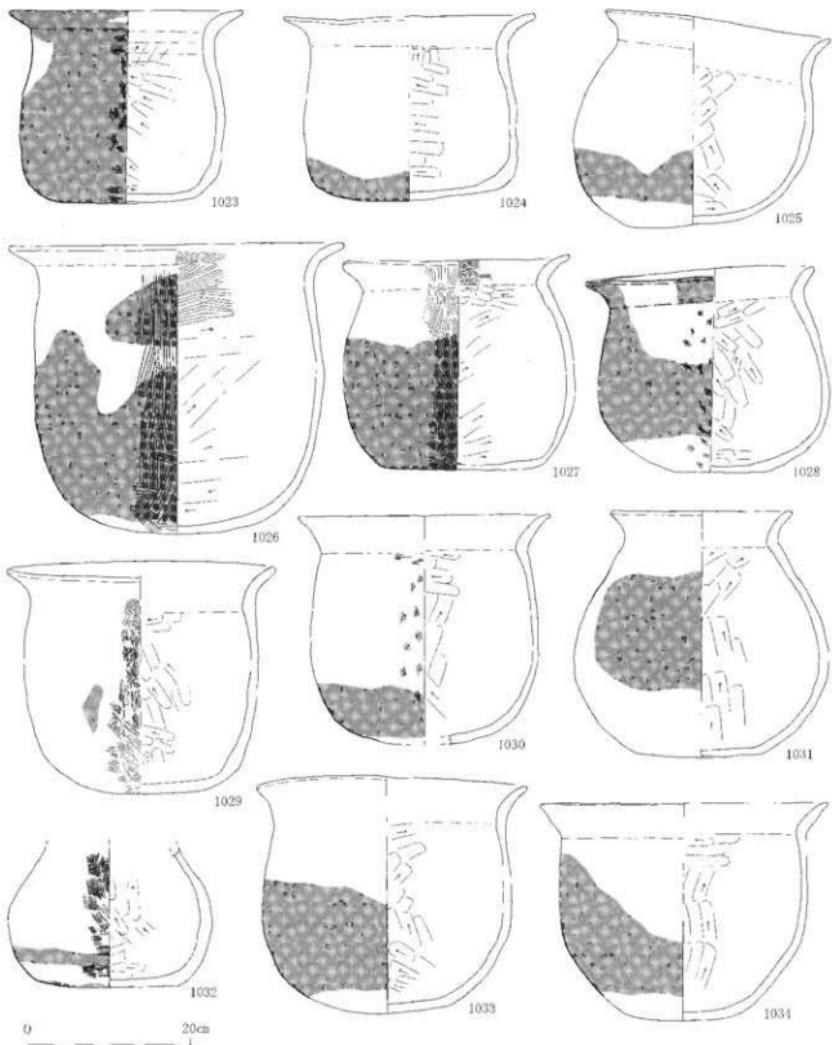


図27 青 (3)

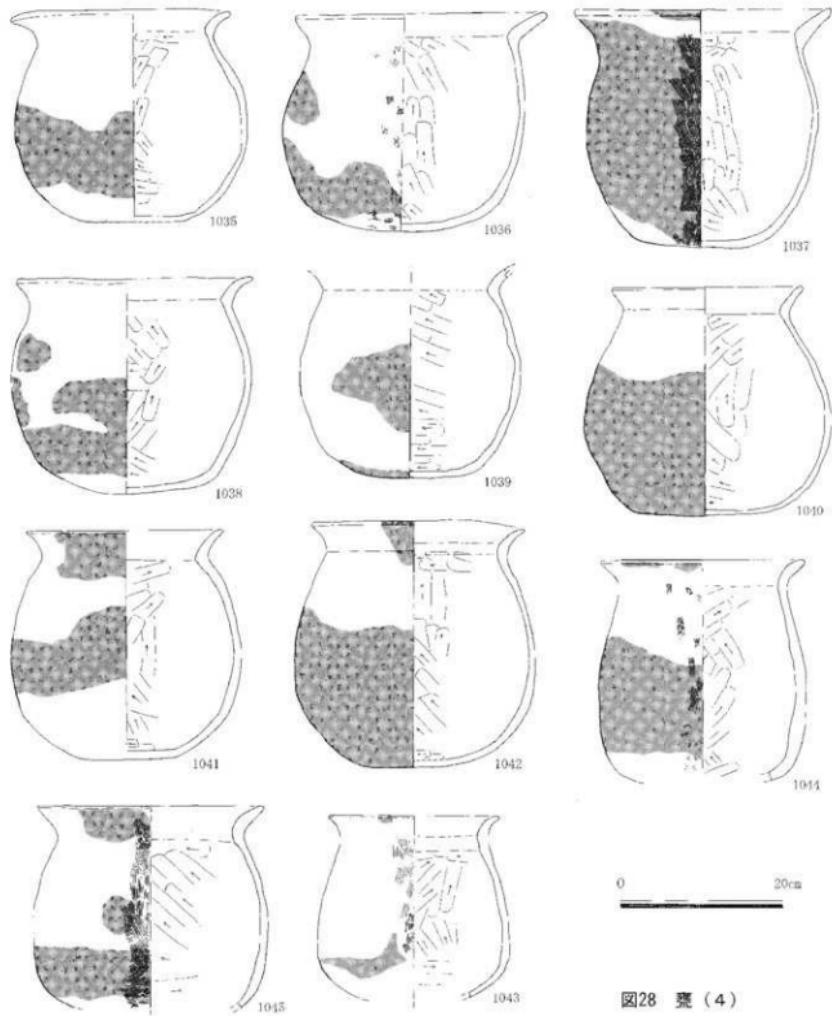


図28 壺(4)

以下をケズルものが大半であるが、頭部までハケメ調整するもの（1026・1027・1045）もある。口径>胸径タイプがI類よりやや立つ（1023・1024・1026・1029・1030・1033・1034・1036・1037）。これは製作上、底部がへたり底の為どうしても口縁が開き気味の鍋状になるからではなかろうか。

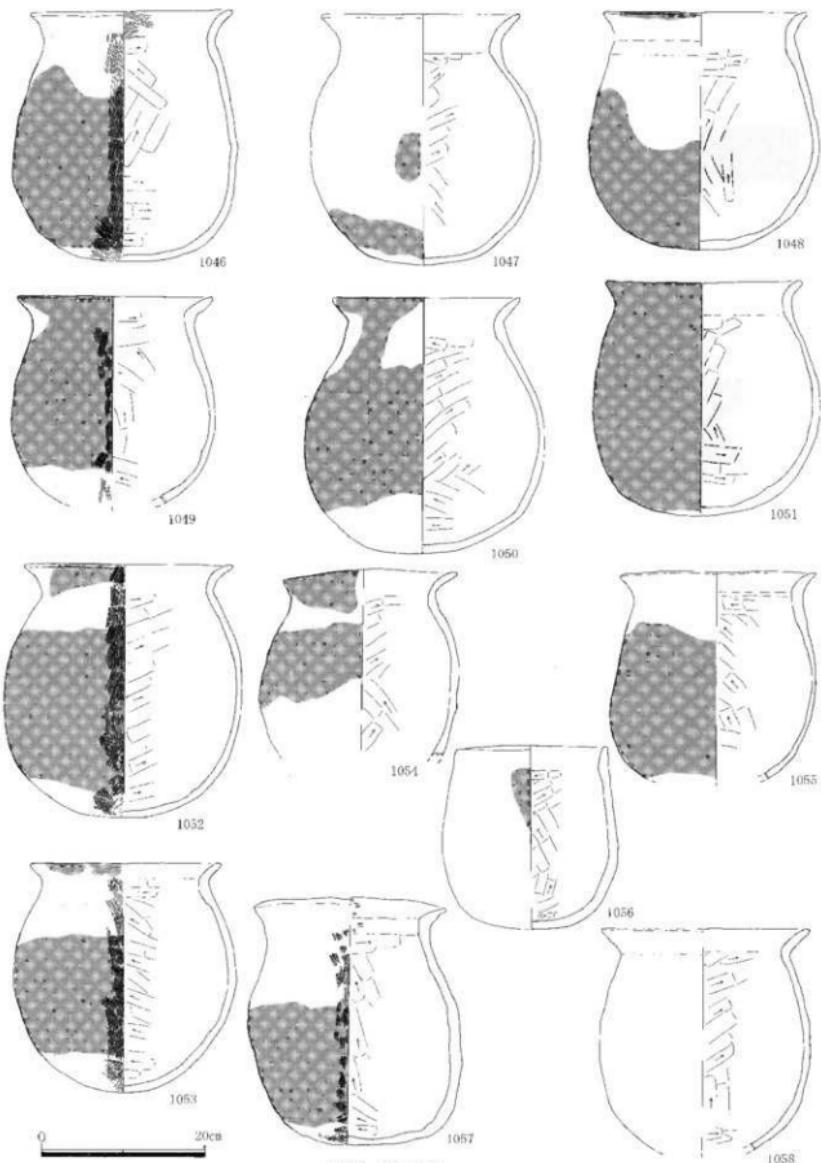


図29 蕤(5)

III類（1046～1058）

III類は胴部が“ウリ”状を呈し、胴最大径部が下位に下がった位置にある長胴型のグループである。口縁部は概ね頸部で屈曲し外反するタイプであるが、1056のように頸部から口唇部まで直線的に伸びるものもある。外面調整はナデるもの（1047・1048・1050・1051・1054・1056・1058）とハケメのもの（1046・1049・1052・1053・1057）があり、1055はハケメを施した後、丁寧にナデ仕上げする。内面頸部以下は総じてケズる。

IV類（1059～1092）

IV類は全体に小型で口径が概ね20cm以下のものである。ただし、1078以降は口縁部のみの残存で口径にのみ頼る。外面調整がナデのものが大半であるが、ハケメ調整のもの（1059・1064・1065・1068・1077・1079・1083・1086・1087・1089・1090）もある。1066・1067・1080は全体的にはナデ調整であるが一部ハケメがみられる。内面口縁部にハケメが施されるのは1079・1086・1087で、その他はナデる。

V類（1093～1236）

V類は上記I～IV類への分類が個体の残存が僅かの為、若しくは分類にあたっての着目部が欠損している為、分類不可能であったものである。V類にしたものは口縁部は残存又は図上復元し得たものである、口径、調整により大まかにグレーピングし掲載している。総じて縫れた頸部からやや外反気味に短く肥厚する口縁端部である。1093～1125は口径30cm以上のもの。この中で1111～1125は外面に、または内外両面がハケメ調整のものである。これ以外はナデ調整である。1126～1226は口径が20～30cmの中型のもの。この中で1182～1226は外面にハケメがみられるものである。1227～1236は口径20cm以下のものである。この中で1231～1236にはハケメがみられる。ハケメ調整としたもの以外のものは基本的にナデ調整である。

壺の煤・コゲの付着状況について

今回、土器溜りから出土した壺の大半には煤・コゲ等の付着がみられた。ここでは上記の壺の形状と煤・コゲの付着状況で分類可能なものに限りとりあげ個々に観察した。

外面の煤、内面のコゲについては以下のように分類する。

- A a類…外面に煤があり、内面にコゲがあるもの。
- A b類…外面に煤があり、内面にコゲがないもの。
- B a類…外面に煤がなく、内面にコゲがあるもの。
- B b類…外面に煤がなく、内面にコゲがないもの。

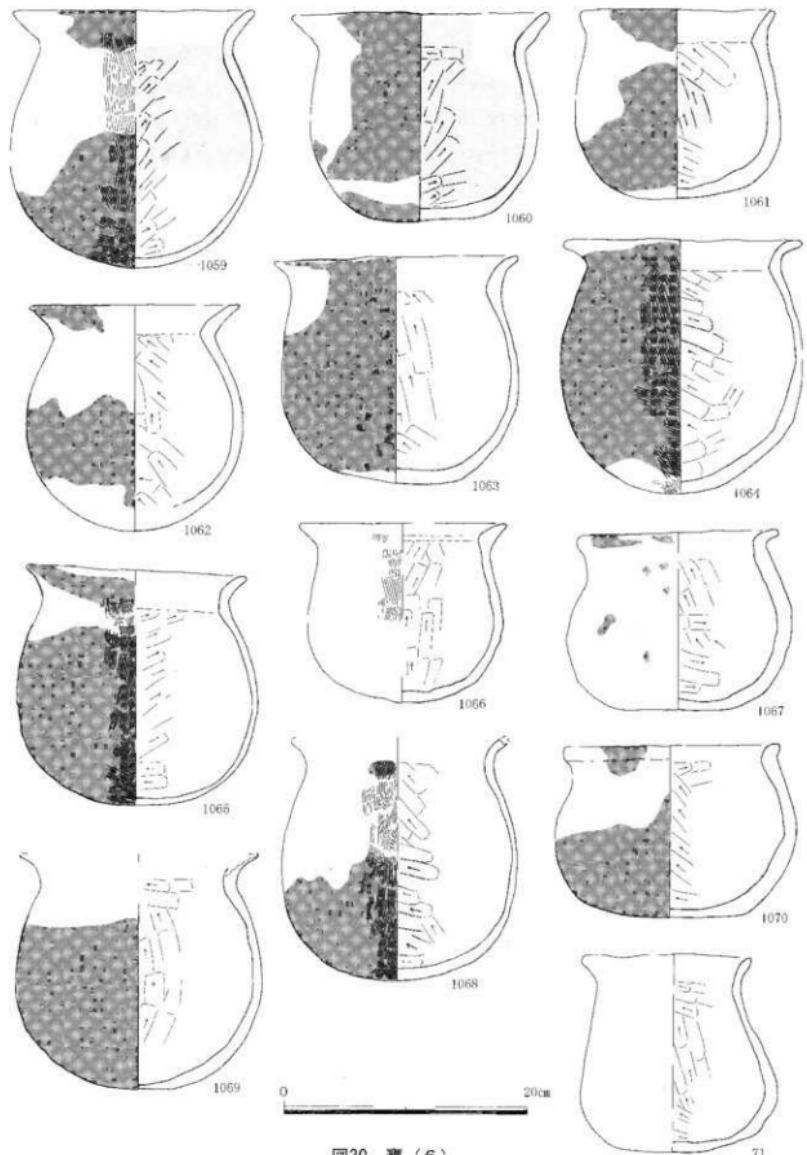


図30 薫 (6)

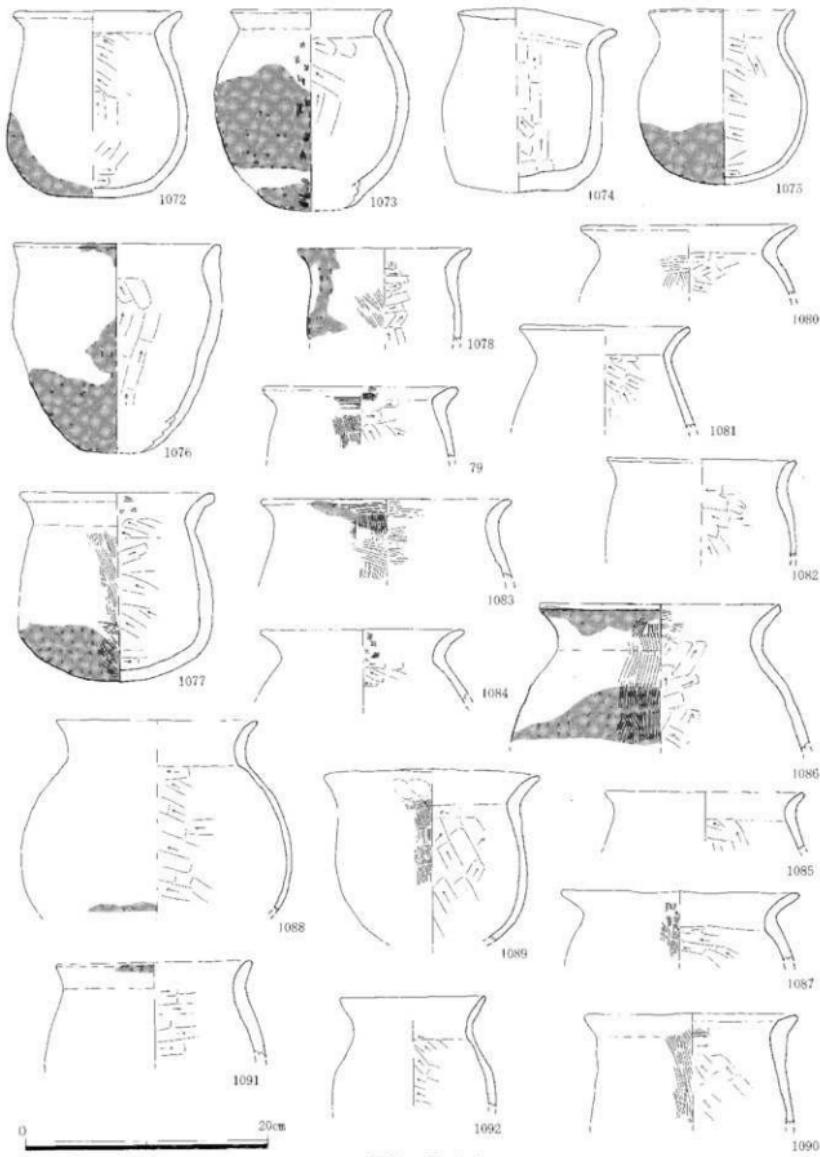


図31 罋(7)

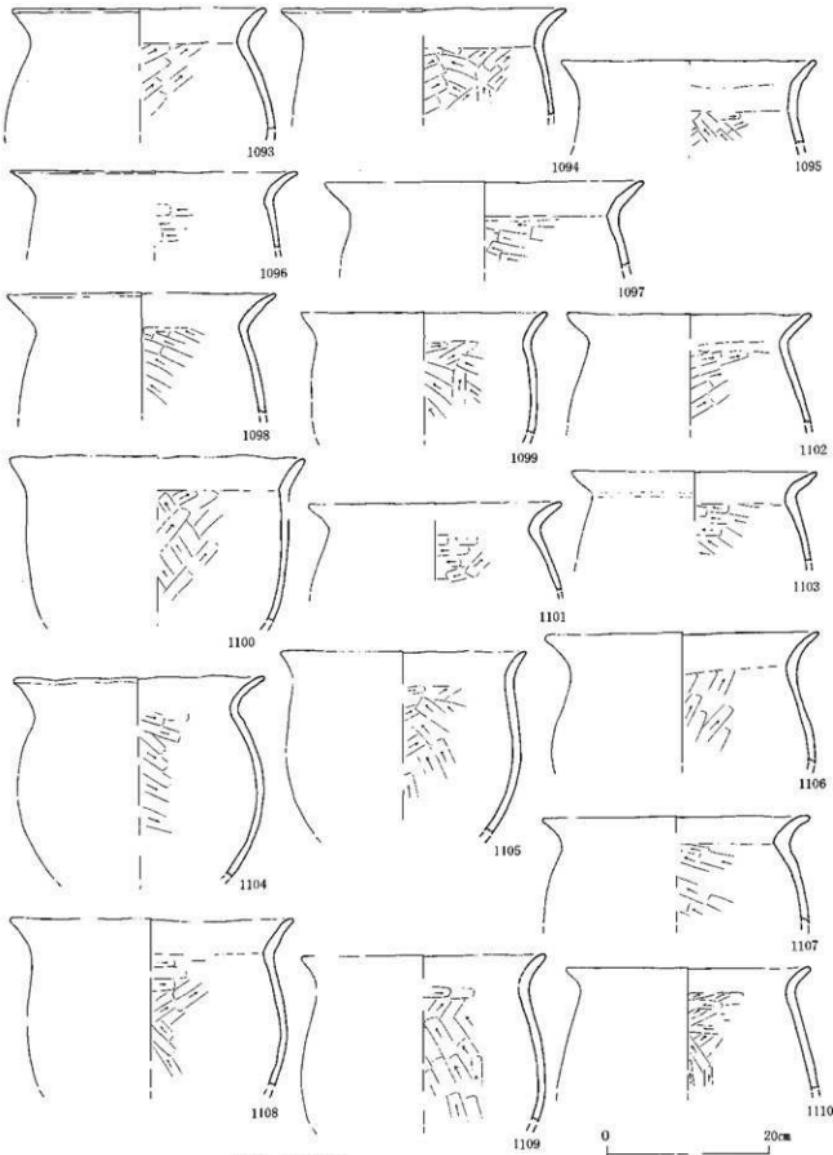


図32 壺(8)

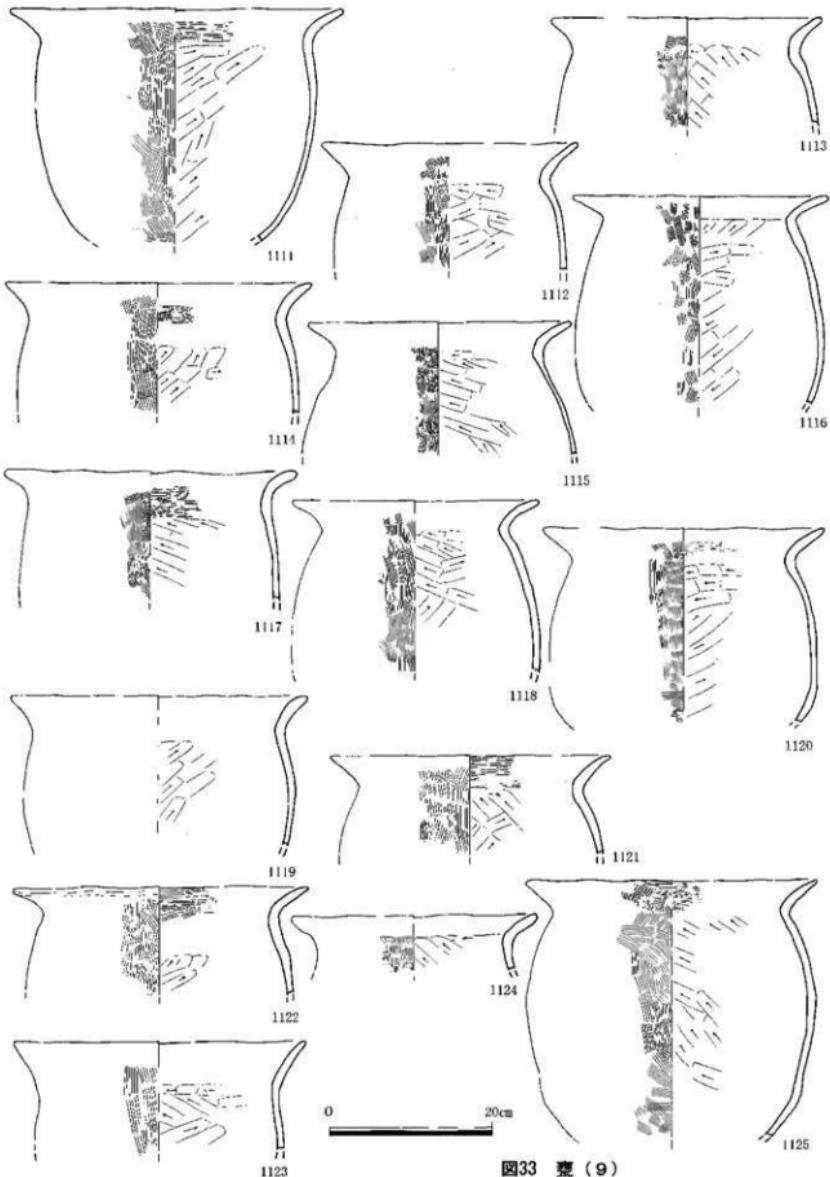


図33 壊 (9)

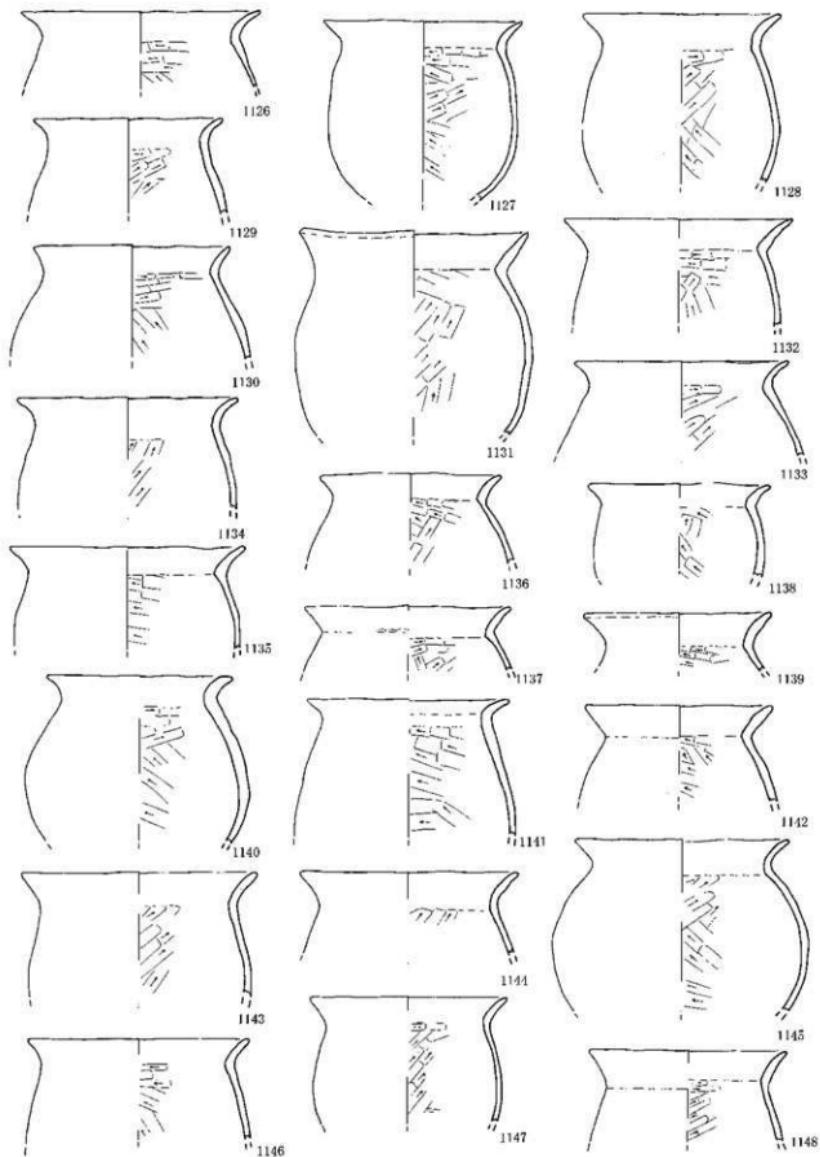


図34 壺(10)

0 20cm

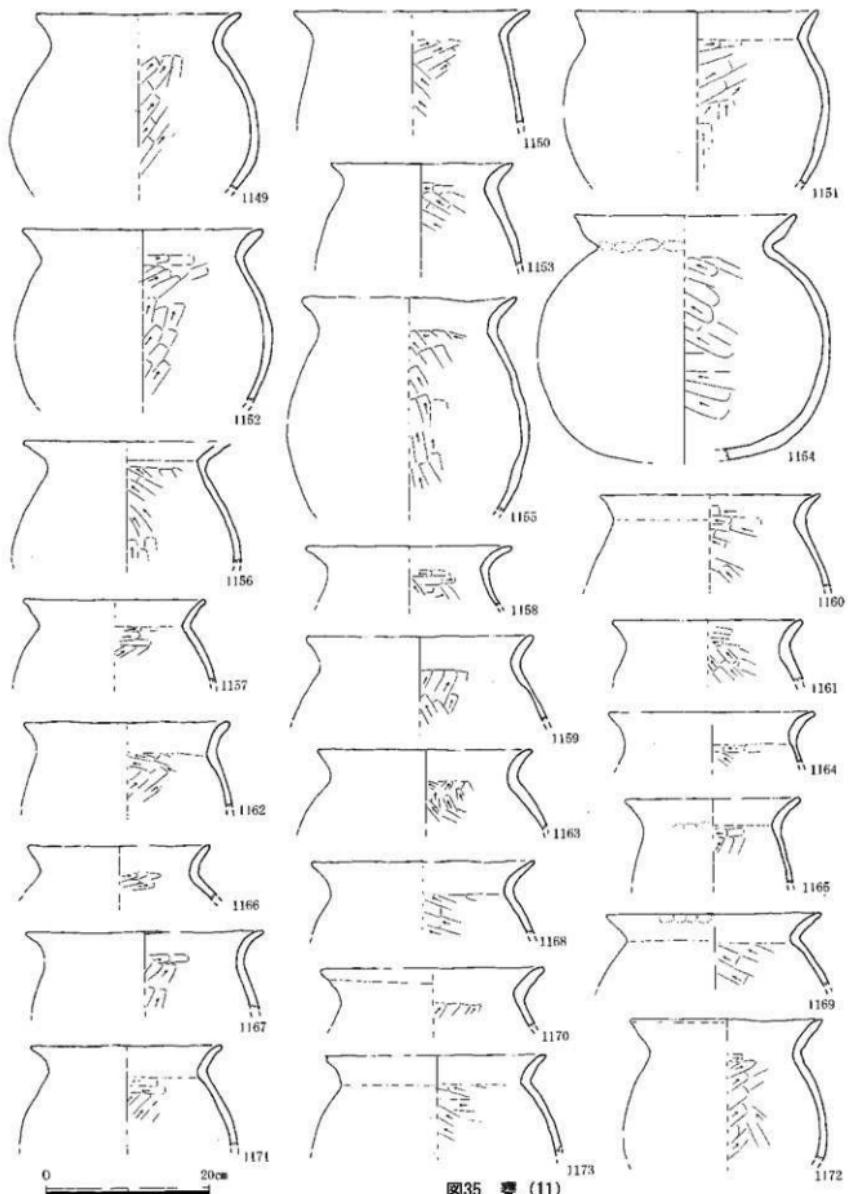


図35 積 (11)

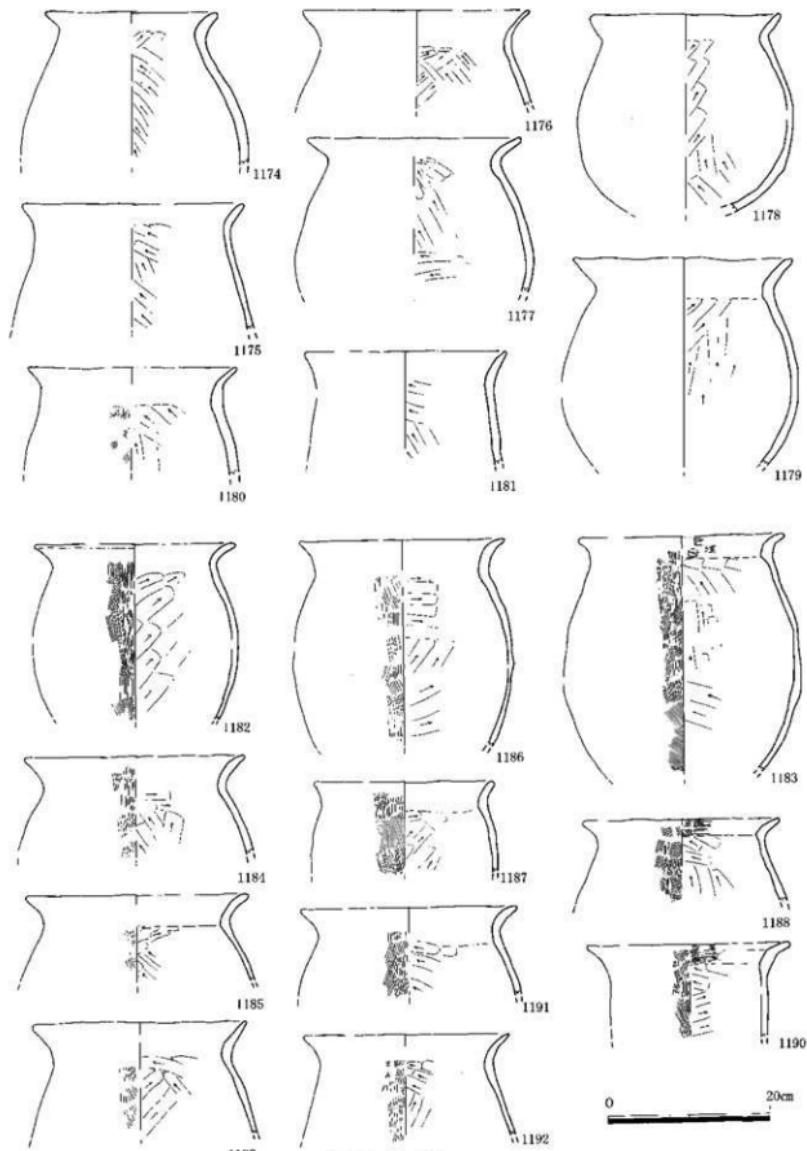


图36 岩 (12)

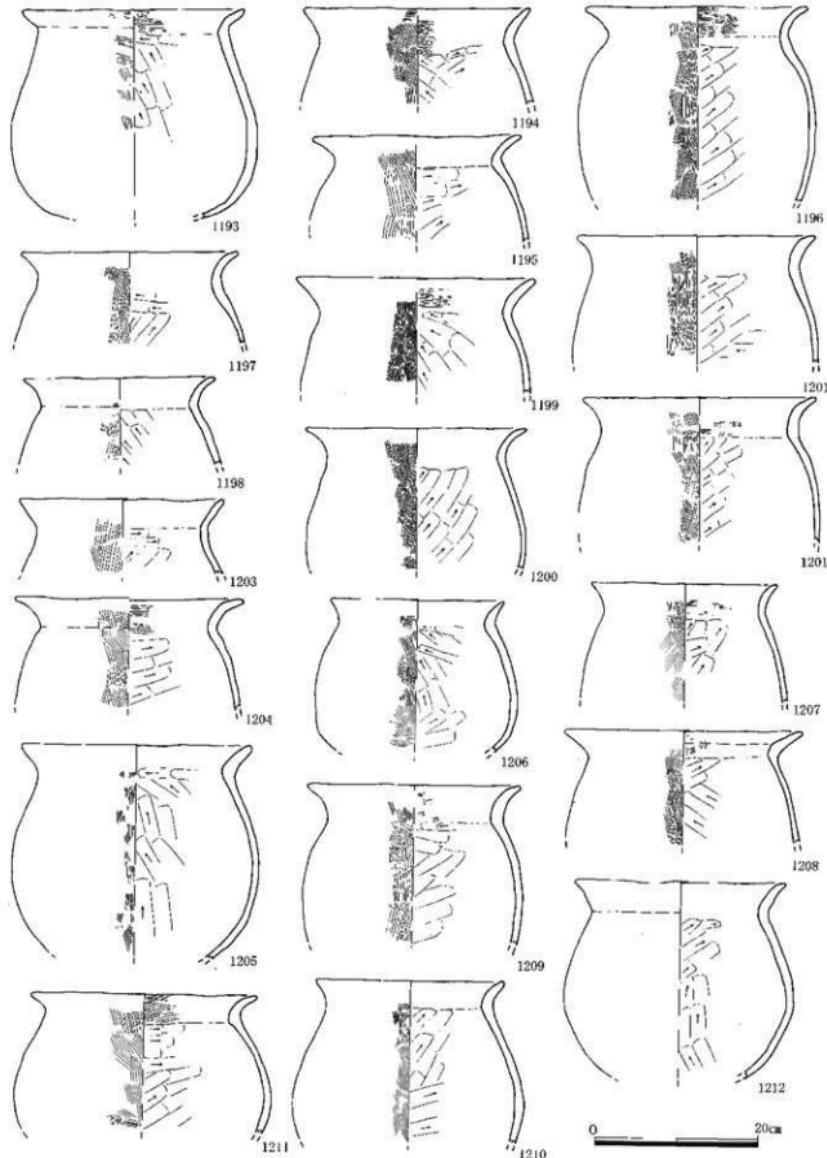


図37 壘 (13)

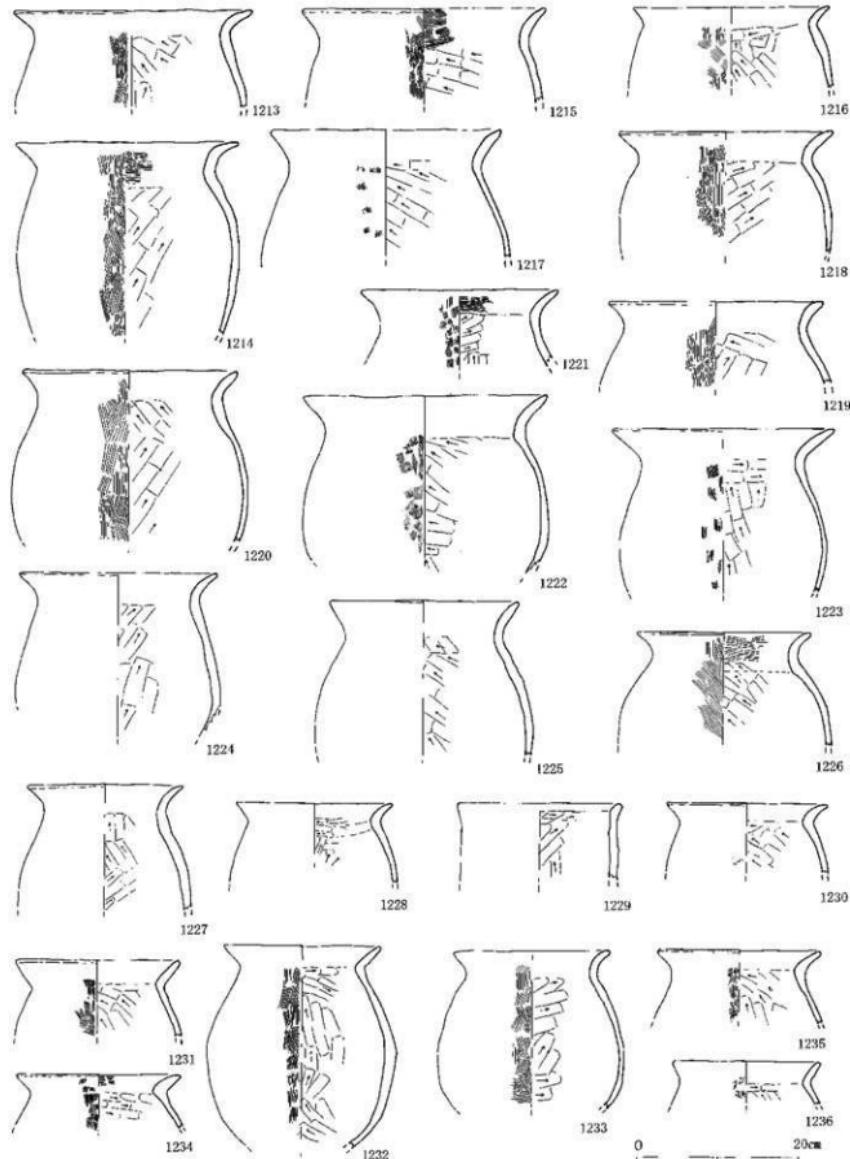


図38 窓 (14)

A a 類は甕の内部にものを入れて煮炊きした痕跡のあるものである。A b 類は内部にはコゲがないので水等の液体状のものを入れて火をかけたものであろう。B a 類はいずれの形状でもOであったが外面から火を受けずに内面にコゲをつくるのは物理的にあり得ないのは当然である。B b 類は内外面ともコゲ・煤の付着がないもの。これは煮炊きをせず貯蔵用の容器として用いていた可能性と祭祀用に形式的に用いられたため、の二通り考えられる。

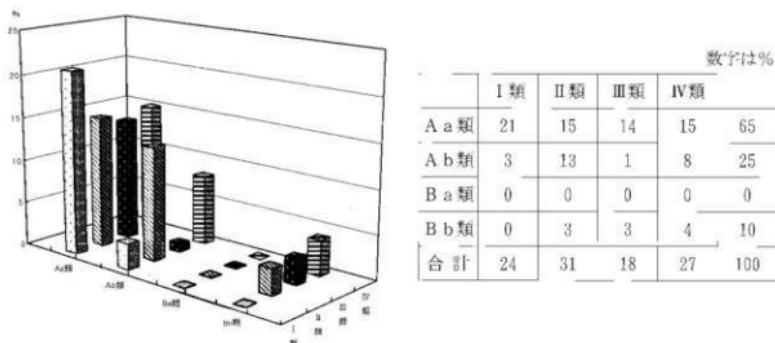


図39 甕形状とコゲ・煤の付着状況

外・内面の煤・コゲの有無と甕の形状に着目し分類したのが、上記のグラフ・表である。分類に必要な情報を得られる部位が残っているもので分類可能な71個体を100%とし、それぞれの数値を%で示している。

どの形状の甕でもA a 類が一番多くみられる。小型のIV A a 類の存在は形状・法量により調理の用途が違うことを意味しているように思われる。

I類のB b 類がOであるのは丸底で煮炊きに使用するなど、土製支脚等何らかの上に乗せるのにはいいが、直接地面等に置くには安定感が悪く貯蔵用に向かないためであろうか。I類の約90%はA a である。ということは丸底を呈するI類はほとんどのもので内面にコゲが付着しており、中にものをいれて煮炊きする専用のものであった可能性がある。

II類ではA b 類の割合が他と比べ高いのが目に付く。外面に煤が付き、内面にコゲがないのは水沸騰用で上に蓋を乗せる専用の甕があったことの可能性を示すものではないだろうか。土器溜り出上の復元し得た甕と甕の対になる関係は決め手に欠け確定出来なかったが、中には内面口縁～頸部にかけて肌が擦れていて甕の使用を窺わせるものもあった。また、26は口径40.4cmと大形の甕であるが、復元した甕でこの大形の甕に乗りうるものは存在しなかった。外面には煤が付着している為、貯蔵用とは考えにくい。単純に液体を沸騰させたか、対となる瓶片を復元できなかつたか、どちらかであろう。

III類とIV類はほとんど同じような割合であるが、IV類のA b類がやや高めの数値を示している。小型のIV類に相応しい瓶はなかったので、これは単純に液体を火にかけたのであろう。

I類以外のB b類が僅かばかりの数値を示している。これは穀物等の保存用か、小型のIV類については、保存用とは考えにくいので、ここでの祭祀の大半が日用品を使用しているが極稀に祭祀用の小型品を用いていた、ということになるのであろうか。

煤・コゲ付着の甕について気づいたことをあげてみた。大量の甕片が出土したとはいえ、完形に近いものしか対象にできずやや客観性に欠けるかもしれない。また甕自体の使用回数や、今回は煤・コゲの付着の有無にのみ着目したが、それぞれの付着位置にも様々ありパターン化できるかもしれない。筆者の力不足で今回はこのようにまとめてみたが今後の反省課題である。

図40～42は甕である。

口縁部から基底部まではほぼ寸胴で、ほとんど窄まらないもの（501～507）と、胸部が張り気味で基底部にかけて窄まるもの（508～514）がある。

501・503・506～508・510・513・514は外側はナデ調整、内面は下方から上方へケズリで、502・504・505・509・511・512は内面は同様であるが、外側はハケメである。現存する破片についてしか判らないが、基底部直上に孔を有するもの（501・502・506・508・509・511）があり、501・502は90°の位置に4箇所の孔が認められる。把手についてみると形状は斜め上方に角状を呈すものが大半であるが、505・506は環状で、4は把手上方は器面に接してはいるが貼り付けてはいない、角状と環状の中間的なものである。501・503・507・508・510・512・513には焼成時に付いた黒斑が残る。

515～529は甕の把手片である。形状は上方に短く弧を描く角型のもの（515～525）と環状のもの（526～528）がある。517は角型のもののうち、明らかに小形で弧を描く形状でなく小突起状のもの。518・528には赤色顔料の痕跡が認められる。調整はナデ仕上げのもの（515・516・518・520・521・523・525～529）とハケメのもの（517・519・522・524）がある。

図43～47は土製支脚である。土製支脚は計532片出土したが、粉々に割れているもの、溶けてもろいものがほとんどで接合し、掲載できたものは50個体ほどである。これらを孔の有無・突起の形態により次のように分類した。²²なお、個体の詳細については観察表を載せている。

I-A類…2方向突起。胴部穿孔なし。

I-B類…2方向突起。胴部に貫通孔。

I-C類…2方向突起。胴部に非貫通孔。

II-A類…3方向突起。背面の突起は前方突起より短い。

II-B類…3方向突起。背面の突起は環状を呈する。

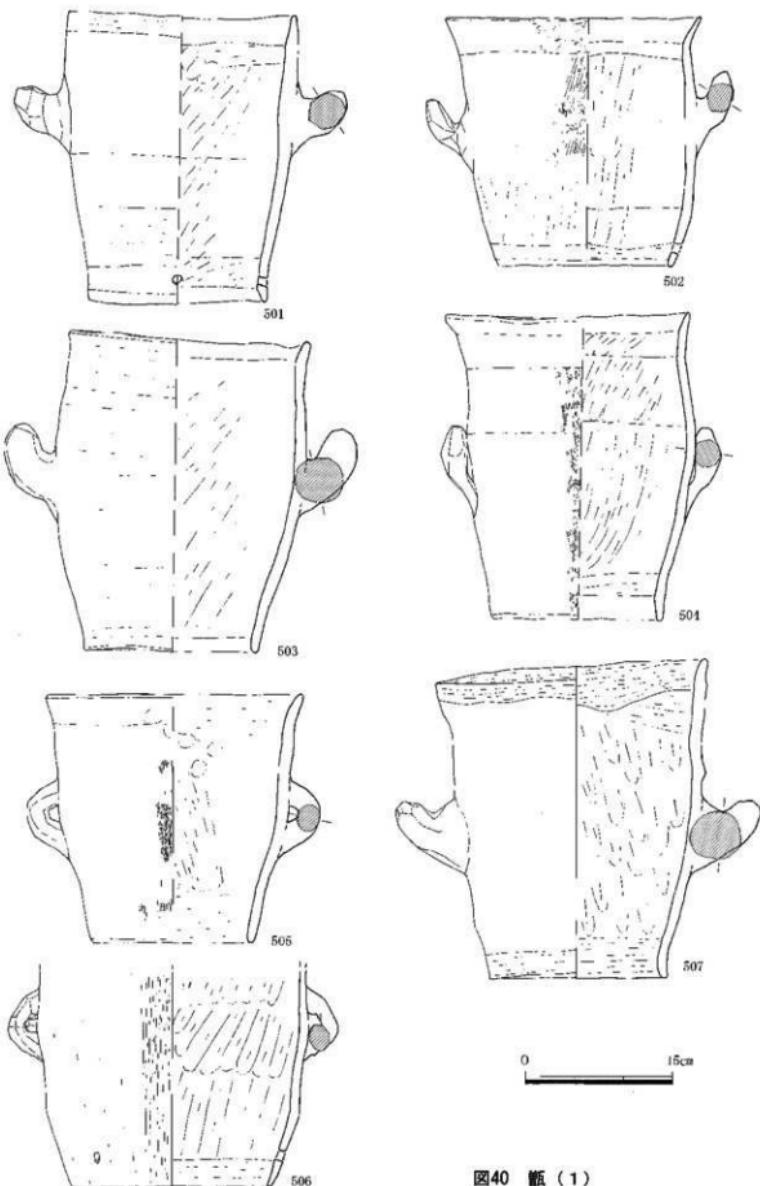


図40 甌 (1)

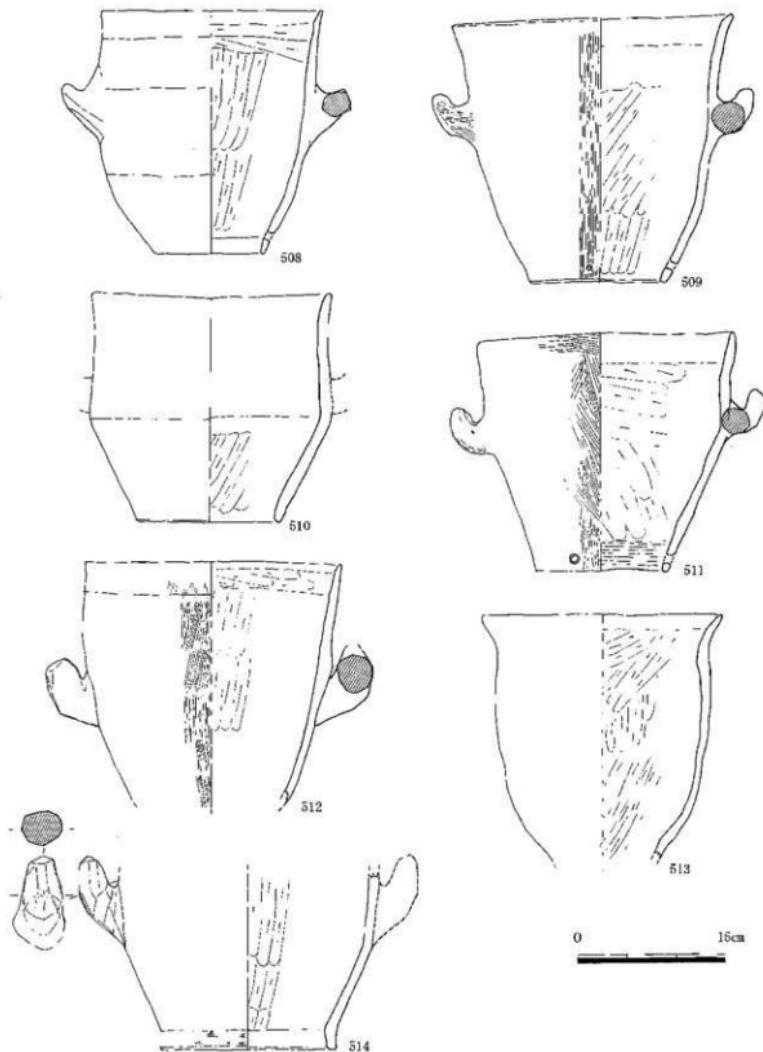


図41 甌(2)

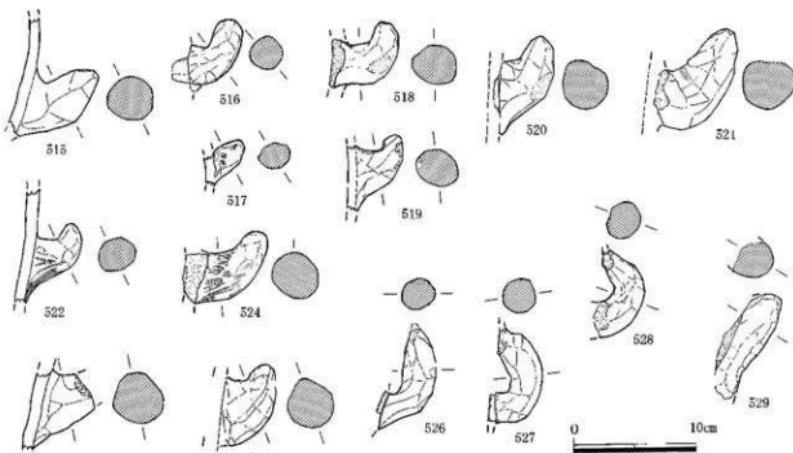


図42 把手

II-C類…3方向突起。背面の突起はヒレ状を呈する。

III-A類…3方向突起。胴部に貫通孔。

III-B類…3方向突起。胴部背面に非貫通孔。

III-C類…3方向突起。胴部は中空で上方から穿孔する。

IV-A類…1方向突起。胴部穿孔なし。

IV-B類…1方向突起。胴部に貫通孔。

IV-C類…1方向突起。胴部背面に非貫通孔。

上記のうち、本遺跡土器溜り出土の土製支脚は I-C類・II-B類・IV-A類・IV-C類の4種類であった。

I-C類 (601～615)

突起が2方向に延びるもので、胴部背面に非貫通孔を有するものである。

このなかでも、底面が平底のもの (601・602・605・606・609・610・612・614・615)、上げ底のもの (603・604・607) があり、底部に製作時についた繊維痕があるもの (601) があった。高さは14.9cm～19.1cmほどで、すんぐりした印象のものが多い。ここに挙げたものの中には、突起の非常に頗る小なもの (602・603・607・612～614) も含んでいる。背面の非貫通孔の進入方向は上向きのもの (601・610・611)、下向きのもの (602・603・605～607・609・614・615)、ほぼ水平のもの (604・608・612) がある。

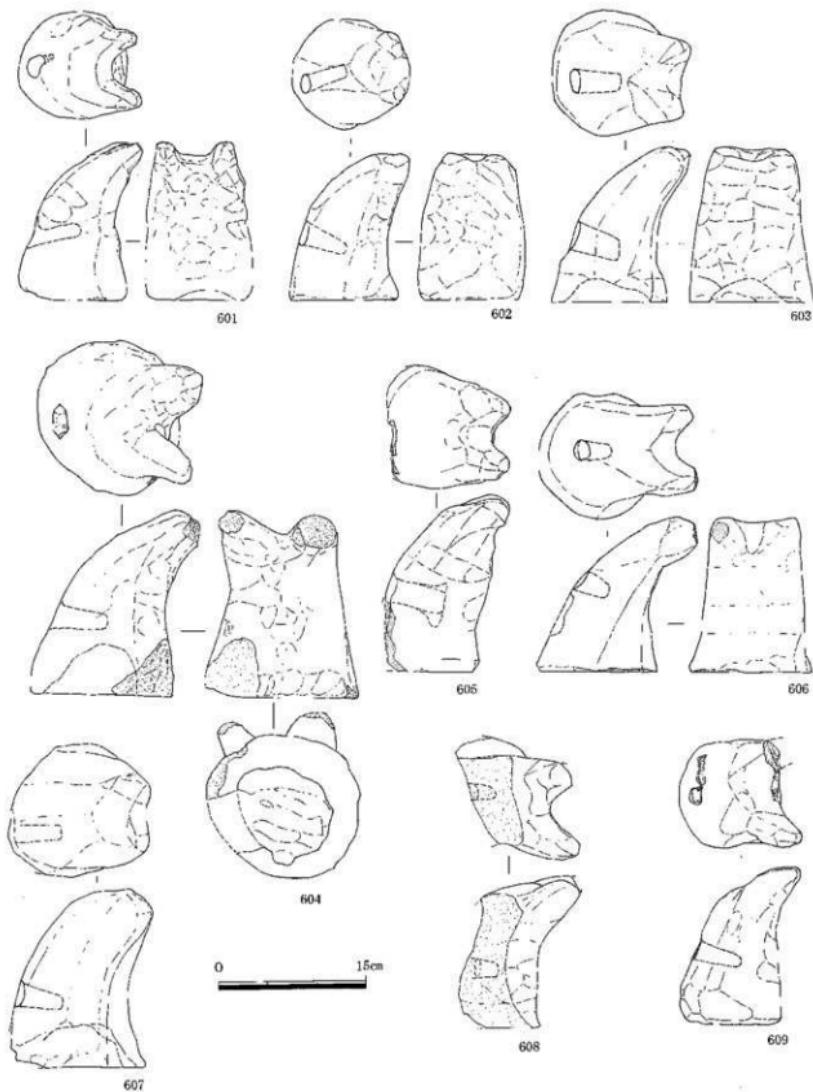


図43 土製支脚 (1)

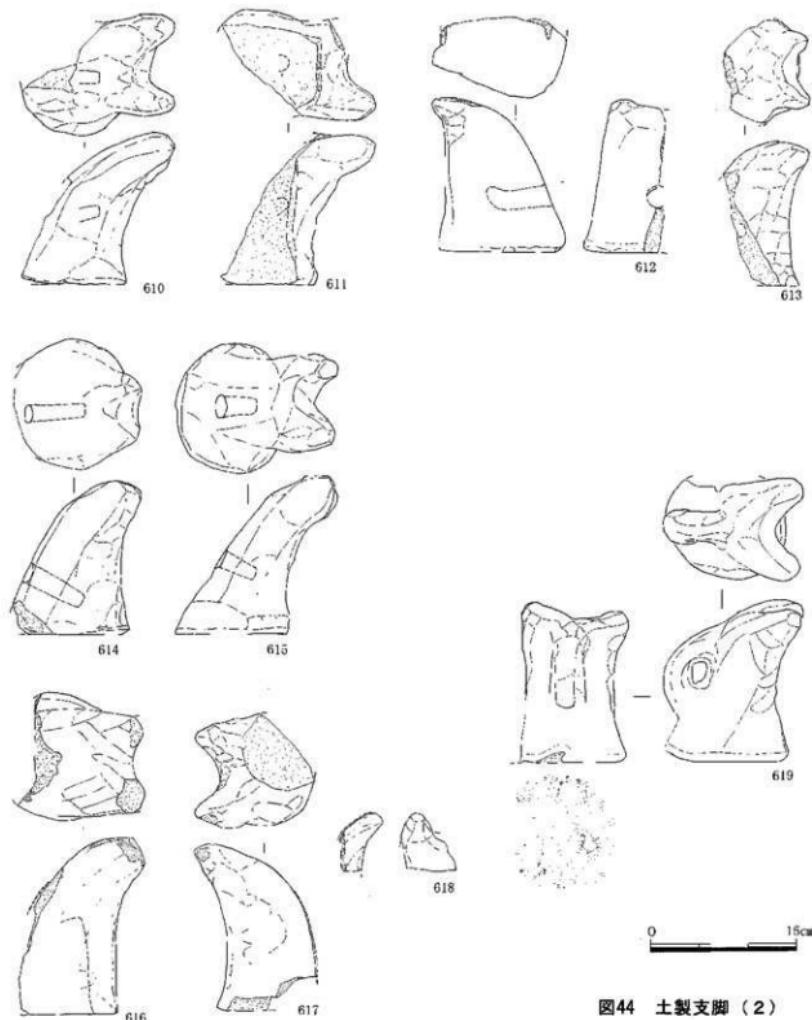


図44 土製支脚（2）

I類不明品（616～618）

突起が2方向に延びるが、胴部の穿孔の有無が不明のものである。

616はナデ調整で底部は上げ底、焼成は良好で明赤褐色を呈す。617は腹面に指頭圧痕が顕著で平底である。背面は半分が破損しているが、もともと穿孔がなくI-A類であった可能性もある。

618は破片の形状からI類の突起の片方であると思われ、焼成は良好でにぶい黄褐色を呈す。

II-B類 (619)

突起が3方向に延びるもので、背面突起は環状を呈すものである。

底面は平底で全面ナデ調整、腹面には指頭圧痕も認められ、橙色～暗灰黄色を呈し、焼きは良好のようである。高さは16.9cmで今回出土したものの中では中型の部類に属す。

IV-A類 (620～624)

突起が1方向に延びるもので、胸部に穿孔のないものである。

620は高さ15.3cm、残りが良く全体にナデ調整をおこなっておいる。底部は上げ底となっており焼成は良く、にぶい黄褐色を呈す；621は胸部背面に二箇所の浅い窪みがあるが、非貫通孔とは考えにくい。622は高さ14.0cm、砂粒を多く含む胎土で、焼きは良くなく明黄褐色を呈している。背面側が薄く破損し剥離しているが、穿孔は無いとみられる。623は高さ12.9cmを測る非常に小型の品で底部は平底、砂粒を多く含み焼成は不良である。表面は風化のため摩滅しているため調整不明。胎土、器形、質感等から622・623はセットのうちの二つではないかと思われる。624はほぼ完形で高さ15.9cm、ナデ調整し指頭圧痕が腹面に顕著である。底面は平底で、焼成は良く橙色を呈す。

IV-C類 (625～637)

突起が1方向に延びるもので、胸部背面に非貫通孔を有するものである。

底部に注口すると平底のもの (626・628・630・632・633・635・636)、上げ底のもの (625・629・637) がある。風化のため判別し難いもの以外はナデ調整でほとんどの個体に指頭圧痕が認められる。高さは13.6～19.1cmほどで、1方向突起としてあげているがずんぐりとしていて突起とは表現するには抵抗のあるものもある。背面からの非貫通孔は径が総じて1.5～2cm強ほどで、

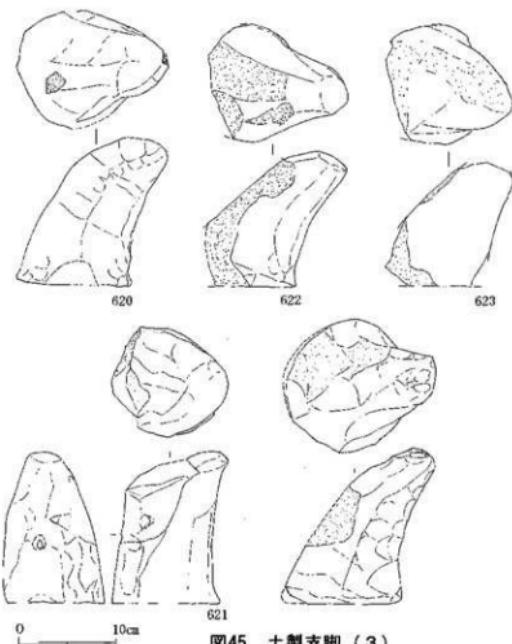


図45 土製支脚 (3)

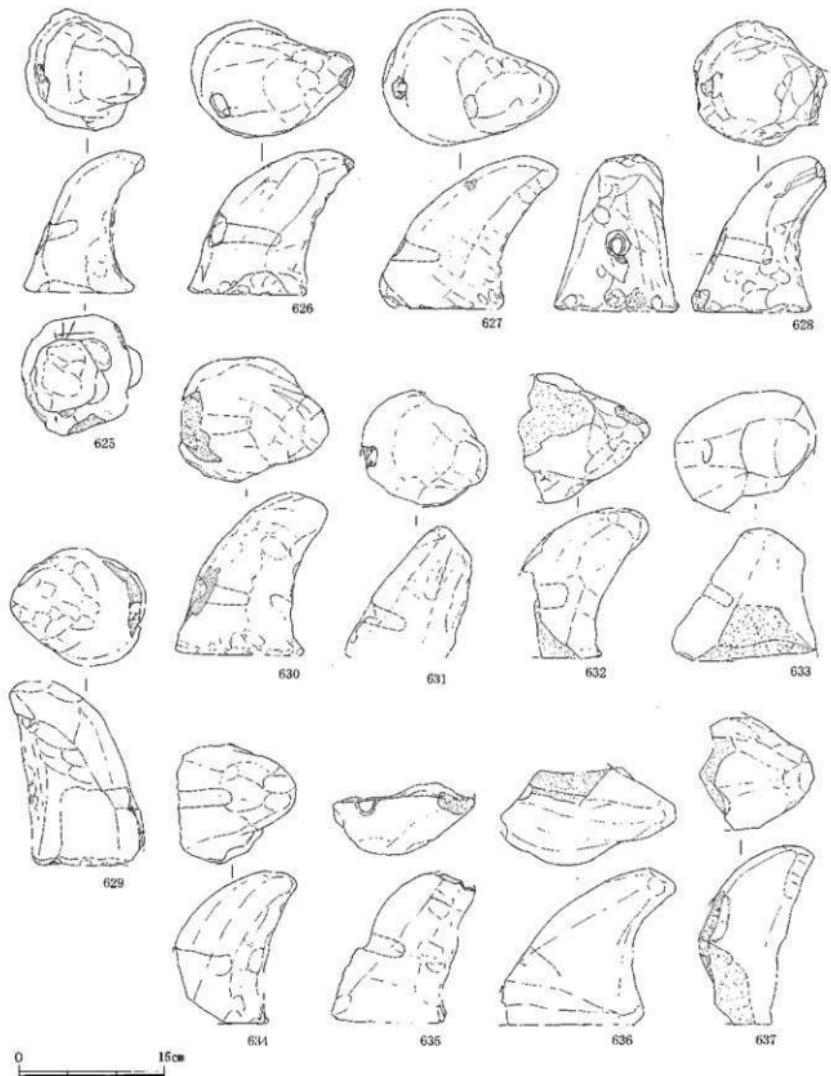


図46 土製支脚 (4)

孔の進入方向は上向きのもの（625）、下向きのもの（628・630・631・633・635～637）、水平のもの（626・627・629・632・634）があり、629は背面の孔が上げ底に貫通している。

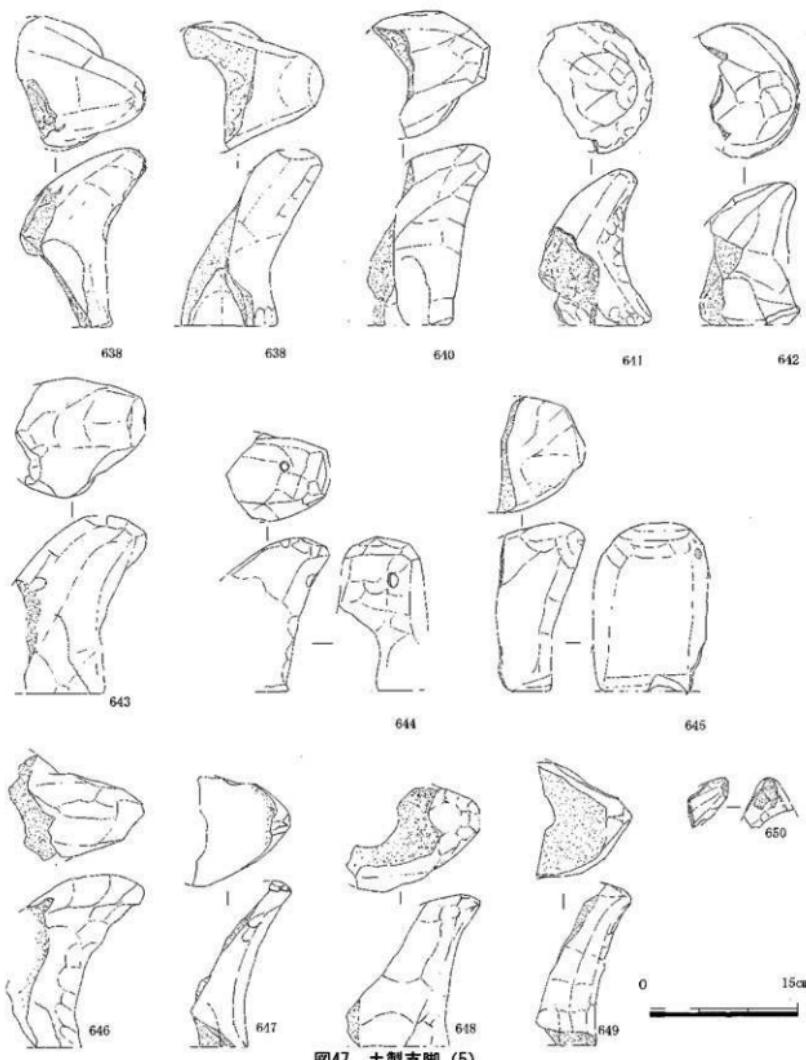


図47 土製支脚 (5)

IV類不明品（638～650）

突起は1方向であるが、穿孔の有無が不明なものである。
破損部位を見ると背面胴部から底部にかけてのものが多く、底部はほとんどが上げ底である。腹面側の底部が残り、背面側の底部が破損している状況をみると背面側に孔があり一番弱い部分が破損しているのではないだろうか。そうするとこの不明品に挙げたものほとんどをIV-C類に含むべきものかもしれない。

以上、形態毎にまとめたが、全体的に高さが高いものは底部が上げ底になる傾向が見られる。これは何を意味するのだろうか。焼成時に中まで火が通り易くするためなのか、粘土を節約するためなのか、この両方を意図したものか、何か別の理由からか、意図的でないのか判然としない。

今回、二つの角が極端小で瘤状のものもIV類として分類しているが、1方向突起と2方向突起の中間的、過渡期的なものとも思われる。ただ、半湿地状の土器溜り出土で出十層区分もまま成らず、I類のものとIV類のものが上下混在した状況であった。

この土器溜り出土の土製支脚の年代は、同じく土器溜り出土須恵器等から7世紀末～8世紀と考えられ、岩橋氏の分類の後半期にあたる。これまで雲南地域で、これだけまとまつた土製支脚の出土例はなく、比較的短い期間のものであると考えられるため非常に意義深いものであろう。

この時期の山陰の他の地域の土製支脚は、松江周辺ではII類が優勢で、出雲周辺ではI類が優勢である。^{※3} 上記の形式別構成図をみると当遺跡土器溜り出土のものにはII類はほとんどなくI類の圧倒的な優位が窺える。ただ、それにもまして他の地域ではまず見られないIV類が不明も含めると実に60%を超える。山陰地方で見られないとなると、山陽側の影響をうけたのだろうか。または、当地方で独自に変化していったのだろうか。今後の検討課題である。今後、当地域の資料の増加、特に岩橋分類の前半期のものの資料の増加に期待したい。

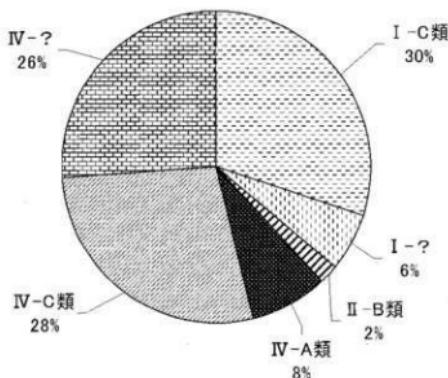


図48 土製支脚 形式別構成図

3) 特殊遺物 (図49~51)

701~728は赤色顔料を塗布する十師器である。いずれの土器も内外面とも赤塗りしてあり、概ね胎土は密で水篭している。これら赤彩土器の詳細は観察表に挙げた。

701~706は皿である。口径17~20cmを測り、口縁は緩く内湾しながら立ち上がるもの(701~704)と強く屈曲し直立気味に短く立ち上がるもの(705・706)がある。701・702は底面をナデる。703~705は底面をヘラケズリする。

707~728は壺である。壺の中には碗状を呈すものも一部あるが、明確な線引きが出来ないため、今回は一括壺とした。壺は口縁の形状、暗文の有無により4つに分類した。

707~716・718・720は暗文がなく内湾気味に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する器形のものである。口径は13~18cmほどで、底部はケズリ放しのものが多く、平底にならずやや丸底のものが目立つ。

717・719は暗文がなく底部縁辺で強く屈曲し、やや内湾気味に立ち上がり直線的に伸び口縁端で丸くおさめるものである。このタイプのものでは平底のものが多いようである。717は体部中ほどで外間に僅かに二段の稜をもつ。内外面回転ナデ、底面は静止ケズリであるようだ。719は口唇内側に僅かにアクセントを有し先細る。

721~723は暗文がなく口縁が直立気味乃至は内傾するものである。721は口径11.0cmを測り、腹部あたりで器壁が最も厚く口縁端部にかけて尖る。赤色顔料が厚く塗布されるようだ。722は口径10.0cmほどの小型品で、内湾しながら立ち上がり口縁端部でアクセントを有し内傾し丸くおさまる、有蓋杯である。内外面回転ナデ、底部周辺は回転ヘラケズリ、底部は静止ヘラケズリである。723は高台の付く壺である。内外面とも回転ナデ調整し、その後高台部を付けている。高台内面は不明である。

724~728は暗文を施すもの。内面に放射状暗文を施すものは器壁に対して垂直でなく、斜方向である。724は平底の底部からほぼ直線的に外傾し口縁に至る。内外面ともナデ、底部は丁寧に磨く。内側面に放射状暗文が、内底面には螺旋状暗文がみられる。725はやや丸味をおびた底部から直線的に外傾しながら立ち上がり口縁端部で僅かな段を有し先細る。内外面とも回転ナデ、底面は磨く。外面には塗り刷毛目痕が残る。暗文は724同様である。726は器形、暗文ともほぼ同様のもの。727は口径13.0cm、器高4.0cmとやや小型の品で丸い底部から内湾しながら立ち上がる半球状の器形で、口縁端部で僅かにアクセントをもち外傾する。底面は磨く。暗文は上記と同様であるが、器壁の状態が悪く特に内底面の螺旋状暗文は微かに残る程度である。728は724と同じような器形・調整であるが、内外面は斜格子状に暗文をもち底面は螺旋状である。暗文を有する品の遺物取上次数をみてみると30年度6・7次に集中している。以上の暗文を有する赤彩土器は器形、暗文の構成等、飛鳥IV~V期の壺Cに類似する。近隣地域をみてみると赤彩土器は、三刀屋町馬場遺跡、出雲市三日谷I遺跡、本次町垣ノ内遺跡などで比較的まとまって出土している。時期は概ね奈良期の所産とみて大過ないだろう。

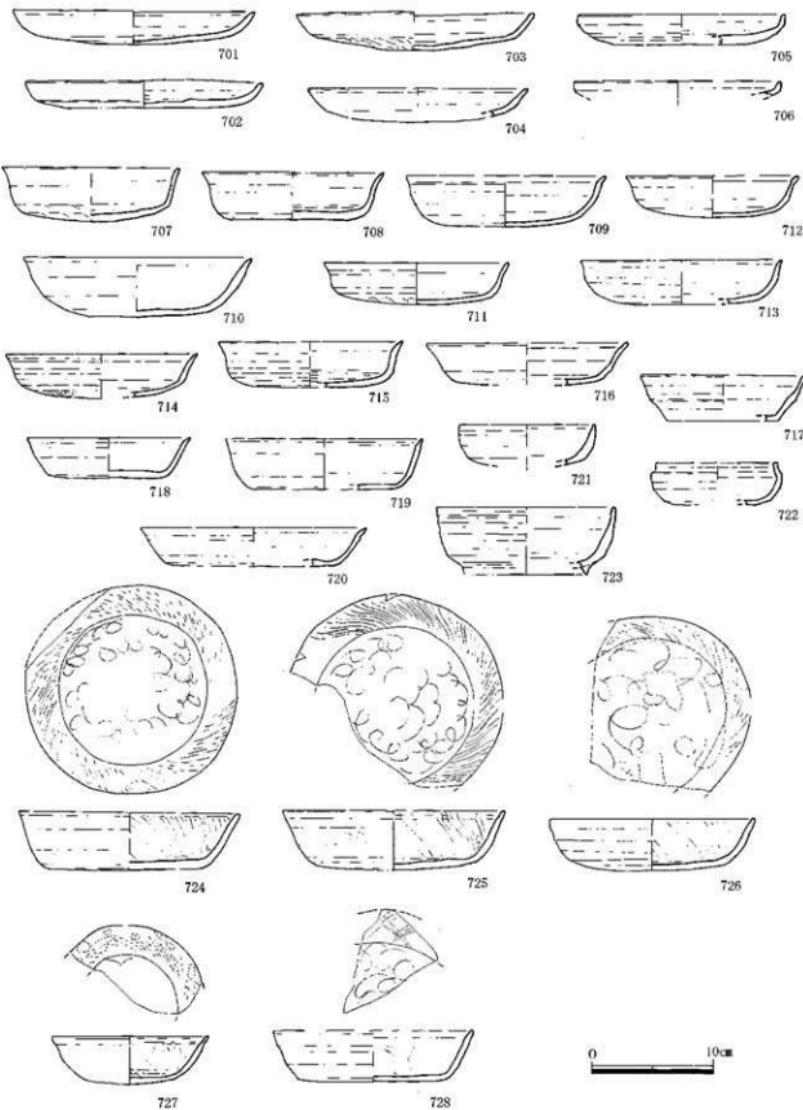


図49 赤彩土器

図50は手捏ね上器と上馬である。

729～732・735は非常に小型で粗雑、簡単な作りで内容積も僅かのものである。733・734・736～738は上記のものよりやや大型で底面を有する塊型の手捏ね上器。739・740はどちらも口径11.5cmを測る塊型で、内外面とも丁寧なナデを施す。741は口径12cmほどで器高が5.5cmとやや高めの塊型を呈す。742は復元法量が口径12.8cm、底径11.0cm、器高3.5cmで、口径と底径の差が少なく底部端で強く屈曲し、外傾しながら直線的に短く伸びおさめる、皿型の品である。743は底部のみの残存で非常に雑な作りのものである。742同様皿型のものであろうか。744は高台坏である。口径15cm、器高4.8cm、坏部は内外全面に指頭圧痕が残り、後付け高台する。745・746は口径10.7cm・9.3cmを測る?というより小壺といった類のものである。内外面ともナデ調整であるがわりに丁寧な作りである。747は口径22.3cmの浅鉢型の手捏ね上器である。法量に比して器壁が厚手の作りで、丁寧なナデを施す。748は口径11cmほど、胴部最大径16.0cm、器高12.7cmを測る片口壺である。内面はケズリ、外面はナデ、外面大部分に煤が付着する。

749は上馬である。現存する長さが8.8cm、高さ3.7cm、胴部径3.4cmで、頭部、尾部、四肢を欠く胴部のみの出土であった。手捏ねで作られ、残存する体部からは粗雑なつくりである。鞍等を付けない裸馬で、破損面からすると頭部は起き気味に付き、尾はほぼ水平に付くものであろうか。

図51の750～758は所謂製塙土器である。何れも03年度範囲において出土。750～757は内面に布目を有するものである。750は口縁部を内側へ肥厚させ、肥厚下位に布目を施す。751～753・755～757は薄手のつくりで、外面はナデ、内面は布目痕が残る。758は布目のないもので、器壁は極薄く指頭圧痕も頗著で、外面は風化がひどいが内外面ともナデ仕上げであろう。

759は土師質の低脚坏脚端で内外面とも回転ナデ調整である。760は塊型になる口縁片で、やや厚手、内湾する口縁端上面を平坦に整形している。外面には3本の沈線で区画された紋様帶を有し、上位紋様帶内には刺突文を横位に連続させ、下位には直径6mmほどの竹管を加工した施文具による草花文を巡らせる。胎土は緻密で調整も丁寧な品である。これは加茂町湯後遺跡、三刀屋町馬場遺跡出土の香炉と類似する。中世の所産である。上方から土器溜りへ流れ込んだのだろう。

この他特殊遺物として赤塗り木質椀・水晶・浜礫様小石・吹子の羽口・桃の核などが出土している。墨書・漆書き土器についてはすでに須恵器のところで述べた。山の字を墨書き、或は漆書きする個体が4点(図21の761～764)、図21の高台坏765は転用硯としても転用片口としても使用している。高台坏766も転用硯である。

赤塗り木質椀は風化が著しく、脆弱で凶化することはできず、高台部が欠けていた。材質は不明である。

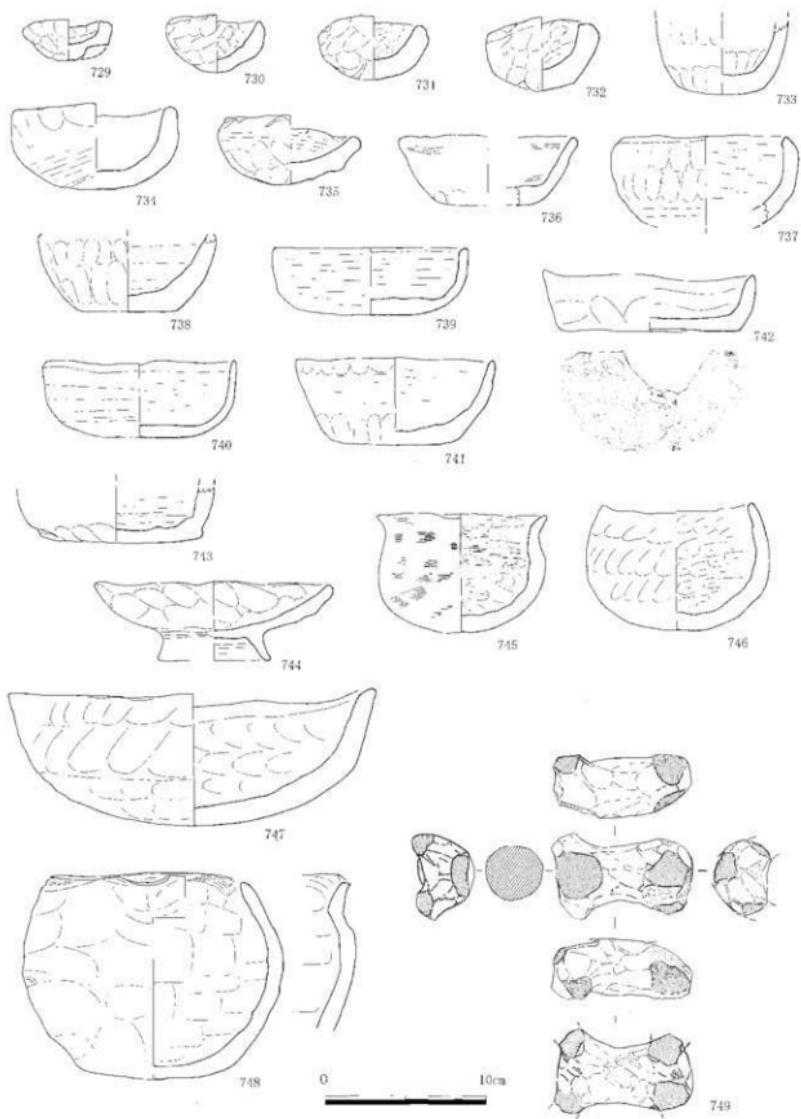


图50 手捏土器·土马

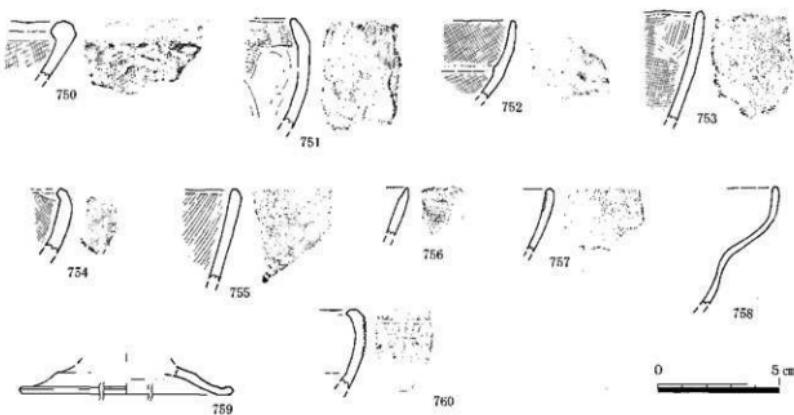


図51 製塩土器・他

羽口についてはその製作技法において特筆すべき事項が認められる。このことについては第5項において述べることとする。

以上、土器溜り内出土遺物をみてきたが、「史跡 山雲国府跡」の14号上坑出土遺物と当遺跡出土須恵器（特に蓋・高台坏・無高台坏）、土師器赤彩土器（暗文）・壺等は似通った形式のものと考えられる。因みに14号上坑出土遺物は8世紀前半の時代が当てられている。当遺跡土器溜り出土遺物の中心となる時期もほぼ同様と考えて大過ないだろう。

註

- ※1 「へたる」…尻餅をつく。尻をつけて座る。へたばって坐り込む。の意（広辞苑より）
- ※2 岩橋孝典氏の山陰地域土製支脚分類案（「山陰地域の古墳時代～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号）を基に本遺跡出土の土製支脚を分類した。IV類については、遺物に孔の有無が存在したため、さらに細分している。
- ※3 上記の岩橋氏の記述に「…上製支脚の形式分類による I類の分布の中心は西部出雲地域の神川下流域であり、II類の分布の中心は松江市南東部・東出雲町・八雲村である。…」としている。

参考文献

- 島根県教育委員会：「埴ノ内遺跡、『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書2』」2003.3
- 本次町教育委員会：「家の上遺跡、『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』」1998.3
- 島根県教育委員会：「湯後遺跡、『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』」2001.3
- 島根県教育委員会：「家ノ脇II遺跡、『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』」2004.3
- 島根県教育委員会：「馬場遺跡、『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』」2001.3
- 島根県教育委員会：「三田谷I遺跡、『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VII』」2000.3
- 島根県教育委員会：「波山池遺跡・原ノ前遺跡I、『一般国道九号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
西地区VII』」1997.3
- 大東町教育委員会：「角田遺跡・又下遺跡 付 大東高校グラウンド遺跡他資料」『大東高校校地拡張に伴う発掘調
査報告書』 1988.3
- 小林正史・柳瀬昭彦：「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』第13号 日本考古学協会
2002.5
- 島根県教育委員会：「史跡 出雲国府跡」『風上記の丘地内遺跡発掘調査報告書14』2003.3
- 人川 清 鈴木公雄 丁東普通 編：『日本土器事典』 雄山閣 1996

6 遺物の年代観

円満寺遺跡の土器溜り出土遺物は、遺構の立地、性格等から土層区分が困難であり、単純に新古を言えない。レベルの下方に位置するものは上方から流れ込む可能性はあるが、その逆は基本的にはあり得ない。しかし、すべてが流れ込むということは考えがたく出土年、取上げ次で大きな傾向は見て取れるはずである。ここでは時期の判る須恵器を基準に、この地で祭祀が行われていた時期を考えてみる。

当遺跡土器溜り遺構出土遺物の最も古い時期のものは、大谷出雲4期の蓋壺であるが、遺構上位からの数点の出土で、後世の流れ込みであろう。この地で祭祀を行っていたと考えられる期間は、須恵器蓋壺の口径が小さくなり、輪状振みと口縁内面にかえりを有す出雲5～6期（特に6期）から壺蓋は輪状振みをもち口縁が直立し、高台壺は体部が丸味を帯び、土師器の壺・皿を伴い、一部は暗文を有す出雲国府跡の第2乃至は第3形式を中心とする時期が考えられる。降る時期のものも一部認められるが、相当量のボリュームがあるのは上記の時期である。絶対年代では7世紀後半～8世紀前半であろうか。

前述のとおり層位により新古は言い辛いが、遺物の出ようで気付いたことを挙げてみる。

蓋壺・高台壺等から02年度取り上げからはほぼすべてが出雲6期のもの（遺構の初段階）で、03年度取り上げからは6期のものも流れ込み混じるが8期より新相（遺構の終末期）を呈すもの

が大半を占める。取上げ年度・次数は任意のものであるが、年度により遺物の時期が明確に違ひをみせた。

これを物差しにすると、横瓶は03年度4~7次でまとめて出土している。祭祀遺構終末期のみ使用しているようだ。製塙土器と呼ばれているもの、赤彩土器、特に暗文を有するものは横瓶と同様の出土である。土馬は02年度出土であるが、手捏ねのミニチュア上器の9個が03年度からのものであった。

このことはこの場所で行う祭祀の前期段階と後~末期では祭祀に使用する器種構成が異なることを意味すると考えられる。

表1 円満寺遺跡出土須恵器観察表

件番	出土地点	種類	縦 横	口 直	高	底	径	外面		内面		備考
								内	外	内	外	
1	02-98EF	須恵器	直	10.6	—	—	—	四輪ナメ	四輪ナメ	N7/0(灰白)	2,6017/2(明オーブ灰)	—
2	02-3次Bc	須恵器	直	11.7	3.3	—	—	四輪ナメ	四輪ナメ	N6/0(灰)	N7/0(灰白)	—
3	02-6次Cc, Dc, Cd 03-6次Dg	須恵器	直	11.8	4.3	—	—	四輪ナメ	ヘラ切り	四輪ナメ	5571/1(明オーブ灰) —, 7,5017/1(明灰)	IOW7/2(灰4) 5,5017/1(明オーブ灰) N7/0(灰)
4	02-4次Ee, Fg	須恵器	直	10.5	3.9	—	—	四輪ナメ	ヘラ切り	四輪ナメ	—	天井部刻痕
5	03-6次Gc	須恵器	直	10.0	3.5	—	—	四輪ナメ	ヘラ切り	四輪ナメ	—	—
6	02-6次Cc, Ee, Fg	須恵器	直	10.4	3.2	—	—	四輪ナメ	ヘリ起し	四輪ナメ	—	—
7	03-5次Hc	須恵器	直	9.4	3.4	—	—	四輪ナメ	ヘラ起し	四輪ナメ	—	—
8	02-1次Cc, 3次Cc	須恵器	直	14.2	3.0	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
9	03-6次Gc	須恵器	直	12.9	3.3	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	外面自然剥離する
10	03-7次Hd	須恵器	直	12.0	2.8	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	外面自然剥離する
11	03-32RF	須恵器	直	16.0	—	—	—	四輪ナメ	—	四輪ナメ	—	—
12	03-7次Ff	須恵器	直	16.4	—	—	—	四輪ナメ	—	四輪ナメ	—	—
13	03-14PF	須恵器	直	15.6	—	—	—	四輪ナメ	—	四輪ナメ	—	—
14	03-4次B	須恵器	直	16.0	2.4	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
15	03-5次Gc	須恵器	直	15.4	3.1	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
16	03-7次Pf	須恵器	直	14.8	3.5	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
17	03-7次Gf	須恵器	直	14.9	3.0	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
18	03-6次F, 4次Fc	須恵器	直	14.7	2.7	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
19	03-1次Cc, 2次Fh	須恵器	直	16.0	2.7	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	外壁自然剥離する
20	03-7次Kf	須恵器	直	14.2	3.1	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
21	03-7次Kc	須恵器	直	16.0	3.2	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
22	03-4次FF	須恵器	直	14.7	3.5	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
23	03-6次Ge	須恵器	直	15.5	3.8	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
24	03-4次Pi	須恵器	直	15.1	3.2	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
25	03-5次Bf	須恵器	直	17.1	2.7	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
26	03-1次Eg, 3次Ff	須恵器	直	16.8	—	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
27	03-4次Pf	須恵器	直	14.5	2.6	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
28	03-5次Ff	須恵器	直	17.3	3.2	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
29	03-5次J	須恵器	直	16.6	3.5	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	四輪ナメ	—	—
30	02-11	須恵器	直	12.0	3.3	—	—	四輪ナメ	四輪ケズリ	M6/0(灰)	N5/0(灰)	—
31	03-4次Gf	須恵器	直	12.0	—	—	—	四輪ナメ	四輪ナメ	S16/1(灰)~S1/1(灰)	S16/1(灰)	右端袖底板
32	03-5次Pf	須恵器	直	11.8	—	—	—	四輪ナメ	四輪ナメ	N6/0(灰)	N6/0(灰)	—
33	03-4次Ff	須恵器	直	11.6	4.9	—	—	四輪ナメ	ヘラ起し	四輪ナメ	—	—

番号	生息地	種類	巣種	口径 (mm)	高さ (mm)	表面	裏	内	外	色	内	外	備考	
上	下	左	右											
106	02-6次Ee, Ke	須恵器	坪	12.0	4.0	「面」ナメテ ハラ起し	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
106	03-2次Ee, Gg	須恵器	坪	11.4	3.0	5.5	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	1
107	03-4次Fj	須恵器	坪	13.2	4.5	7.6	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	表面あり
108	03-5次筒水溝中	須恵器	坪	12.0	3.7	9.0	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
109	03-4次Gg, 5次F	須恵器	坪			9.0	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
110	03-6次Fj, 7次Fj	須恵器	坪	12.0	3.5	8.0	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
111	03-6次Ee	須恵器	坪	12.0	3.2	8.0	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
112	03-12次C	須恵器	坪			7.4	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	表面の可塑性アリ 横土に黑白無脱字
113	03-3次FF, 6次Fj	須恵器	坪	11.8	4.2	7.5	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
114	03-4次H, 5次H	須恵器	坪	12.5	3.8	9.8	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
115	03-2次P2, 5次G	須恵器	坪	17.0	6.5	12.0	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
116	03-7次Ig	須恵器	坪	12.2	4.5	7.4	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
117	03-5E, h	須恵器	坪	14.0	4.4	7.4	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	表面凹凸に凹凸
118	03-4次Ee, 6次F	須恵器	坪	13.2	3.8	9.0	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
119	03-1次Ee, 2次Fg 3次Fg	須恵器	坪	13.6	4.5	9.5	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
120	03-1次F, 2次Fg 4次Ph	須恵器	坪	14.0	4.9	7.6	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
121	03-4Gg	須恵器	坪	12.7	4.7	9.0	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
122	03-5Gfj	須恵器	坪	12.5	6.1	9.4	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
123	03-4Gg	須恵器	坪	13.6	4.1	8.0	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	面	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
124	03-5Gfj	須恵器	高台坪	13.8	4.2	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
125	03-5Gfj	須恵器	高台坪	14.4	4.4	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
126	02-7次E, f	須恵器	高台坪	13.5	3.0	四面ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	自然粘液も
127	03-4Gfj	須恵器	高台坪	14.0	5.6	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
128	03-7Gfj	須恵器	高台坪	16.4	4.8	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
129	02-7次Ef, 03-1Gfj	須恵器	高台坪	13.5	4.7	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	「小孔コスツダシングヌ ト然然脱
130	02-3次Cd	須恵器	高台坪	16.3	5.8	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	式面内外にヘラ削線
131	03-2次G	須恵器	高台坪	14.4	4.4	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
132	03-5次E, Pz	須恵器	高台坪	14.4	4.9	(8.5) 「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
133	03-3次E, 4Gfj	須恵器	高台坪	15.2	4.0	「面」ナメテ ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
134	03-5次Fj	須恵器	高台坪	14.0	5.2	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
135	03-5次Fj	須恵器	高台坪	14.2	5.2	「面」ナメテ 「静止点」 ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	表面に削角あり
136	03-6Gg	須恵器	高台坪	15.4	5.1	(8.8) 「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
137	03-2次Ef, 03-6Gfj	須恵器	高台坪	15.0	5.3	(9.2) 「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
138	03-1次Ef	須恵器	高台坪	14.2	4.7	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	底面に凹凸竹留文
139	03-2Gfj	須恵器	高台坪			「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
140	03-5Gfj	須恵器	高台坪	14.6	4.9	(9.3) 「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
141	02-1Kse	須恵器	高台坪	12.2	4.9	(10.2) 「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
142	03-7Gfj	須恵器	高台坪	13.6	5.2	(8.1) 「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	表面灰被り
143	03-7Gfj	須恵器	高台坪	14.6	5.7	(5.8) 「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
144	03-1Kte	須恵器	高台坪	14.8	5.4	「面」ナメテ 「静止点」 ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
145	03-1Kte	須恵器	高台坪	13.0	5.1	(7.8) 「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
146	03-6Gfj, 02-7Gfj	須恵器	高台坪	14.7	5.2	(8.6) 「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	表面灰被り
147	03-5Gfj	須恵器	高台坪	14.6	5.5	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
148	03-6Gfj	須恵器	高台坪	14.3		「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
149	01-7Gfj	須恵器	高台坪	12.9	3.2	(8.7) 「面」ナメテ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	外縁灰被り
150	02-6Gfj	須恵器	高台坪	14.0	5.2	「面」ナメテ ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
151	03-6Gfj	須恵器	高台坪	15.6	4.9	「面」ナメテ 「面」ナメ切り	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
152	03-6Gfj, 03-1Kte	須恵器	高台坪	14.6	5.5	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
153	03-6Gfj	須恵器	高台坪	11.7	4.8	「面」ナメテ 「面」ナメグリ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	切り出し痕付 白面に黒色記入あり

No.	出土点	種類	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	外観		内観		外山		周辺		備考	
						左	右	左	右	左	右	左	右		
154	03-2次E、6次E	領土器	高台E	15.2	4.0	7.9	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
155	02-7次E、8次E Ee, Ee, 62-7次E	領土器	高台E	16.2	3.3		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	自然破壊
156	02-1次D, 1-Ce	領土器	高台E	12.9	4.8	(3.0)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
157	03-6次E	領土器	高台E	11.2	3.9	(7.6)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
158	03-5次E	領土器	高台E	15.4	4.5		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	粘土に黑色粒子
159	03-4次E	領土器	高台E	14.5	5.1	(9.5)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
160	03-1次D	領土器	高台E	14.7	6.4	(9.5)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	部分的に溶け
161	03-6次E	領土器	高台E	13.1	4.7		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
162	牛耳	領土器	高台E	13.2	3.5	(7.4)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
163	03-2次Hf	領土器	高台E	14.6			回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
164	03-3次Ea, Ef	領土器	高台E	13.4	9.1	(7.6)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
165	03-7次Pf	領土器	高台E	13.5	4.9		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	底面にヘラ記号
166	02-7次E, Ef	領土器	高台E	12.4	6.0		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
167	03-1次E, Pf, En	領土器	高台E	14.1	5.5		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
168	02-7次Dn~Ef	領土器	高台E	19.9	3.9		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
169	03-3次Cc~Mc	領土器	高台E	21.2	3.9		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
781	03-7DnE	領土器	畜	13.7	3.4		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	底面に凹字 764セラフ
782	03-6次He	領土器	畜	14.1	6.0		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	裏面に「?」
783	03-6次F	領土器	畜	17.0	5.0		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	底面に「?」 底面に「?」 764セラフ
784	03-7次Hf	領土器	畜	14.2			回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
785	03-5aCc	領土器	畜	13.0	4.5	(8.0)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	底面に透かし 底面に透かし
786	03-7aII	領土器	畜	14.7	5.2	(8.0)	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	底面に透かし 底面に透かし
281	03-2次E, 6次Ef	領土器	畜	15.8	12.2	9.0	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
282	02-1次E, 2次E, 3次E	領土器	畜	16.2	12.2	10.0	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
283	03-7次F	領土器	畜			9.8	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
284	03-4次G, 03-2次Cc	領土器	畜	16.6	11.5	10.5	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
285	02-4次Cc	領土器	畜			9.4	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
286	02-5次Cc, 7次E	領土器	畜	15.0	10.2	8.8	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
287	03-3次Cc, 4次Ea, En	領土器	畜	17.6	12.0	10.6	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
288	03-2次E, 6次Ef, 7次Cc	領土器	畜	17.4	11.4	9.3	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
289	02-6次Dn, Ig	領土器	畜	16.3	10.8	9.8	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	カナク付着
290	02-5aCc	領土器	畜	16.0	11.6	10.3	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	底面不良
291	03-8CcE	領土器	畜	15.9	11.3	9.6	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	环部に剥離
292	02-6Cc	領土器	畜	16.0	10.9	9.3	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
293	02-1次Cc, 03-7次E	領土器	畜	16.8	12.0	10.1	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	水ぬれ痕あり
294	02-6Cc, Ce, Cd, Od	領土器	畜	16.5	10.9	10.3	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	重ね水ぬれ痕あり
295	02-4Cc	領土器	畜	15.6	12.3	11.2	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
296	02-3aCc	領土器	畜	15.8	13.4	11.4	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
297	02-10Cc, 4Cc, En	領土器	畜	17.4	14.8	12.0	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
298	03-6Cc, 8Cc	領土器	畜	16.9	10.5	9.8	回転ナメ		回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
299	03-6CcF	領土器	畜	16.8	6.9	9.2	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	
300	03-8CcF	領土器	畜	15.5	7.2	9.0	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	焼き込み
301	03-7Cc	領土器	畜				回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	S/N(2(底白)~10(5/1(側灰))
302	03-3次Cc, 6Cc, Ff	領土器	畜				回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	N(0/0)~7.0(1/1)
303	02-7次Cc, 8次Cc	領土器	畜				回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	S/N(1/1)~7.0(1/1)
304	03-3次Cc, 6Cc	領土器	畜				回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	回転ナメ	ナメ	N(0/0)~7.0(1/1)

B6No	出土位置	種類	器種	形状	寸法(cm)	厚さ(cm)	外観	裏面	縁	内面	底	蓋	縁	考	
305	03-7次F	須志部	長柄刀	一			直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一	W6.0(H3.0)~2.6(H3.0)	N7.0(W3.0)~5.9(H3.0)	青銅下板にヘラス あり下板被覆			
306	03-3次F	須志部	長柄刀	12.6			直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一	W8.0(H3.0)~7.5(H1.0)	7.5(H1.0)	7.5(H1.0)			
307	03-7次G	須志部	長柄刀	一			直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一	N7.0(H3.0)~2.3(H3.0)	1オーナー	頭部に凹面削成及 外面部無銘文			
308	03-5次G+H	須志部	素面刀	一			直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一		300g(1kg)		刃の可塑性あり		
309	03-2次H	須志部	短刀	一			直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一	SHT/1(H3.0)~6.1(H3.0)					
310	03-1次H	須志部	短刀	一			(9.4) 直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一	W4.0(H3.0)~7.0(H3.0)	8.7(H3.0)				
311	03-7次G	須志部	劍	一			直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一	7.5(H2.0)~6.1(H3.0)	2.5(H2.0)				
312	02-7次H	須志部	小刀	11.3			直刃ナメ	直刃ナメ	一						
313	03-6次F	須志部	広口刀	16.3			直刃ナメ	直刃ナメ	一		N5.0(H3.0)		頭部に凹面削成及 刃部押切		
314	03-6次H, Fg	須志部	刀	16.7	28.8		扇子状タキヨ カキメ	扇子状タキヨ カキメ	一		N5.0(H3.0)				
315	03-2次G, H, Fg, Fg, Fg	須志部	刀?	17.6			扇子状タキヨ カキメ	扇子状タキヨ カキメ	一	W6.0(H3.0)~1.0(H3.0)	7.5(H3.0)		自然袖彎る		
316	03-6次F	須志部	櫛板	10.3	21.7		半干状タキヨ カキメ	半干状タキヨ カキメ	一		N6.0(H3.0)		垂れ毛有無あり 頭部削成		
317	03-6次H, G, Fg, Fg	須志部	櫛板	12.6	27.7		扇子状タキヨ カキメ	扇子状タキヨ カキメ	一				垂れ毛有無あり 頭部削成		
318	03-6次G, H, 7次G	須志部	櫛板	11.0	26.6		扇子状タキヨ カキメ	扇子状タキヨ カキメ	一				垂れ毛有無あり 頭部削成		
319	03-1次F	須志部	櫛板	—			平行タキヨ カキメ	平行タキヨ カキメ	一						
320	03-7次H	須志部	小刀	10.0	11.8	5.1	直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ	一		100g(2kg)~2.5kg(1kg)		自然袖彎る		
321	03-5次H~III	須志部	底部	—	11.0		直刃ナメ ハサカズ	直刃ナメ ハサカズ	一		SHT/1(H3.0)		被覆弱		
322	03-6次H	須志部	鉈	—			扇子状タキヨ カキメ	扇子状タキヨ カキメ	一	7.5(H1.0)~ 7.5(H1.0)	7.5(H1.0)		山田伝承か?		
323	03 桟上牛	須志部	研磨	—			直刃ナメ	直刃ナメ	一	2.5kg(3kg)~ 2.5kg(3kg)	2.5kg(3kg)		柵前に研七?		

表2 円満寺遺跡出土土師器観察表

B6No	出土位置	種類	器種	形状	寸法(cm)	厚さ(cm)	横	縦	周	内	外	縁	蓋	縁	考
							横	縦	周	内	外	縁	蓋	縁	考
1001	03-7次F	土師器	壺	丸底	80	34.2	26.5	トド	ナメ カキメ	良好	10187/3 (2.5kg, 黄褐色) ~2/1 (黒)				
1002	03-6次F	土師器	壺	丸底	70	23.9	27.3	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1003	03-6次G, G, G	土師器	壺	丸底	70	28.0	30.0	ナメ	ナメ カキメ	良好	SHT/4 (2.5kg, 黄褐色) ~4/1 (黒) ~2/1 (黒)				
1004	03-6次H, I, 7次G, G	土師器	壺	丸底	50	32.0	25.2	ハサカズ	ナメ カキメ	良好	SHT/6 (2.5kg, 黄褐色) ~4/1 (黒)				
1005	03-4次G, G	土師器	壺	丸底	70	21.2	28.7	ナメ	ナメ カキメ	良好	6187/3 (2.5kg, 黄褐色) ~2/1 (黒)				
1006	03-6次H, 7次I	土師器	壺	丸底	60	27.0	29.0	ハサカズ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~4/1 (黒) ~2/1 (黒)				
1007	02-2次G, G	土師器	壺	丸底	50	26.0	27.5	ハサカズ ナメ	ナメ カキメ	普通	SHT/4 (2.5kg, 黄褐色) ~2/1 (黒)				
1008	03-6次F	土師器	壺	丸底	90	23.5	23.8	ハサカズ ナメ	ナメ カキメ	普通	10187/3 (2.5kg, 黄褐色) ~2/2 (黒)				
1009	03-7次F	土師器	壺	丸底	80	18.5	22.8	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1010	03-6次G, G	土師器	壺	丸底	60	24.6	24.1	ナメ	ナメ カキメ	普通	8187/4 (2.5kg, 黄褐色) ~2/2 (黒)				
1011	03-7次G, G	土師器	壺	丸底	60	25.0	—	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1012	03-4次F	土師器	壺	丸底	50	29.5	29.5	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/2 (黒) ~4/1 (黒)				
1013	03-7次G, G	土師器	壺	丸底	90	28.0	28.2	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~4/2 (黒)				
1014	02-2-7次G~I	土師器	壺	丸底	50	29.4	—	ナメ	ナメ カキメ	良好	10187/2 (2.5kg, 黄褐色) ~3/1 (黒)				
1015	03-6次G, G, G, G	土師器	壺	丸底	60	25.0	28.3	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1016	03-4次G, G, Fd	土師器	壺	丸底	60	21.1	29.7	ナメ	ナメ カキメ	良好	2.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1017	03-5次G, G	土師器	壺	丸底	30	30.0	—	ナメ	ナメ カキメ	普通	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1018	03-4次G, G	土師器	壺	丸底	30	28.5	—	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1019	03-4次G, G	土師器	壺	丸底	60	24.0	—	ハサカズ	ハサカズ ナメ	やや不良	SHT/4 (2.5kg, 黄褐色) ~10188/2 (2kg)				
1020	03-6次G, G	土師器	壺	丸底	40	28.7	—	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/2 (黒)				
1021	03-5次F, G	土師器	壺	丸底	50	26.8	—	ナメ	ナメ カキメ	普通	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1022	03-6次G, G	土師器	壺	丸底	50	25.5	—	ナメ	ナメ カキメ	普通	7.5(H3.0)~2 (黒) ~4/2 (黒)				
1023	03-4次G, G, G, G, I	土師器	壺	空底	50	29.1	23.7	ハサカズ	ナメ カキメ	良好	10187/2 (2.5kg, 黄褐色) ~3/1 (黒) ~2/1 (黒)				
1024	03-6次F	土師器	壺	平底	50	20.0	23.5	ナメ	ナメ カキメ	普通	10187/2 (2.5kg, 黄褐色) ~3/1 (黒) ~2/1 (黒)				
1025	03-6次G, G, G, G	土師器	壺	平底	70	27.3	27.0	ナメ	ナメ カキメ	良好	7.5(H3.0)~2 (黒) ~2/1 (黒)				
1026	03-7次G, G	土師器	壺	平底	60	29.4	33.2	ハサカズ	ハサカズ ナメ	良好	10187/3 (2.5kg, 黄褐色) ~4/2 (黒)				
1027	03-7次G, G	土師器	壺	平底	80	27.8	26.4	ナメ	ナメ カキメ	良好	10187/4 (2.5kg, 黄褐色) ~2/1 (黒)				
1028	03-7次H, H	土師器	壺	平底	70	28.6	25.4	ナメ	ナメ カキメ	良好	10188/3 (2.5kg, 黄褐色) ~2/1 (黒)				
1029	03-6次G, G	土師器	壺	平底	70	33.0	28.4	ハサカズ	ナメ カキメ	やや不良	10187/4 (2.5kg, 黄褐色) ~2/2 (黒)				

ID番	生息地	種名種類	形状	稚仔率 (%)	目 頭 (cm)	頭 長 (cm)	外 面	内 面	性 成	色 虞		備考
										頭 長	内 面	
1030	03-52CEP	ナガハゼ	平底	60	31.9	-	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W7/3 (G-54-48) ~3/1 (出巣)	-	
1031	03-6次Ge	ナガハゼ	平底	60	22.4	30.1	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W7/4 (G-54-48) ~3/1 (出巣)	-	
1032	02-6次Ge, Ee	ナガハゼ	平底	50	-	-	ハケメ	ケズリ	普通	10W6/6 (青鮨) ~2/1 (青鮨)	-	
1033	03-6次Ge	ナガハゼ	平底	60	31.5	28.1	ナデ	ナデ ケズリ	良好	10W6/3 (赤背鰐) ~3/1 (黒鰐)	-	
1034	03-7次Ge	ナガハゼ	平底	70	35.0	26.7	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/4 (G-54-48) ~5/4 (G-54-48)	-	
1035	02-3次Ce	ナガハゼ	平底	90	27.4	25.8	ナデ	ナデ ケズリ	やや不良	10W8/2 (秋鰐) ~2/1 (黒)	-	
1036	02-2次Cc	ナガハゼ	後	60	29.5	27.2	ナデ	ハケメ ケズリ	やや不良	10W6/6 (鮎) ~3/2 (暗赤鰐)	-	
1037	03-7次Ef	ナガハゼ	後	60	30.3	29.1	ハケメ	ハケメ ケズリ	普通	10W6/6 (G-54-48) ~2/1 (黒鰐)	-	
1038	03-7次Ge	ナガハゼ	後	60	28.5	26.8	ナデ	ナデ ケズリ	普通	10W6/6 (鮎) ~3/2 (黒鰐) ~6/5 (G-54-48)	-	
1039	03-7次Ec	ナガハゼ	後	50	-	-	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W6/2 (灰鰐) ~7/1 (G-54-48)	-	
1040	02-7次Ef	ナガハゼ	後	90	23.5	27.8	ハケメ	ナデ ナデ	やや不良	7.5W6/6 (灰鰐) ~2/1 (黒) ~10W6/2 (灰鰐)	-	
1041	03-5次Ch, Rh, 6次Ef	ナガハゼ	後	50	28.0	28.2	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/1 (G-54-48) ~6/4 (G-54-48)	-	
1042	03-7次Ge	ナガハゼ	後	50	26.5	29.2	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W8/2 (白鰐) ~4/1 (黒鰐)	-	
1043	03-6次Gi	ナガハゼ	後	60	20.8	-	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	10W6/2 (灰鰐) ~5/1 (灰)	-	
1044	02-2次Ce	ナガハゼ	後	60	26.0	-	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5W7/1 (G-54-48) ~2/2 (黒鰐)	-	
1045	03-6次Ch	ナガハゼ	後	50	28.0	-	ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/4 (G-54-48) ~2/2 (黒)	-	
1046	02-8次Ef	ナガハゼ	後	90	24.5	31.0	ハケメ	ハケメ ケズリ	普通	7.5W8/3 (波鰐) ~2/1 (黒)	-	
1047	03-7次Ef	ナガハゼ	後	50	24.2	-	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W6/4 (G-54-48) ~2/2 (黒)	-	
1048	03-8次Ef	ナガハゼ	後	50	25.6	29.2	ナデ	ナデ ケズリ	良好	10W6/2 (G-54-48) ~3/1 (黒)	-	
1049	02-7次Dm	ナガハゼ	後	50	24.2	-	ハケメ	ナデ ケズリ	良好	10W6/4 (G-54-48) ~2/2 (黒)	-	
1050	03-7次Ge	ナガハゼ	後	50	24.6	31.3	ナデ	ナデ ケズリ	良好	10W6/6 (波鰐) ~1.7/1 (黒)	-	
1051	03-7次Ef, Fr	ナガハゼ	後	50	24.0	28.8	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W7/4 (G-54-48) ~2/1 (黒)	-	2025年 新規登録
1052	02-8次Ef	ナガハゼ	後	50	25.0	31.5	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5W8/3 (灰鰐) ~5/2 (灰鰐) ~2/1 (黒)	-	
1053	02-5次Ch, 6次Cc	ナガハゼ	後	50	23.8	28.1	ハケメ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/2 (灰鰐) ~2/2 (黒)	-	
1054	02-2次Ef	ナガハゼ	後	50	22.0	-	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W8/3 (灰鰐) ~6/2 (灰鰐) ~3/1 (黒)	-	
1055	03-8次Cc	ナガハゼ	後	50	23.6	-	ハケメ 丁寧なナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/4 (G-54-48) ~2/1 (黒)	-	
1056	03-7次Ef	ナガハゼ	後	50	19.0	22.5	ナデ	ナデ ケズリ	普通	10W8/4 (灰鰐) ~6/1 (灰)	-	
1057	02-7次Ef	ナガハゼ	後	50	22.6	29.3	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5W7/4 (G-54-48) ~2/1 (黒)	-	
1058	03-6次Cc	ナガハゼ	後	50	25.0	-	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/2 (白鰐) ~5/6 (明鰐)	-	
1059	02-1次Cc	ナガハゼ	後	50	21.0	21.0	ハケメ	ナデ ケズリ	良好	5W7/8 (明) ~3/1 (墨鰐)	-	
1060	03-7次Ef	ナガハゼ	後	50	21.0	17.2	ナデ	ナデ ケズリ	良好	2.5W7/4 (淡赤鰐) ~3W10/2 (波鰐)	-	
1061	03-7次Ef	ナガハゼ	後	50	17.0	15.2	ナデ	ナデ ケズリ	普通	5W8/4 (G-54-48) ~4/3 (G-54-48)	-	3/1 (黒)
1062	03-4次Fr	ナガハゼ	後	50	17.3	18.5	ナデ	ナデ ケズリ	良好	5W8/3 (G-54-48) ~2.5W12/2 (波鰐)	-	
1063	03-5次Fr	ナガハゼ	後	50	20.0	19.0	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/3 (G-54-48) ~2/1 (波鰐)	-	
1064	03-7次Ef	ナガハゼ	後	50	20.2	20.9	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5W8/1 (白鰐) ~4/1 (黒鰐)	-	
1065	02-8次Ef~Hc	ナガハゼ	後	50	18.4	19.8	ハケメ	ナデ ケズリ	良好	10W8/3 (灰鰐) ~2/2 (黒)	-	
1066	02-2次Ef, Ce, M, 3次 Cu	ナガハゼ	後	50	16.6	14.6	ハケメ	ナデ ケズリ	やや不良	10W8/3 (灰鰐) ~2.5W5/2 (波鰐)	-	
1067	03-12次Ef	ナガハゼ	後	50	16.6	17.0	ハケメ	ナデ ケズリ	やや不良	10W8/1 (灰鰐) ~5W5/2 (波鰐)	-	
1068	02-3次Cc	ナガハゼ	後	50	-	-	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	7.5W8/3 (波鰐) ~3/2 (波鰐)	-	
1069	03-4次Ef	ナガハゼ	後	50	-	-	ナデ	ナデ ケズリ	普通	5W8/3 (G-54-48) ~3/2 (波鰐)	-	
1070	03-5次Cc	ナガハゼ	後	50	17.1	14.4	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W7/2 (波鰐) ~4/1 (鰐)	-	
1071	02-3次Cc	ナガハゼ	後	50	14.5	16.0	ナデ	ナデ ケズリ	やや不良	7.5W8/4 (波鰐) ~5/3 (G-54-48) ~2/1 (黒)	-	
1072	02-8次Ef	ナガハゼ	後	50	12.6	15.3	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W8/2 (波鰐) ~2/2 (波鰐)	-	
1073	03-7次Ef	ナガハゼ	後	50	13.2	16.5	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W8/3 (波鰐) ~3W10/1 (黒鰐)	-	
1074	02-2次Ef	ナガハゼ	後	50	13.2	16.5	ナデ	ナデ ケズリ	普通	5W8/6 (鰐) ~7.5W8/4 (G-54-48)	-	
1075	02-6次Ef, De	ナガハゼ	後	50	12.3	14.3	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W8/3 (波鰐) ~3/1 (波鰐)	-	
1076	03-4次Ef	ナガハゼ	後	50	16.6	-	ナデ	ナデ ケズリ	普通	7.5W7/3 (G-54-48) ~4/2 (鰐)	-	
1077	03-6次Ch, Re	ナガハゼ	後	50	15.9	15.8	ハケメ	ナデ ケズリ	良好	10W7/3 (G-54-48) ~3/1 (鰐)	-	
1078	03-6次Cc	ナガハゼ	後	50	14.3	-	ナデ	ナデ ケズリ	良好	7.5W8/2 (鰐) ~6/1 (鰐) ~2/1 (鰐)	-	
1079	02-2次Cc	ナガハゼ	後	50	16.0	-	ハケメ	ハケメ ケズリ	普通	7.5W7/6 (鰐)	-	
1080	03-8次Jh	ナガハゼ	後	50	17.8	-	ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	普通	2.5W8/1 (鰐)	-	
1081	02-1次Ce	ナガハゼ	後	50	14.6	-	ナデ	ナデ ケズリ	普通	5W7/3 (G-54-48)	-	
1082	03-5次Cc	ナガハゼ	後	50	15.0	-	ナデ	ナデ ケズリ	良好	2.5W7/2 (鰐) ~6/1 (鰐)	-	
1083	03-6次Cc	ナガハゼ	後	50	20.0	-	ハケメ	ナデ ケズリ	普通	5W8/6 (鰐) ~7.5W8/4 (G-54-48)	-	
1084	03-3次Cc	ナガハゼ	後	50	16.0	-	ナデ	ナデ ケズリ	普通	2.5W3/3 (鰐) ~3/2 (鰐)	-	

年月	出土地点	種類	形狀	保存割合 (%)	標高 (cm)	地盤	地盤		地盤	地盤	地盤	地盤	地盤	備考		
							高さ (cm)	幅 (cm)								
1985 03-3次E	土師器	魚	小型	10	16.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10988/1 (未判)							
1986 03-5次H-H'	土師器	魚	小型	40	19.0	ハケメ	ハケメ ケズリ	良好	10982/6 (良)	~3/2 (未判)						
1987 03-6次E	土師器	魚	小型	20	19.6	ハケメ	ハケメ ケズリ	普通	7.6107/6 (良)							
1988 03-7次E	土師器	魚	小門	40	15.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	2.5107/4 (未判)	~5/2 (未判) ~2/1 (未判)						
1989 02-3次Cc	土師器	魚	小型	30	17.6	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	10988/3 (未判)	~2.5108/2 (改善地)						
1990 02-1次E	土師器	魚	小門	70	17.5	ハケメ	ハケメ ケズリ	普通	7.5107/6 (良)	~2/1 (未判)						
1991 03-7次E	土師器	魚	小門	50	16.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10987/2 (未判)							
1992 02-7次E	土師器	魚	小門	30	11.8	ナダ	ナダ ケズリ	やや不良	10988/2 (良)							
1993 03-7次E	土師器	魚	小門	20	21.6	ナダ	ナダ ケズリ	良好	10986/2 (未判)	~3/1 (未判) ~3/1 (未判)						
1994 03-3次F	土師器	魚	小門	20	24.4	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5106/4 (未判)	~3/1 (未判) ~3/1 (未判)						
1995 03-7次E	土師器	魚	小門	10	31.2	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5107/6 (良)	~4/1 (未判)						
1996 03-6次E	土師器	魚	小門	10	35.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5106/4 (未判)	~5/1 (良)						
1997 02-6次F	土師器	魚	小門	10	29.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5106/4 (未判)	~1.7/1 (良)	~8/2 (未判)					
1998 02-3次E	土師器	魚	小門	30	22.4	ナダ	ナダ ケズリ	普通	7.5107/6 (良)	~6/3 (未判)						
1999 02-2次E	土師器	魚	小門	10	30.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5103/1 (未判)	~10988/1 (未判)						
2000 02-6次E	土師器	魚	小門	50	36.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	5106/2 (良)	~3/1 (未判) ~2/1 (未判)						
2001 04-4次E	土師器	魚	小門	20	31.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10985/2 (未判)	~7.5107/2 (未判)						
2002 03-7次E	土師器	魚	小門	10	30.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	10987/3 (未判)	~4/1 (未判)						
2003 04-6次E	土師器	魚	小門	30	30.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	2.5106/2 (未判)	~10987/1 (未判)						
2004 03-6次E	土師器	魚	小門	50	31.0	ナダ	ナダ ケズリ	やや不良	2.5107/2 (未判)	~10985/1 (未判)						
2005 04-8次E	土師器	魚	小門	10	30.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	10985/1 (未判)	~4/1 (未判) ~5/1 (未判) ~7.5107/6 (良)						
2006 05-6次E	土師器	魚	小門	30	33.5	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5105/3 (未判)	~5/2 (未判)						
2007 04-5次E	土師器	魚	小門	50	32.8	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5106/4 (未判)	~5107/3 (未判)						
2008 03-5次E	土師器	魚	小門	60	36.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5108/2 (未判)	~7.5107/2 (未判)						
2009 03-6次E	土師器	魚	小門	30	30.0	ナダ	ナダ ケズリ	やや不良	7.5104/2 (未判)	~1.7/1 (良)	~2.5104/3 (未判)					
2010 03-1次E	土師器	魚	小門	20	30.0	ナダ	ナダ ケズリ	やや不良	7.5105/2 (未判)	~5/1 (未判) ~5/1 (未判)						
2011 03-7次E	土師器	魚	小門	50	40.6	ナダ	ハケメ	ハケメ ケズリ	良好	7.5107/2 (未判)	~10985/1 (未判)					
2012 03-9次E	土師器	魚	小門	10	31.0	ナダ	ハケメ	ハケメ ナダ ケズリ	普通	7.5107/4 (未判)	~4/1 (未判)					
2013 03-10次E	土師器	魚	小門	30	23.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	7.5107/4 (未判)	~3/1 (未判)					
2014 03-5次F	土師器	魚	小門	30	27.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ カズリ	普通	10986/2 (未判)	~7.5106/2 (未判)					
2015 03-7次F	土師器	魚	小門	50	32.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	3107/1 (未判)	~10985/3 (未判)	~7.5107/2 (未判)				
2016 03-7次E	土師器	魚	小門	70	31.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	良好	10985/2 (未判)	~1.7/1 (良)					
2017 03-6次E	土師器	魚	小門	30	25.4	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	7.5107/6 (未判)	~7.5107/2 (未判)					
2018 03-4次E	土師器	魚	小門	20	30.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	良好	10985/3 (未判)	~2/1 (良)					
2019 03-6次E	土師器	魚	小門	40	36.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	やや不良	10985/3 (未判)	~6/1 (未判) ~7.5102/1 (良)					
2020 03-4次E	土師器	魚	小門	30	34.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	普通	3107/6 (未判)	~10985/2 (未判)					
2021 03-4次E	土師器	魚	小門	10	34.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	良好	10988/3 (未判)	~2.5102/2 (未判)					
2022 03-2次E	土師器	魚	小門	30	36.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	普通	5.5108/2 (未判)	~10988/2 (未判)					
2023 02-2次Cc	土師器	魚	小門	10	35.3	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	10988/2 (未判)	~7.5108/2 (未判)					
2024 02-2次Cc	土師器	魚	小門	10	30.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	良好	0.5108/2 (未判)	~10988/2 (未判)					
2025 03-6次E	土師器	魚	小門	60	35.2	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	7.5107/2 (未判)	~10988/3 (未判)	~7.5107/2 (未判)				
2026 03-7次E	土師器	魚	小門	70	31.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	良好	10985/2 (未判)	~1.7/1 (良)					
2027 03-6次E	土師器	魚	小門	30	26.4	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ カズリ	普通	7.5107/6 (未判)	~7.5107/2 (未判)					
2028 03-4次E	土師器	魚	小門	20	30.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	良好	10985/3 (未判)	~2/1 (良)					
2029 03-6次E	土師器	魚	小門	40	36.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	やや不良	10985/3 (未判)	~6/1 (未判) ~7.5102/1 (良)					
2030 03-4次E	土師器	魚	小門	30	34.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	普通	3107/6 (未判)	~10985/2 (未判)					
2031 03-4次E	土師器	魚	小門	10	34.0	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	良好	10988/3 (未判)	~2.5102/2 (未判)					
2032 03-2次E	土師器	魚	小門	30	36.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	普通	5.5108/2 (未判)	~10988/2 (未判)					
2033 02-2次Cc	土師器	魚	小門	10	35.3	ナダ	ハケメ	ナダ ケズリ	普通	10988/2 (未判)	~7.5108/2 (未判)					
2034 02-2次Cc	土師器	魚	小門	10	30.0	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	良好	0.5108/2 (未判)	~10988/2 (未判)					
2035 03-6次E	土師器	魚	小門	60	35.2	ナダ	ハケメ	ナダ ハケメ ケズリ	普通	7.5107/2 (未判)	~7.5107/2 (未判)	~3/1 (未判)				
2036 03-4次E	土師器	魚	小門	10	39.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5107/3 (未判)	~4/1 (未判)						
2037 03-5次E	土師器	魚	小門	70	31.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	5.5108/4 (未判)	~10985/3 (未判)						
2038 03-5次E	土師器	魚	小門	20	36.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	5.5108/4 (未判)	~2/1 (未判)						
2039 03-6次E	土師器	魚	小門	30	35.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10988/3 (未判)	~6/2 (未判)						
2040 03-6次E	土師器	魚	小門	20	35.4	ナダ	ナダ ケズリ	良好	10988/3 (未判)	~4/2 (未判)						
2041 03-5次E	土師器	魚	小門	60	27.5	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5108/2 (未判)	~2/1 (良)						
2042 03-5次E	土師器	魚	小門	20	28.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10988/4 (未判)	~2/2 (未判)						
2043 03-4次E	土師器	魚	小門	30	26.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	5.5108/4 (未判)	~2/1 (未判)						
2044 03-6次E	土師器	魚	小門	30	35.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10988/3 (未判)	~6/2 (未判)						
2045 03-6次E	土師器	魚	小門	50	28.8	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5108/4 (未判)	~4/2 (未判)						
2046 03-6次E	土師器	魚	小門	50	32.2	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5108/2 (未判)	~7.5108/1 (未判)						
2047 03-7次E	土師器	魚	小門	30	25.0	ナダ	ナダ ケズリ	普通	10988/2 (未判)	~7.5108/1 (未判)						
2048 03-2次Cc	土師器	魚	小門	50	32.6	ナダ	ナダ ケズリ	良好	2.5108/3 (未判)	~6/1 (未判)						
2049 03-7203E	土師器	魚	小門	30	33.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5107/4 (未判)	~2/1 (未判)						
2050 03-2814-3203Cc	土師器	魚	小門	50	32.6	ナダ	ナダ ケズリ	良好	2.5108/3 (未判)	~6/1 (未判)						
2051 03-7203E	土師器	魚	小門	30	33.0	ナダ	ナダ ケズリ	良好	7.5107/4 (未判)	~2/1 (未判)						

番号	出土地点	種類	形狀	発見年	寸法 (cm)	深さ (cm)	調査 外観	周 辺	同 系	施 成	食 器	内 部	備 考
外 形	内 部												
1140	02-4次B4	+950	唐	70	22.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR8/4(淡黄褐色)～2. SYR8/6(褐)～SYR8/1(黒褐色)			
1141	03-6次E6, 6次F6	+10725	唐	60	24.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/3(淡黄褐色)～10. SYR8/3(淡黄褐色)～10. SYR8/1(黒褐色)			
1142	03-7次H6	+10718	唐	10	22.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/1(黒褐色)～10. SYR8/1(黒褐色)			
1143	03-6次F7, G7	+10726	唐	30	28.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/3(淡黄褐色)～6.2(灰褐色)～5.1(褐色)			
1144	03-6次G6	+10727	唐	30	26.5		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/3(淡黄褐色)～5.3(灰褐色)～2.2(黒褐色)			
1145	03-7次H6	+10728	唐	40	26.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/4(淡黄褐色)～10. SYR8/1(黒褐色)			
1146	03-6次H6	+10729	唐	10	27.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/1(黒褐色)～8.2(灰褐色)～1.1(黒褐色)			
1147	02-6次E6～E7	+10730	唐	10	24.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/3(淡黄褐色)～6.5(灰褐色)～5.1(黒褐色)			
1148	03-6次H6	+10731	唐	26	24.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/6(黒褐色)～5.3(灰褐色)～4.2(黒褐色)			
1149	03-6次E6	+10732	土師器	70	25.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/6(黒褐色)～5.3(灰褐色)～4.2(黒褐色)			
1150	03-4次I7	+10733	唐	20	28.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/6(黒褐色)～4.2(灰褐色)			
1151	03-7次J7	+10734	土師器	30	29.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/2(灰褐色)～4.1(灰褐色)			
1152	03-7次H7	+10735	土師器	30	29.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/2(灰褐色)～4.1(灰褐色)			
1153	03-6次E6	+10736	土師器	40	22.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/4(淡黄褐色)～1.3(白)～6.3(灰褐色)～7. SYR8/1(墨褐色)			
1154	03-7次J7	+10737	土師器	30	27.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/3(淡黄褐色)～7.1(灰褐色)～2.1(黒褐色)			
1155	03-7次G7	+10738	土師器	20	26.8		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/3(淡黄褐色)～5.2(灰褐色)～3.1(黒褐色)			
1156	02-7次H6	+10739	土師器	10	25.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR6/6(黒褐色)～10. SYR7/2(灰褐色)			
1157	03-4次F7	+10740	土師器	10	22.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	10. SYR7/3(淡黄褐色)～6.3(灰褐色)			
1158	03-4次F7	+10741	土師器	10	25.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	10. SYR8/3(淡黄褐色)～5.1(黒褐色)			
1159	03-6次G7	+10742	土師器	20	27.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/6(黒褐色)～2. SYR8/6(淡黄褐色)～2. SYR2/3(墨褐色)			
1160	03-6次H7	+10743	土師器	20	26.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR8/4(淡黄褐色)～8.5(灰褐色)～5.0(墨褐色)			
1161	03-5次G5, Gh	+10744	土師器	20	23.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR7/4(淡黄褐色)～7.3(灰褐色)～3.1(黒褐色)			
1162	03-5次F7	+10745	土師器	10	25.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR8/6(灰褐色)～5.0(灰褐色)～7.2(灰褐色)			
1163	03-7次G7, H7	+10746	土師器	20	26.8		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR7/3(淡黄褐色)～6.3(灰褐色)～1.7(黒褐色)			
1164	03-7次H7	+10747	土師器	20	25.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR8/1(黒褐色)～10. SYR7/2(灰褐色)			
1165	03-6次F7, 7次F7	+10748	土師器	20	21.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	10. SYR7/2(淡黄褐色)～2. SYR8/6(灰褐色)			
1166	03-6次F7, 7次G7	+10749	土師器	10	22.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	10. SYR8/3(淡黄褐色)～5.1(黒褐色)			
1167	03-5次F7	+10750	土師器	10	29.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR7/3(淡黄褐色)～7.3(灰褐色)～3.1(黒褐色)			
1168	03-5次F7	+10751	土師器	10	27.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR8/6(灰褐色)～5.0(灰褐色)～7.2(灰褐色)			
1169	03-7次H7	+10752	土師器	10	27.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR7/4(淡黄褐色)～8.3(灰褐色)～1.7(黒褐色)			
1170	03-7次H7	+10753	土師器	10	27.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR7/4(淡黄褐色)～8.3(灰褐色)～1.7(黒褐色)			
1171	03-7次E7, Fg, Rd, G7	+10754	土師器	40	23.2		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR7/3(淡黄褐色)～6/3(灰褐色)～4/2(黒褐色)			
1172	03-6次H7	+10755	土師器	40	23.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR7/2(淡黄褐色)～6/3(灰褐色)～4/2(黒褐色)			
1173	03-6次G7	+10756	土師器	20	26.5		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR8/6(黒褐色)～6/4(淡黄褐色)～3/1(黒褐色)			
1174	02-2次Cc	+10757	土師器	40	21.9		ナゲ	ナゲ ケズリ	やや不良	7. SYR7/4(淡黄褐色)～6/3(灰褐色)～2/2(黒褐色)			
1175	03-6次G6	+10758	土師器	40	27.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR8/6(黒褐色)～2. SYR8/6(淡黄褐色)～1.7/2(黒褐色)			
1176	03-7次G6	+10759	土師器	20	27.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	2. SYR7/4(淡黄褐色)～7/4(灰褐色)～2/1(黒褐色)			
1177	02-1次Cc	+10760	土師器	20	26.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	7. SYR7/2(淡黄褐色)～6/3(灰褐色)～4/2(黒褐色)			
1178	03-7次I7	+10761	土師器	70	24.0		ナゲ	ナゲ ケズリ	良好	10. SYR8/4(淡黄褐色)～3/3(灰褐色)～3/3(黒褐色)～2/1(黒褐色)			
1179	02-6～7次E7～F7	+10762	土師器	70	28.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR8/2(淡黄褐色)～6/2(灰褐色)～2/1(黒褐色)			
1180	03-7次G7	+10763	土師器	30	25.4		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR8/3(淡黄褐色)～6/3(灰褐色)～2/1(黒褐色)			
1181	03-6次F7	+10764	土師器	30	24.6		ナゲ	ナゲ ケズリ	普通	7. SYR8/3(淡黄褐色)～6/3(灰褐色)～2/1(黒褐色)			
1182	02-4次Cc	+10765	土師器	30	24.5		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	普通	10. SYR8/3(淡黄褐色)～5/3(黒褐色)			
1183	02-6次D7, Dc	+10766	土師器	40	26.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	普通	7. SYR7/6(黒褐色)～4/3(黒褐色)～3/2(黒褐色)			
1184	02-6～7次Ec～Ef	+10767	土師器	20	27.2		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	やや不良	7. SYR7/4(淡黄褐色)～6/2(黒褐色)			
1185	03-7次G7	+10768	土師器	20	27.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	7. SYR7/4(淡黄褐色)～6/2(黒褐色)			
1186	02-6～7次Ec～Ef	+10769	土師器	60	25.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	7. SYR7/6(黒褐色)～4/3(黒褐色)			
1187	02-7次E7	+10770	土師器	30	22.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	2. SYR8/6(黒褐色)～2/2(黒褐色)			
1188	02-7次G7	+10771	土師器	20	24.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	普通	20. SYR7/6(黒褐色)～3/1(黒褐色)			
1189	03-4次G7, 7次G7	+10772	土師器	50	26.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	10. SYR7/2(淡黄褐色)～6/2(灰褐色)～3/1(黒褐色)			
1190	03-7次G7	+10773	土師器	10	24.6		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	7. SYR2/1(黒褐色)～10. SYR7/1(黒褐色)			
1191	03-2次Cc, H7	+10774	土師器	20	26.4		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	普通	10. SYR8/3(淡黄褐色)～7/2(黒褐色)～2/1(黒褐色)			
1192	03-5次F7	+10775	土師器	30	23.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	10. SYR8/2(黒褐色)～7. SYR8/2(淡黄褐色)			
1193	02-7次Cc, 8次Cc	+10776	土師器	70	27.0		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	普通	20. SYR7/4(黒褐色)～7. SYR2/1(黒褐色)～2/1(黒褐色)			
1194	03-5次F7	+10777	土師器	10	27.8		ナゲ ハケメ	ナゲ ハケメ ケズリ	良好	SYR7/3(淡黄褐色)～6/1(黒褐色)			

IDNo.	出土地点	種類	器種	形状	寸法(cm)	厚さ(cm)	質	地成	色	表面	備考
									内	外	
1195	03-7次Eg. +	土師器	甕	50	27.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	灰白	7.5H7/2 (陶瓦) ~2/1 (深褐色)
1196	03-5次Eg. 6次Eg. +	土師器	甕	60	27.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	7.5H7/4 (陶瓦) ~2/1 (深褐色)
1197	03-6次Eg. +	土師器	甕	10	26.5	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H7/3 (陶瓦) ~2/2 (暗褐色)
1198	03-4次Eg. +	土師器	甕	26	23.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H7/3 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色)
1199	02-5次Eg. 5次GJ	土師器	甕	20	29.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	7.5H6/3 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色)
1200	03-5次Eg. +	土師器	甕	20	29.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/3 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色)
1201	03-6次Eg. +	土師器	甕	20	29.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H7/4 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色) ~10H8/2 (黒)
1202	03-6次Eg. +	土師器	甕	30	28.5	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	10H8/4 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色) ~7.5H4/1 (深褐色)
1203	03-6次Eg. 7次GJ	土師器	甕	10	26.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	7.5H7/4 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色)
1204	03-5次Eg. 7次GJ	土師器	甕	50	28.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	7.5H8/2 (陶瓦) ~2/1 (暗褐色)
1205	02-3次Eg. +	土師器	甕	40	28.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	普通	5H7/9 (桟) ~2/2 (陶瓦)
1206	03-5次Eg. P. +	土師器	甕	60	21.4	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/3 (陶瓦) ~2/1 (陶瓦) ~3/1 (黑)
1207	03-4次Eg. 6次Dn. +	土師器	甕	50	22.7	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌウツリ	良好	10H8/2 (黑) ~1-1.7/1 (黑)
1208	03-5次Eg. Fg. +	土師器	甕	30	29.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H8/2 (深褐色) ~2/2 (深褐色)
1209	03-5次Eg. 4次G. 2次E. +	土師器	甕	70	26.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	8H7/4 (陶瓦) ~4/1 (黑)
1210	03-8次Eg. +	土師器	甕	70	23.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	7.5H7/4 (陶瓦) ~2/1 (陶瓦) ~5H7/4 (陶瓦)
1211	03-6次Eg. 7次GJ	土師器	甕	60	27.5	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H8/2 (桟) ~2/1 (陶瓦) ~7.5H7/3 (陶瓦)
1212	03-7次Eg. Hf.	土師器	甕	60	25.6	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	10H8/2 (黑) ~2/1 (黑) ~2/2 (陶瓦)
1213	03-5次Eg. +	土師器	甕	10	29.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H7/3 (陶瓦) ~2/1 (黑) ~2/2 (黑) ~2/1 (黑)
1214	03-7次Eg. Ed.	土師器	甕	60	27.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H7/2 (陶瓦) ~2/2 (陶瓦) ~5H2/1 (黑)
1215	03-4次Eg. +	土師器	甕	20	29.4	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/6 (黑) ~2/1 (黑)
1216	02-6次Eg. +	土師器	甕	10	24.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	やや不良	7.5H7/4 (陶瓦)
1217	03-7次Eg. +	土師器	甕	10	28.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/5 (黑) ~2/1 (黑)
1218	03-6次Eg. 7次GJ	土師器	甕	20	26.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H7/1 (黑) ~2/2 (陶瓦)
1219	03-7次Eg. +	土師器	甕	10	26.6	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H7/3 (陶瓦) ~2/2 (陶瓦) ~2/1 (黑)
1220	03-5次Eg. 7次GJ	土師器	甕	40	28.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H8/3 (陶瓦) ~2/2 (陶瓦) ~2/1 (黑)
1221	02-2次Eg. +	土師器	甕	20	24.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	5H2/4 (陶瓦) ~2/1 (陶瓦) ~3/1 (陶瓦)
1222	02-6次Eg. 7次Eg. E. +	土師器	甕	30	29.6	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	やや不良	6H7/6 (黑) ~2/2 (黑)
1223	02-2次Eg. +	土師器	甕	40	27.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	10H2/1 (黑) ~3H4/3 (陶瓦)
1224	03-6次Eg. +	土師器	甕	20	24.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H7/1 (陶瓦) ~2/1 (黑)
1225	03-4次Eg. 5.6次G. +	土師器	甕	30	23.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/6 (黑) ~2/1 (黑)
1226	03-7次Eg. Ed. +	土師器	甕	30	20.8	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	良好	7.5H6/4 (陶瓦) ~2/1 (陶瓦)
1227	03-4次Eg. +	土師器	甕	40	19.6	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/3 (陶瓦) ~2/1 (陶)
1228	03-7次Eg. +	土師器	甕	10	19.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	普通	7.5H5/1 (陶) ~2/1 (陶)
1229	02-5次Eg. +	土師器	甕	20	20.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	普通	7.5H5/3 (陶) ~2/1 (陶)
1230	03-6次Eg. +	土師器	甕	50	19.8	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H6/4 (陶) ~2/1 (陶)
1231	03-2次Eg. +	土師器	甕	10	20.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H7/2 (陶) ~2/1 (陶)
1232	03-2次Eg. Eg. +	土師器	甕	30	19.4	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	良好	7.5H7/2 (陶) ~2/1 (陶)
1233	03-5次Eg. +	土師器	甕	60	19.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	普通	7.5H8/4 (陶) ~2/1 (陶)
1234	03-7次Eg. +	土師器	甕	20	20.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ハケヌメケメリ	普通	7.5H7/3 (陶) ~2/1 (陶)
1235	02-6次Eg. +	土師器	甕	20	20.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	普通	7.5H7/4 (陶) ~2/1 (陶) ~3/1 (陶)
1236	03-2次Eg. +	土師器	甕	10	18.0	ナガ	ハケヌ	ナガ	ケメリ	普通	7.5H6/4 (陶) ~2/1 (陶)

表3 円満寺遺跡出土瓶観察表

IDNo.	平上地名	種類	器種	寸法(cm)	厚さ(cm)	質	地成	軸	土	内	外	備考	
501	03-6次Eg. +	土師器	甕	80	23.0	19.0	ナガ	ケメリ	地付合	良好	10H6/2 (陶瓦) ~3/1 (黑)	底付は基成部付	
502	03-6次Eg. Eg. +	土師器	甕	70	26.0	23.4	17.6	ナガ	ケメリ	ハケヌ	地付合	良好	
503	03-7次Eg. 5.6次G. +	土師器	甕	90	23.9	32.9	17.3	ナガ	ケメリ	地付合	良好		
504	02-6次Eg. Eg. +	土師器	甕	60	25.6	32.6	16.0	ナガ	ケメリ	ハケヌ	地付合	良好	
505	02-2次Eg. Eg. +	土師器	甕	30	25.9	25.6	16.0	ナガ	ケメリ	ハケヌ	地付合	良好	
506	03-4次Eg. 5.6次G. +	土師器	甕	30	28.0	17.0	ナガ	ケメリ	地付合	良好	10H6/2 (陶瓦) ~3/1 (黑)	底付は基成部付	
507	03-7次Eg. +	土師器	甕	90	23.5	32.6	17.7	ナガ	ケメリ	地付合	良好	10H6/3 (陶瓦) ~2/1 (黑)	底付は基成部付
508	03-6次Eg. 7次G. +	土師器	甕	70	22.6	20.0	13.0	ナガ	ケメリ	地付合	良好	7.5H6/4 (陶瓦) ~2/1 (黑) ~10H6/2 (黑)	底付は基成部付

調査番号	出土場所	種類	器種	堆積年	口径(cm)	底面(cm)	高さ(cm)	幅(cm)	測定値	地土	成層	色調	備考
509	03-7次Ee, Ge	土師器	瓶	70	78.4	27.4	13.6	ナガケズリ	ハケ付	粗砂含む	良好	10YR6/2 (G243-黄緑)	壁際付基底部
510	03-2次Be	土師器	瓶	40	24.0	23.5	15.5	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR6/2 (G243-黄緑)	壁際付基底部
511	02-1次Be	土師器	瓶	60	26.7	24.5	13.5	ナガケズリ	ハケ付	粗砂含む	良好	10YR7/2 (G243-黄緑)	壁際付基底部
512	02-4次Ce	土師器	瓶	70	26.0	23.5	15.5	ナガケズリ	ハケ付	粗砂含む	良好	10YR6/4 (G243-黄緑)	~1/2 (黒褐色)
513	03-3次Fr	土師器	瓶	30	24.2	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR6/2 (G243-黄緑)	~2/1 (黒)
514	02-4次De, Df	土師器	瓶	20	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	7.5YR7/4 (G243-黒)	壁際付基底部
515	03-0次	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR7/3 (G243-黄緑)	~0/3 (G243-黄緑)
516	03-7次Df	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	2.5YR7/2 (G243)	~1/1 (黒色)
517	03-7次Df	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR6/3 (G243-黄緑)	~1/1 (黒緑)
518	03-6次Df-Hd	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR6/2 (G243-黄緑)	~3W6/6 (黒)
519	03-6次Pi	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ	ハケ付	粗砂含む	良好	10YR6/2 (G243-黄緑)	~7.5YR6/4 (G243-黒)
520	03-中段G13e7	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	7.5YR7/4 (G243-黒)	~7/6 (黒)
521	03-6次Ee	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR7/3 (G243-黄緑)	~3/1 (黒緑)
522	03-7次Ge	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR7/3 (G243-黒)	~8/2 (G243)
523	03-6次Df	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR7/3 (G243-黒)	~3/1 (黒緑)
524	03-7次Ge	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	7.5YR6/4 (G243-黒)	~5/2 (G243)
525	03-6次Df	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR7/4 (G243-黒)	~
526	03-2次Cc	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR2/1 (G243)	~
527	02-1次Cc	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	7.5YR7/6 (黒)	~
528	03-6次Cc	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	良好	10YR7/3 (G243-黄緑)	~7.5YR6/5 (黒)
529	03-2次Dg	土師器	把手	—	—	—	—	ナガケズリ		粗砂含む	普通	10YR7/4 (G243-黄緑)	~

表4 円満寺遺跡出土土製支脚観察表

調査番号	出土場所	実測形状	堆積年	高さ(cm)	底面形状	測定値	地土	色調	備考
601	03-4次Ce	I C	14次完形	16.3	平底	ナガケズリ ナゲ	粗砂含む	2.5YR6/3 (G243-黒) ~6/4 (G243-黒)	表面に製作時に下敷きにしていた織物痕あり
602	03-7次Df	I C	ほぼ完成	15.0	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR5/3 (G243-黒)	7.5YR6/6 (黒)
603	03-7次Df	I C	ほぼ完形	16.0	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR7/2 (G243-黒)	~5/2 (G243)
604	03-6次Cc	I C	ほぼ未形	19.1	ナガ底	ナガケズリ ナゲ	粗砂含む	10YR6/3 (G243-黒)	~7/2 (G243-黒)
605	03-7次Ge	I C	90	18.3	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR7/3 (G243-黒)	~3/1 (黒)
606	02-6次Cc	I C	ほぼ完形	15.8	平底	ナガケズリ	粗砂含む	7.5YR6/6 (黒)	~3/3 (黒)
607	03-5次Cc	I C	30	18.3	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/4 (G243-黒)	~5/2 (G243)
608	02-7次Df	I C	60	13.5	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	7.5YR6/4 (G243-黒)	~4/3 (G243-黒)
609	02-7次Df	I C	90	16.2	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/4 (G243-黒)	~4/1 (G243-黒)
610	02-6次Cc	I C	70	15.7	三底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR7/4 (G243-黒)	~3/1 (黒)
611	03-6次Cc	I C	60	15.6	ナガ	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/3 (G243-黒)	~
612	03-7次Cc	I C	50	15.8	平底	ナガケズリ	粗砂含む	5YR6/6 (黒)	~3/1 (黒)
613	03-7次Cc	I C	60	14.9	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/6 (明赤)	~5/1 (G243-黒)
614	02-7次Cc	I C	90	15.5	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR7/4 (G243-黒)	~5/2 (G243-黒)
615	02-7次Cc	I C	12次完形	16.3	中底	ナガケズリ	粗砂含む	7.5YR8/3 (黒) ~5YR7/2 (黒赤)	~
616	03-7次Cc	I ?	80	18.2	上げ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR7/2 (G243-黒)	~2.5YR6/6 (黒)
617	02-6次Cc	I ?	20	17.2	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/6 (明赤)	~5/2 (G243-黒)
618	03-7次Cc	I ?	30	—	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/3 (G243-黒)	~
619	03-4次Cc	II B	30	16.9	平底	ナガケズリ	粗砂含む	2.5YR6/6 (黒) ~2.5YR7/2 (暗赤)	表面に製作時に下敷きにしていた織物痕あり
620	02-4次Cc	IV A	12次完形	15.3	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/4 (G243-黒)	~
621	02-3次Cc	IV A	80	13.5	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/4 (G243-黒)	~10YR4/1 (黒)
622	02-6次Cc	IV A	80	14.0	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/6 (G243-黒)	~7.5YR5/6 (黒)
623	02-8次Cc	IV A	30	12.9	平底	裏の丸ノヘ形	粗砂含む	7.5YR6/6 (黒) ~6/3 (G243-黒)	2.2とセッカ
624	02-6次Cc	IV A	14次完形	15.9	平底	裏の丸ノヘ形	粗砂含む	2.5YR7/6 (黒)	~5/3 (G243-黒)
625	02-6次Cc	IV C	12次完形	14.6	ナガ底	ナガケズリ	粗砂含む	7.5YR5/2 (赤)	~7/6 (黒)
626	03-7次Cc	IV C	12次完形	14.9	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR7/4 (G243-黒)	~5/2 (G243-黒)
627	02-6次Cc	IV C	14次完形	16.6	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/2 (G243-黒)	~7/2 (G243-黒)
628	03-7次Cc	IV C	14次完形	16.1	平底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR5/2 (G243-黒)	~7/4 (G243-黒)
629	02-4次Cc	IV C	90	19.1	上げ底	ナガケズリ	粗砂含む	10YR6/2 (G243-黒)	~7.5YR7/4 (G243-黒)
630	02-7次Cc	IV C	12次完形	16.7	平底	ナガケズリ	粗砂含む	7.5YR7/4 (G243-黒)	~7/6 (黒)

登録番号	出土場所	発見状況	堆積量 (t)	全高 (cm)	最高部形状	調査実施状況	断面	土色	調査	備考
							基盤	高さ	底	
631	03-28Dc	IV-C	80	—	基盤	基盤の高さ確認	砂質含む	5M8E-9(相)~7.3M7E-4(3.5m・鉢)	—	—
632	03-28Dc	IV-C	60	16.5	平底	基盤	砂質含む	10M8E-2(3.5m・鉢底)~4(1m底)	—	—
633	03-68Cc, Dc	IV-C	70	13.0	平底	基盤の高さ確認	砂質含む	5M8E-8(相)~10M8E-6(鉢底)	—	すんぐりした底
634	03-6次Cc, DF	IV-C	70	15.5	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-3(3.5m・鉢底)~6(1m底)	—	丸く底
635	03-6Cc, F	IV-C	50	15.5	平底	ナダ	砂質含む	10M8E-3(3.5m・鉢底)~6(1m底)	—	丸さは現存長
636	03-6次Cc, Dc	IV-C	70	16.1	平底	ナダ	砂質含む	7.3M8E-6(相)~4(1m底)	—	—
637	03-3次Eg	IV-C	70	18.2	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-2(3.5m・鉢底)~5M8E-6(相)	—	—
638	03-62Cc, F	IV?	70	18.4	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-4(3.5m・鉢底)~7.3M8E-4(3.5m・鉢)	—	—
639	03-7次Eg	IV?	70	18.1	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-4(3.5m・鉢底)~6(1m底)	—	—
640	03-7次Gc	IV?	70	18.5	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-3(3.5m・鉢底)	—	—
641	03-2次CE	IV?	70	16.1	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-3(3.5m・鉢底)~7.3M8E-4(3.5m・鉢)	—	—
642	03-4次Cc	IV-C	70	14.5	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-7(3.5m・鉢底)~6(1m底)	—	—
643	03-3次Eg	IV?	80	18.2	上げ底	ナダ	砂質含む	3M8E-6(相)~2.3M8E-2(相)	—	—
644	03-2次Tf	IV?	50	15.8	—	ナダ	砂質含む	10M8E-4(3.5m・鉢底)~5(1m底)	—	—
645	03-5次Cc	IV?	60	17.3	平底	ナダ	砂質含む	2.3M8E-6(相)~10M8E-2(3.5m・鉢)	—	直角底周辺にV字の凹みあり
646	03-2次Cc	IV?	50	17.5	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-4(3.5m・鉢底)~6(1m底)	—	—
647	03-52Cc, F	IV?	50	17	上げ底	ナダ	砂質含む	3M8E-6(相)~2(1m底)	—	—
648	03-7次Eg	IV?	60	15.5	平底	ナダ	砂質含む	10M8E-3(3.5m・鉢底)~6(1m底)	—	—
649	03-6Cc, F	IV?	50	16.6	上げ底	ナダ	砂質含む	10M8E-2(3.5m・鉢底)~5M8E-6(相)	—	—
650	03-5次Cc	IV?	10	—	—	ナダ	砂質含む	10M8E-6(相)~2(1m底)	—	—

*I類 (突起が方向に延びるもの)、II類 (斜面部突出)、III類 (斜面部裏面に斜面部)

*II類 (突起が方向 ×)、III類 (斜面部突出は底より張り出し)、IV類 (斜面部裏面は底張り)

ナ類 (1. ハリの鋸歯)、ナA類 (直面)、ナB類 (斜面突出)、ナC類 (斜面裏面に張り出)

ナD類 (突起が方向のもの)、IV-A類 (斜面部裏面なし)、IV-B類 (斜面部裏面に斜面部)、IV-C類 (斜面部裏面に斜面部)

表5 円満寺遺跡出土赤彩土器観察表

登録番号	出土地点	推定年	堆積量 (t)	口径 (cm)	深さ (cm)	底	調査実施状況	断面	堆成	色	調査	備考	
701	03-6次Cc	赤堀土器	90	19.8	2.7	凹	凹輪ナダ	直	普通	若7.3M8E-4(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—	
702	03-7次Eg	赤堀土器	90	19.5	2.2	—	凹輪ナダ	直	普通	若7.3M8E-2(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—	
703	03-4次Cc	赤堀土器	50	16.2	2.9	ナダ	カズリ	直	普通	若10M8E-2(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—	
704	03-2次Cc, F	赤堀土器	10	19.0	2.8	凹輪ナダ	カズリ	直	普通	若10M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—	
705	03-6次Cc	赤堀土器	30	17.0	2.5	10.5	凹輪ナダ	カズリ	直	普通	若2.3M8E-1(3.5m)	5M8E-6(相)	6と同一起
706	03-3次Cc, Eg, 42Cc	赤堀土器	10	17.0	—	凹輪ナダ	直	普通	若2.3M8E-1(3.5m)	5M8E-6(相)	5と同一起	—	
707	03-7次Cc	赤堀土器	10	14.5	4.4	—	凹輪ナダ	カズリ	やや良好	良5M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	—	
708	03-6Cc, F	赤堀土器	50	14.7	3.9	9.3	凹輪ナダ	直	やや良好	若7.3M8E-4(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—	
709	03-7次Cc	赤堀土器	70	16.2	4.2	—	凹輪ナダ	カズリ	直	やや良好	若7.3M8E-4(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—
710	03-2次Cc, 03-4次Cc	赤堀土器	70	18.6	4.9	—	凹輪ナダ	直	やや良好	若10M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)~4(1m底)	—	
711	03-5次Cc	赤堀土器	50	15.0	3.5	—	凹輪ナダ	凹輪ハラカズリ	直	やや良好	若10M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)~4(1m底)	—
712	03-4次Cc	赤堀土器	50	14.4	3.4	—	凹輪ナダ	凹輪ハラカズリ	直	やや良好	若10M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)~4(1m底)	—
713	03-6次Cc	赤堀土器	40	16.4	3.7	—	凹輪ナダ	直	やや良好	若10M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	—	
714	03-2次Cc	赤堀土器	30	16.5	3.7	—	凹輪ナダ	直	良好	若10M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	—	
715	03-12Cc, 23Cc	赤堀土器	50	15.0	3.8	—	凹輪ナダ	凹輪ハラカズリ	直	やや良好	若2.3M8E-3(3.5m)	5M8E-6(相)	—
716	03-1次Cc, 26Cc	赤堀土器	30	16.4	3.5	—	凹輪ナダ	凹輪ハラカズリ	直	普通	若2.3M8E-3(3.5m)	5M8E-6(相)	—
717	03-4次Cc	赤堀土器	20	13.6	3.7	9.0	凹輪ナダ	カズリ	直	普通	若7.3M8E-6(相)	5M8E-6(相)	—
718	03-6Cc	赤堀土器	40	12.4	3.3	—	凹輪ナダ	カズリ後ナダ	直	やや良好	若2.3M8E-3(3.5m)	5M8E-6(相)	—
719	03-2次Cc	赤堀土器	20	16.0	4.2	11.2	凹輪ナダ	直	やや良好	若10M8E-2(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—	
720	03-5次Cc, F, 03-6Cc	赤堀土器	20	18.4	3.3	13.0	凹輪ナダ	ケズリ後ナダ	直	普通	若7.3M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—
721	03-5次Cc	赤堀土器	30	11.0	3.4	—	凹輪ナダ	ヘラカズリ後ナダ	砂質含む	やや良好	若10M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—
722	03-6次Cc	赤堀土器	20	10.0	3.5	6.2	凹輪ナダ	目ハラカズリ	砂質含む	普通	若7.3M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)	—
723	03-PL-29Cc, F, 03-5Cc	赤堀土器	40	14.6	5.6	10.0	凹輪ナダ	—	直	普通	若10M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	結晶あり
724	03-7Cc, 06Cc, H	赤堀土器	30	18.1	4.2	12.5	凹輪ナダ	—	やや良好	若10M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	結晶あり	
725	03-6Cc, F	赤堀土器	80	15.2	5.0	12.6	凹輪ナダ	—	やや良好	若2.3M8E-3(3.5m)	5M8E-6(相)	結晶あり	
726	03-6Cc, G, H	赤堀土器	70	16.8	4.3	11.6	凹輪ナダ	ミカキ	普通	若7.3M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	結晶あり	
727	03-6次Cc	赤堀土器	40	13.0	4.0	12.4	ナダ	—	直	普通	若7.3M8E-2(3.5m)	5M8E-6(相)	結晶あり
728	03-6次Cc	赤堀土器	20	16.4	4.3	—	ナダ	ミカキ	直	やや良好	若10M8E-3(3.5m・相)	5M8E-6(相)	結晶あり

表 6 円満寺遺跡手捏ね土器観察表

No.	出土地点	種類	器種	発見年	口径 (cm)	径 (cm)	底 (cm)	調査		施土	施成	色	測定	備考
								径 (%)	高 (cm)					
720	03-7次Pc	手捏ね	小片	100				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/3 (二段・黄緑) ~5/1 (黒)			無
720	03-1次Pf (P1)	手捏ね		90				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/2 (二段・黄緑)			
721	03-1次Pg	手捏ね		100				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/2 (二段・黄緑) ~6/2 (灰黄緑)			
722	03-4次Bj	手捏ね		90				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/3 (灰黄緑) ~7/3 (二段・黄緑)			
723	03-4次Bb	手捏ね		60				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	2.5YR7/3 (淡黄) ~5/1 (黄) ~3/1 (黒)			無
724	03-2次Bc	手捏ね		30				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	5YR7/6 (褐) ~10YR7/4 (黄緑) ~4/1 (褐皮)			
725	03-7次Cj	手捏ね		100				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/2 (二段・黄緑) ~5/1 (褐)			
726	03-2次Dm	手捏ね		20				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/1 (黒) ~2.5YR7/3 (淡黄)			
727	02-4次Dv	手捏ね		20				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	5YR7/5 (褐)			
728	03-6次Eg	手捏ね		40				ナゲ	指顎压成 粘合	中や不良	5YR7/1 (褐)			
729	03-6次Eg	手捏ね	环	90				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	2.5YR7/6 (灰) ~4/2 (灰)			無
730	不明	手捏ね	环	90				ナゲ	指顎压成 粘合	中や不良	10YR7/3 (二段・黄緑) ~5/1 (黒) ~8/1 (灰)			
721	03-7次Eg (F1)	手捏ね	环	70				ナゲ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/3 (淡黄緑) ~6/2 (灰黄緑)			
742	02-4次Eg	手捏ね	环	60				ナゲ	指顎压成 粘合	中や不良	7.5YR7/5 (二段・褐)			
743	03-4次Eg	手捏ね						ケヌ	指顎压成 粘合	良好	10YR7/2 (二段・黄緑) ~6/2 (褐) ~7.5YR7/1 (褐)			
744	02 IT, 03 2次Pf	手捏ね	盒合	30				ナゲ	指顎压成	中や不良	7.5YR7/6 (淡黄緑) ~5/2 (褐) ~8/8/1 (黒)			
745	03-6次Eg	手捏ね	小盒	90				ナゲ	指顎压成	良好	5YR7/6 (褐) ~10YR7/2 (二段・黄緑) ~6/2 (灰)			無
746	03-5次Eg	手捏ね	小盒	90				ナゲ	指顎压成	中や不良	7.5YR7/4 (二段・褐)			
747	03-3次Eg, 3次Eg	手捏ね	洗杯	60				ナゲ	指顎压成	中や不良	10YR7/3 (二段・黄緑) ~4/1 (黒)			
748	03-4次Eg	手捏ね	花口壺	100				ナゲ	指顎压成	中や不良	10YR7/3 (淡黄緑) ~3/1 (褐)			外側に模様
749	02-5次Eg	手捏ね	七面					ナゲ	指顎压成	普通	7.5YR7/2 (灰) ~3/1 (黒) ~10YR7/4 (二段・褐)			

表 7 円満寺遺跡出土製塩土器等観察表

No.	出土地点	種類	器種	発見年	口径 (cm)	径 (cm)	底 (cm)	調査		施土	施成	色	測定	備考
								径 (%)	高 (cm)					
750	03-6次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	中や不良	7.5YR7/4 (二段・褐)		布目あり
751	03-7次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	良好	7.5YR7/3 (二段・褐)		布目あり
752	03-5次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	中や不良	10YR7/3 (二段・黄緑)		布目あり
753	03-5次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	良好	5YR7/4 (二段・褐)		布目あり
754	03-6次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	中や不良	7.5YR7/4 (二段・褐)		布目あり
755	03-6次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	中や不良	10YR7/3 (西黄緑) ~7/3 (二段・黄緑)		布目あり
756	03-6次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	中や不良	10YR7/3 (西黄緑) ~7/3 (二段・黄緑)		布目あり
757	03-7次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-布目	粘合	中や不良	7.5YR7/4 (二段・褐)		布目あり
758	03-6次Eg	土器	製塩土器	小片				外-ナゲ	内-ナゲ	粘合	中や不良	7.5YR7/6 (褐) ~4/4 (二段・赤)		布目あり
759	03-6次Eg	土器	脚壺	小片				内-外	凹凸ナゲ	粘合	良好	内-10YR7/3 (二段・黄緑)		
760	03-5次Eg	土器	青灰	小片				外-内-ナゲ	粘合	良好	10YR7/3 (二段・黄緑)		中間所産	

7. 混入した製鉄関係遺物の検討

上器滲り部分に夥しい十器片に混じて鉄滓と吹子の羽口片が採取された。

鉄滓は鱗十塊状で原形不明のものが多かった。そのうちから直径10cm余の小さな楕円形のものを分析試料に供した。

羽口片は2個体分の破片を採取し、そのうち長さ10cm余の円筒形（半分に割れている）で先端の焼損状況のよく分かる個体の縦断1/4を分析に供した。またこの個体の内孔面には竹の節の圧痕が認められ、これについては別途の検討を行った。（図52）

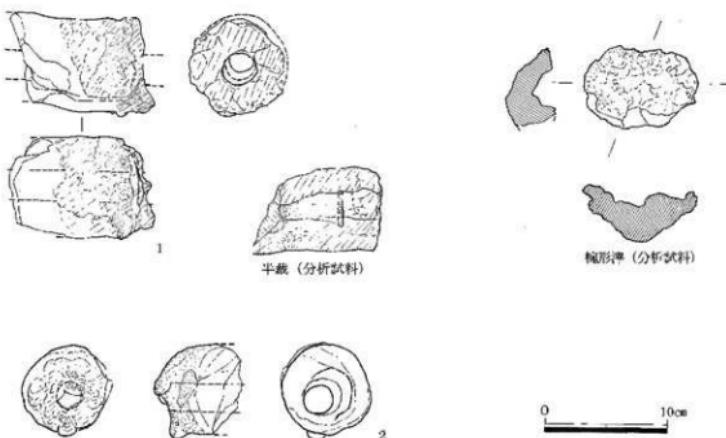


図52 鉄関連遺物

1) 鉄滓について

小型の楕円形滓について分析の結果から全鉄分、造滓成分、及び酸化チタンの含有量と顕微組織にみられるウスタイトやファイアライトの形状から砂鉄系精鍛鍛冶滓と判定された（付編II参照）。これによって当該遺跡の直近において同時代に砂鉄を原料とした製鉄が行われていたことが分る。

2) 羽口について

分析結果から同時に分析した律令期の七師器の胎土とほぼ同様的一般的な粘土を用いたもので、その耐火度は低いと判定された。この羽口には併せて指摘されたように内孔面に竹の節の圧痕があり、竹の中子のまま焼き抜きしたと考えるのが妥当。しかし成分分析から焼成、非焼成の判断は困難である、とされた。

この羽口について、窪田藏郎氏に指導を頼っていたところ東京の機会があり、持参して実見の上で検討頂いた。以下、その所見を私信から抜書きする。

「内側に竹の痕のある羽口は初見でした。竹を割って^{すくい}抜きとし、これを芯にして粘土で成形した後、乾燥させてから内側からバラバラにして引抜けば出来ないことはありませんが、内壁面に割れ目傷、または引き傷が残ります。竹をそのまま入れたとすれば、円錐形に近いテーパーを持ったものでない限り、製作は不可能であって、円筒形で芯に竹を入れた場合は節部が引っ掛かって抜けません。そのまま焼成したらそこに焼成痕が残るはずです。職人の技能とは申せ、不思議な遺物です。」或はまた別信で「竹の先端に粘土で羽口先端を造り付け、下日干しにして使用したものではないか。突込みは3寸程度で火床の熱影響で幾分焼成もされるでしょう。これ以外には一小考えられません。」と。

この竹芯痕の残る羽口の、特に製作方法については以上のように、村川義行氏（和銅博物館）、及び深出藏郎氏（製鉄史）の所見、見解に負うところがすべてである。

要約すると次のようである。

- ・ 竹芯痕の残る羽口はこれまで事例がなく、これが初見である。
- ・ 同時採取の鉄滓は砂鉄系精練鍛冶滓であり、この作業に用いられた羽口と想定される。
- ・ 羽口製作方法に関して特に問題となるのは古に一般的な馴染き技法ではなく、芯の竹に厚板状粘土を巻きつける方法であること。
- ・ この羽口はごく普通の十を用いて耐火度は低い。焼成品か否かは明確でない。
- ・ 孔径、外径ともに鍛冶用の一般的な法量である。

8 「赤い水」について

当該遺跡は立地や局部的環境の項において、前述したように“赤い水”の滲出する岩の隙間を選んでの祭祀とみることが出来る。この赤い水は当地において“カナケ（鉄氣）”と呼び鐵鏽色の泥状をなし、濁しながら粘性の流れとなるものである。主成分は水酸化鉄であることは化学分析の結果^{※1}をみても明らかである。普通一般には地下から滲出し尾垂れる水は無色透明の清水であるが、上質や含有物等によっては変化するのは当然である。特に奥出雲地方をはじめ、古代から製鉄が行われたところでは、投棄した鉄滓層を経由した水分は、多くの水酸化鉄を含み赤鏽色の粘性を帯びた水となる。つまりこれが“カナケ水”である。

赤い色は古く縄文時代以降多く用いられており、赤色は血液のイメージから生命の根源・聖・豊饒を意味し、哀愁・邪・惡靈・穢れの対義とするのが大方の見解^{※2}である。

古代国家成立のころ、中央での修祓祭祀は、地方の鄙びた集落においてもこれに倣った祭祀を行うとき、赤く塗った器とともに、斎の場として岩間を伝う赤い水の産地は最も適したところであったと考えられる。

註

※1 本書付録Ⅱ参照

※2 例えば施朱や朱（赤）色顔料等の考古学的検討等は 市毛勲：『朱の考古学』 雄山閣 昭和59年など。

9 むすび

円満寺遺跡のうち、土器集積遺構は約7×8mほどの範囲での祭祀跡であった。特に上器片等が多く取上げ点数3万点以上の堆積である。2ヶ年を要した調査から得られた知見や指摘事項を記してむすびとする。

- 1) この祭祀遺構はかつて斐伊川河岸で、北側は比高約100mで神名備形に聳立する水手山がある。そこから斐伊川に下る狭く急勾配の谷間の最下端部にこの祭祀遺構が所在する。斜立する巨石群に半ば囲まれ、滲み出る水で半潮状で礫の多い9×7mほどの窪地に継続して営まれている。遺物は都度毎にその場に据えたまま、或は下方への投棄を繰返した結果30~50cmにも及ぶ堆積となったものである。
- 2) 祭祀は奥まるところに巨石が並び概ね2~3mほど直底面と看做し、底前面に石を組み敷いて祭壇とする、脇に須恵や赤彩の暗文の土師壺などを並べ、ときに上馬・水晶片なども加える。須恵の壺・横瓶等もみられる。奥寄りには土製支脚と数個から10個近い土師壺（鍋）・甌などが並び、若干の火を焚く。また時に桃の実も供されたとみられる。この他後年次には漆で文字（山）を書いた壺も加わる。
- 3) 土器等の観察から祭祀は高位置に始まり漸次下段地へ移り、その下方はそれぞれの投棄の場としていた。
- 4) 祭祀の場として、特に“赤い水”の滲出するところも選地の理由の一つと考えられる。
- 5) ここで用いた土師の甌はそのほとんどに煤が強く付着し、内面にも炭化物のみられるものもある。これらはすべて実用としての日常用いていた品であることは異例といえよう。
- 6) 漆付着や塗付、或は漆で文字を書いた土器を少数ではあるが用いていることは事例に乏しい。特に片口状の漆容器^{前回}や文字を漆書きしたものは祭祀跡において希例であり、混入していた鉄滓や羽口とともに当該集落の生業との関わりと考えられる。
- 7) この甌及び土製支脚の形状は特徴的なものが多く、甌は長胴形とは若干趣を異なる。土製支脚は双頭形から單頭形への便化かとみられ、土製支脚の焼成はすべてが不良で臨時的製作かと思われる。
- 8) ここでの祭器には通例のような仮器は極く少数で、大多数を占める甌等は実用の品を用いていることは特記すべき事項である。そして推定される配置はのちの密教系壇具配列に類似する点も多く、また修驗道の湯釜等にも一脈通するものかと思料される。

以上

註

※1 『史跡出雲国府跡』環境整備報告書昭和50年島根県教育委員会刊・の中で松本は甌の口頭を除いて胴部の円孔に栓をして漆の容器として用いたことを挙げ、古代漆の何らかの特殊な使用法を示すか、としている。

※2 阪田宗彦：『仏教の法具』日本の美術No.282 至文堂1989年 P76

※3 蔵田 蔵：『仏具』日本の美術No.16 至文堂1967年 P94

付 編

付録 I

円満寺遺跡より出土木材および木炭の¹⁴C年代測定

大阪府立大学先端科学研究所

アイソトープ総合研究センター

川野瑛子・柴田せつ子

1 はじめに

島根県仁多町教育委員会より測定依頼を受けた円満寺遺跡より出土した木材、木炭のメタノール液体シンチレーション法 [1, 2] による¹⁴C年代測定結果について報告する。

2 原理と約束ごと

L i b b y [3] によって確立されたこの測定法は、生きている生物体の¹⁴C濃度は大気中の¹⁴C濃度とほぼ等しく、その死後新たに¹⁴Cの取り込みは行なわれないので¹⁴Cはその半減期で減少する。したがって生物遺体中の¹⁴C濃度 (A) と、その生物が生きていたときの¹⁴C濃度 (A₀) を測定すれば現代までに経過した年数 (t) が次式から計算できる。

$$t = \frac{T_{1/2}}{0.693} \cdot \ln \frac{A_0}{A}$$

大気中¹⁴C濃度が経年、地域に関係なく一定であると言う仮定のもとに成立しているので、A₀は、現在の自然界の¹⁴C濃度を測定すればよいことになる。現在、国際的な標準物質としてアメリカ標準局 (N I S T) からシウ酸 [SRM1990C] が準備されていて、1982年の国際会議でその値の74.59%値をA. D. 1950年の (A₀) の値に置き換えることが約束された。

3 測定方法

試料は炭化物とし、燃焼させて生じる炭酸ガスをメタノールへ導く。このメタノールの¹⁴C放射能を液体シンチレーション法により測定し、前項の式より試料の年代を計算する。

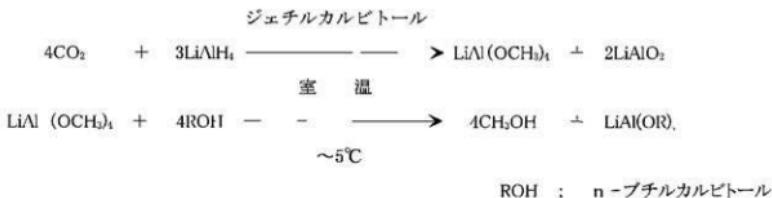
1) 試料の前処理

- ① 試料に付着している土などの夾雑物は除去する。試料は、小片に砕く。
- ② 1 N - 塩酸で、数時間加熱処理。
- ③ 管状炉を用いて、窒素気流中で500°C、5時間処理し炭化物とした。

2) メタノールの合成

炭化物試料を燃焼管中で燃焼させ炭酸ガス (CO₂) とし、LiAlH₄と反応させメタノールを合成する。方法としては直接法と分離法がある。通常用いる直接法とはCO₂とLiAlH₄を直接反応させる方法である。分離法は試料量が少ない場合に適用する。今回はN01、N02、N03、N04については直接法を、N05、N06は分離法を採用した。

CO₂からメタノール合成の化学反応式は次のとおりである。合成後、2度蒸留を繰り返し分離精製を行なった。



標準シュウ酸からメタノールの合成は、標準シュウ酸に硫酸酸性過マンガン酸カリ水溶液を滴下することによりCO₂を発生させ、LiAlH₄と反応させて合成した。

精製法は試料メタノールと同様の方法で行った。

3) 液シンチレーションカウンターによるメタノールの¹⁴C放射能測定

パッカード社製のトライカーブ2260XL型を使用、測定領域は18.4～84.0 KeVに設定。シンチレーターとしてはButyl-PBDの30g、bis-MSBの0.45gをキシレン1Lに溶かしたもの用いた。測定は試料カクテルとバックグラウンドカクテルを100分ずつ交互に行い、必要な時間繰り返し測定した。標準シュウ酸から合成したメタノール試料についても同じ方法により液シン測定を行った。

4 ¹⁴C年代値の算出と結果

前項の液シン測定で得られた標準シュウ酸、試料及びバックランドの測定値(dpm/gC)を用いて前述の式により試料の年代値を計算することができる。ここでNISTシュウ酸値Δ₀は、13.576±0.020 dpm/gCを用いた。計算に際して¹⁴Cの半減期としてはLibbyの提唱している5568年を使用した。また、¹⁴C年代値の表示法としては、1950年を起点としてこの年より幾年前であるかで示してあり、年代値の後にB.P.を添えるのが慣例である。

¹⁴C年代値には必ず測定誤差が伴い、その相対誤差1%は80年となる。誤差は、通常1標準誤差で表示、これは繰り返し測定を行った場合、測定値が誤差の範囲に入るものが全測定の68%であることを意味する。2標準誤差をとる場合は誤差の範囲は2倍になるが95%がその範囲にはいる。

最後に¹⁴C年代値の結果を示す。また較正曲線(0xCAL v3.5, 1998)[4]を用いて¹⁴C年代から曆年代(範囲と確率)を算出した。(表1、図1～7)

参考文献

- [1] S. Shibata, E. Kawano, T. Nakabayashi, S. Kawamura and O. Yamada, Ann. Rep. Rad. Ctr. Osaka 27, 99 (1986/1987)
- [2] S. Shibata, E. Kawano and T. Nakabayashi, Radiocarbon 39(1) 79-87 (1987)
- [3] W.F. Libby, Radiocarbon Dating, 2nd Ed., the Univ. of Chicago Press, Chicago (1955)
- [4] Oxcal v3.5 ; Stuiver et al., Radiocarbon 40(3) 1011-1083 (1998)

表 1

試料名	当方コード	14C年代値 y. BP	校正年代 (曆年代) 範囲 確率	
			範囲	確率
No1	OR-161	427±30BP	1439AD～1475AD	(68.2%)
No2	OR-162	287±34BP	1520AD～1580AD 1620AD～1660AD	(43.2%) (25.0%)
No3	OR-163	309±33BP	1520AD～1600AD 1620AD～1650AD	(54.6%) (13.6%)
No4	OR-164	240±29BP	1640AD～1670AD 1780AD～1800AD	(47.2%) (21.0%)
No5	OR-165	1339±107BP	600AD～820AD 840AD～860AD	(65.5%) (2.7%)
No6	OR-166	1167±66BP	770AD～900AD 910AD～960AD	(51.3%) (16.9%)

図 1

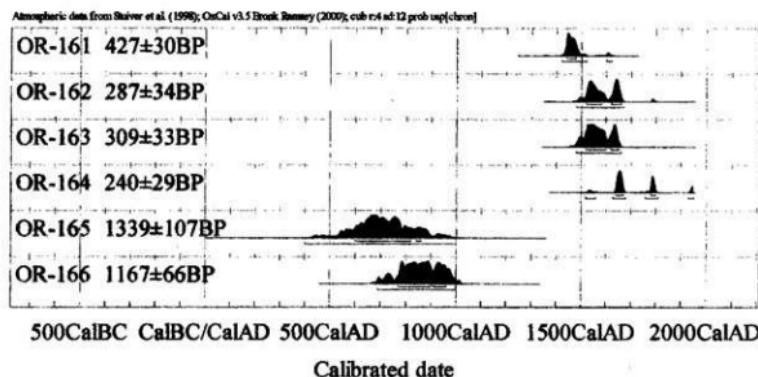


図2

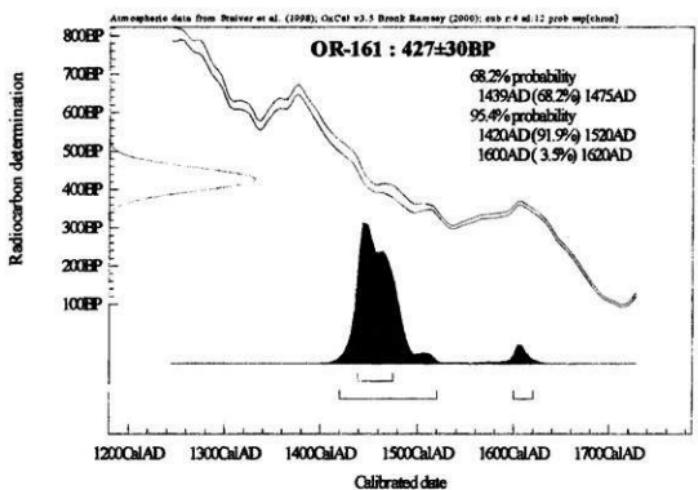


図3

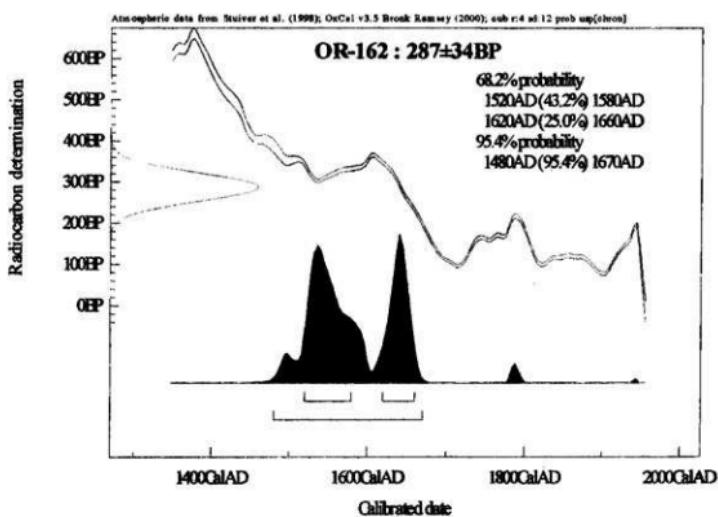


图 4

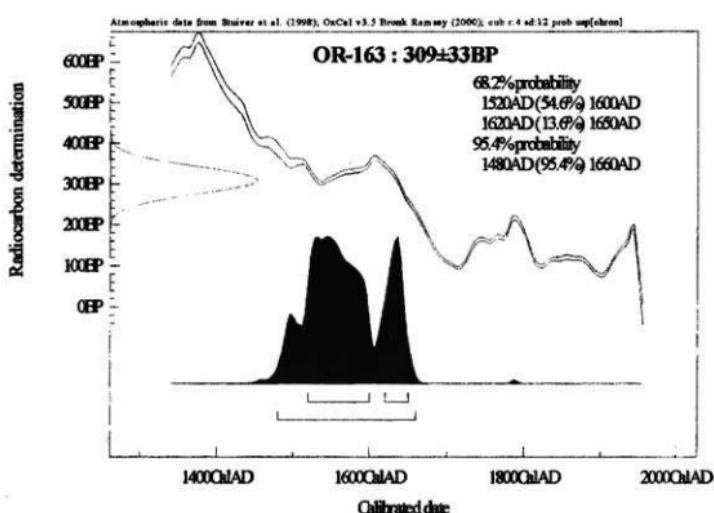


图 5

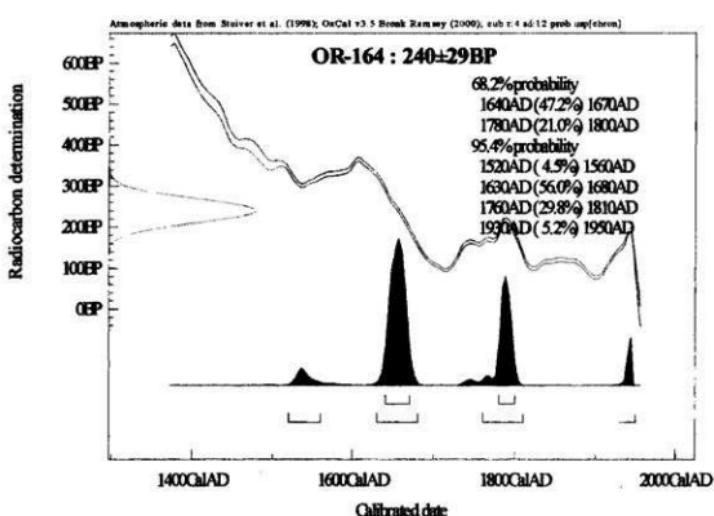


图 6

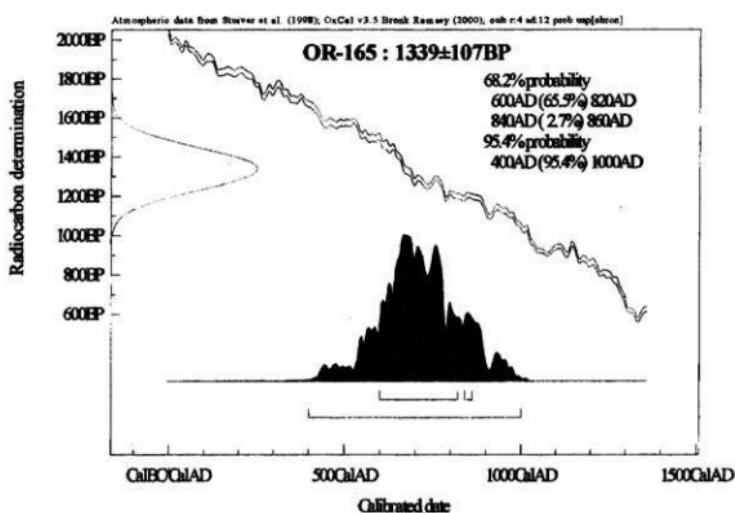
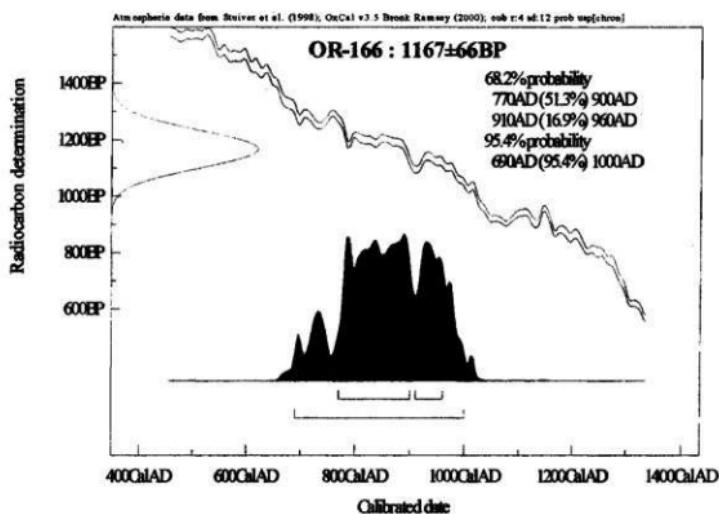


图 7



τ - タ

(用 LIMS システム S-18-19 DATA 使用)

	BG	dev	Sepm	dev	Spm	dev	Eff	C (r) Me (g)	dpm/gC dev	L. TIME (min)	RP dev	NIST dev	RP dev	* Dev (μL/min)
37959	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
0R-161	2.322	0.021	18.287	0.062	33.772	0.116	0.542	2.625	12.965 ± 0.044	5000	432 ± 30	13.576 ± 0.020	427 ± 30	*
No 1 (木)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
37966	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
0R-162	2.326	0.022	18.617	0.075	34.364	0.139	0.542	2.625	13.091 ± 0.053	5000	292 ± 35	13.576 ± 0.020	287 ± 34	*
No 2 (木)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
37995	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
0R-163	2.280	0.022	18.471	0.072	34.273	0.133	0.539	2.625	13.056 ± 0.051	5000	313 ± 33	13.576 ± 0.020	309 ± 33	*
No 3 (木)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
38000	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
0R-164	2.300	0.021	18.555	0.063	34.597	0.117	0.537	2.625	13.168 ± 0.045	5000	245 ± 30	13.576 ± 0.020	240 ± 29	*
No 4 (木)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
38007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
0R-165	2.289	0.025	2.879	0.038	5.402	0.072	0.533	0.470	11.485 ± 0.153	5000	1343 ± 108	13.576 ± 0.020	1339 ± 107	*
No 5 (木)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
38012	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
0R-166	2.300	0.025	5.354	0.043	10.030	0.082	0.534	0.855	11.734 ± 0.096	5000	1171 ± 67	13.576 ± 0.020	1167 ± 66	*
No 6 (木)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*

円満寺遺跡 出土品の調査

安来市体育文化振興財団・和鋼博物館

村川義行・三奈木義博

尾原ダムの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査における、島根県仁多町の円満寺遺跡発掘調査で出土した遺跡遺物について調査した結果を報告する。

1 出土品明細および調査方法

1 - 1. 供試材

表1に出土品調査試料の明細を示す。

表1 円満寺遺跡出土品調査試料

試料No.	名称	出土場所	出土状況他
1	赤泥物質	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	祭壇石敷の下面
2	沈着かなけ (鉄気)	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	泥状沈着物
3	赤色土	遺構付近真砂上（比較用）	町内採取の赤色土
4	赤彩土器片	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	内外面赤色塗彩の皿片
5	赤木椀片	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	赤塗り木椀片
6	鉄滓	奈良時代祭祀遺構（上品溜り）	小さい碗形滓、全重200g
7	羽口片	奈良時代祭祀遺構（土品溜り）	筒状 内面は竹中子痕か

1 - 2. 調査項目および方法

各試料の調査項目を表2に示す。

表2 各試料の調査項目

No	名称	目視観察	化学分析	顕微鏡組織	SEM観察	EDX分析	X線回折
1	赤泥物質	○	—	—	○	○○	○
2	沈着かなけ	○	—	—	○	○	○
3	赤色土	○	—	—	○	○	○
4	赤彩土器片	○	—	—	○	○○	○
5	赤木椀片	○	—	—	○	○	○
6	鉄滓	○	○	○	○	○	—
7	羽口片	○	○	—	—	○	—

(1) 目視観察

形状、色等を目視により観察する。

(2) 化学組成分析

供試材の化学組成分析は次の方法で実施した。

全鉄分(T-Fe)、金属鉄(M-Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

硫黄(S)：燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、五酸化燐(P₂O₅)、酸化バナジウム(V₂O₅)：誘導結合プラズマ発光分光分析(ICP法)。

(3) 顕微鏡組織

切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの3μ～1μで仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

(4) SEM-EDX定性分析

顕微鏡組織観察試料にカーボン蒸着を施した後、走査型電子顕微鏡(SEM)により電子線を照射し、発生する2次電子、反射電子を検出し、表面組織形態の観察と、電子線を照射した微小部から発生する特性X線をエネルギー分散型X線検出器(EDX)で検出して定性元素分析を行い鉱物相の組成を同定した。

(5) X線回折

粉体化した試料にX線を照射し、結晶構造の解析により鉱物相を同定する。

2 調査結果

2-1. 外観写真

No. 1～3に試料外観写真を示す。なお、No. 4の赤彩土器片については図1に同じ様な片とともに示す。No. 5～7については切断前の試料形状を図2・3に示す。また、No. 7の羽口片については半割りした内面を示す。

2-2. 外観目視観察

- No. 1 赤泥物質 : 褐色の粉体で明褐色や灰色の粉体も混ざっている。
No. 2 沈着かぬけ : 明褐色の粉体で混ざりものは見られない。
No. 3 赤色土 : 赤色と白色が層状になった土。
No. 4 赤彩土器片 : 土器の両面に赤色に塗りが行なわれた皿状物。
No. 5 赤木挽片 : 木片の両面に黒色と赤色の塗りが行なわれている。
No. 6 鉄滓 : 山土品が半割りされており、褐灰色と明褐色部分が見られる。
No. 7 羽口片 : 筒状で出土したものを1/4分割されており、太い方が高温に曝され灰黒色になっており、反対側は灰色である。

2-3. 化学分析

調査試料のうち、鉄滓と羽口片について化学分析を行なった。この結果を表3に示す。

鉄滓は全鉄分(T+Fe)は44.58%、造渣成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)は35.41%である。またTiO₂が2.01%より考えると砂鉄系精鍛冶津と推定される。¹⁾

羽口片はCaO、MgOが高く、またNa、Kも高い。羽口成分よりKTECで整理された式²⁾で耐火

表3. 鉄滓および羽口片の化学成分分析値 (wt%)

No	名称	SiO ₂	CaO	MgO	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Na	K	FeO	Fe ₂ O ₃	T·Fe
6	鉄滓	24.74	1.42	0.66	2.01	5.92	0.71	0.59	41.51	17.60	44.58
7-1	羽口片(内)	63.93	1.60	1.78	0.72	19.97	1.69	1.14	0.31	2.77	2.18
7-2	羽口片(外)	62.53	1.51	1.01	0.92	19.13	1.78	1.19	1.02	2.46	2.51

度を推定すると1152°Cと1234°Cとなり、かなり耐火性が悪い。これらのことより羽口材料は通常の粘土と考えられる。

2・4. 跡微鏡組織

図4に鉄滓の顕微鏡組織を示す。白色粒状のウスタイトと灰色長柱状のファイヤライト+体の組織がみられる。

2・5. SEM観察、EDX分析およびX線回折

調査試料のSEM観察とEDX分析結果を図5~11に示す。また、X線回折結果を図12、13に示す。

これらを基に構成を検討すると次のように推定される。

• No. 1 赤泥物質

泥の色の異なる部分での基本的な成分に差はなく、Fe, Si, Alの酸化物、水酸化物主体と考えられる。ただし、EDX分析でPの大きなピークが見られるが、X線回折ではハッキリしたピークが見られない。CaもEDXで検出されており、アバタイトではないかと考えられるが定かではない。

• No. 2 沈着かなけ

EDXではSi, Fe, Alの3元素が検出されSiO₂とFe水酸化物が主体で、Al₂O₃も若干含まれていると考えられる。

• No. 3 赤色土

EDXではSi, Alが主成分であり、SiO₂とAlSi水酸化物系が検出されている。他に赤色成分と考えられるFe, Mgが少量検出される。

• No. 4 赤彩土器片

表面の赤塗はEDX, X線回折とともにNo.3とほぼ同じと考えられる。上器部分はFeが少なく粘土成分と考えられる。

• No. 5 赤木椀片

木片の表面はEDX分析より、ほとんどがHgとSである。これは赤色塗料は良く使用されている硫化水銀(HgS)である。

• No. 6 鉄滓

SEM組織とEDX分析より鉄滓の白色粒状はウスタイトで、灰色長柱状のファイヤライトが主体となり、角張ったウルボスピネルが見られ、マトリックスはガラス質と考えられる。

• No. 7 羽口片

化学分析より一般的な粘土と考えられ、SEMからは特に変わったものは見られない。

EDX分析結果はNo. 4 (B) の土器と同じである。

3まとめ

• No. 1 赤泥物質

この泥のみEDXより多量のPが検出される。ただし、X線回折では物質が特定できずどのようないものか明確には解らない。あえて推定すれば粘土成分、Fe水酸化物（ゲーサイト）、砂鉄及びアバタイト（骨）の混ざった物ではないかと考えられる。ただ、この上がどのようないものかは定かでない。

• No. 2 沈着かなけ

かなかであるFe水酸化物（ゲーサイト）と粘土の混ざったものと考えられる。

• No. 3 赤色土

基本は粘土成分であり、鉄分が多いために赤色になったと考えられる。

• No. 4 赤彩土器片

表面の赤塗はNo. 3とほぼ同じと考えられ赤色土を塗って焼成したものと考えられる。上器部分はFeが少なく通常の粘土成分と考えられる。これはNo. 7の羽口とほぼ同じ成分である。

• No. 5 赤木挽片

木片の表面に硫化水銀(HgS)を用いて赤くした漆器と考えられる。

• No. 6 鉄滓

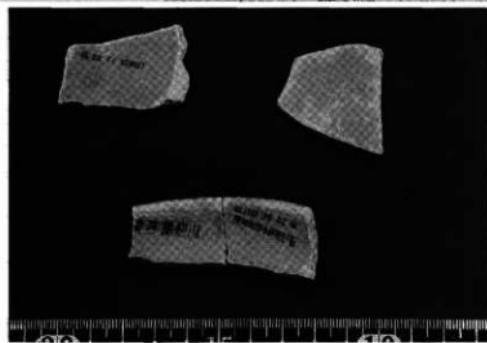
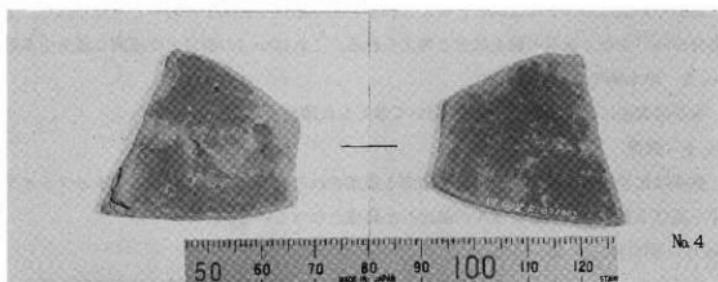
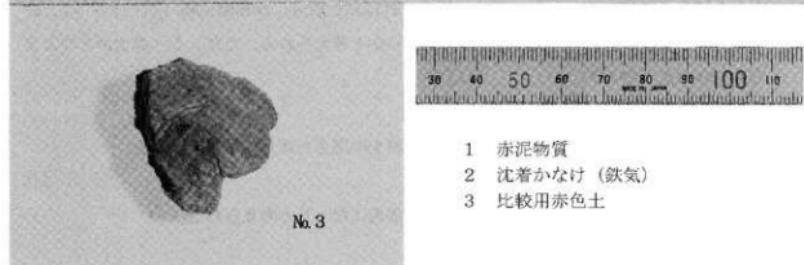
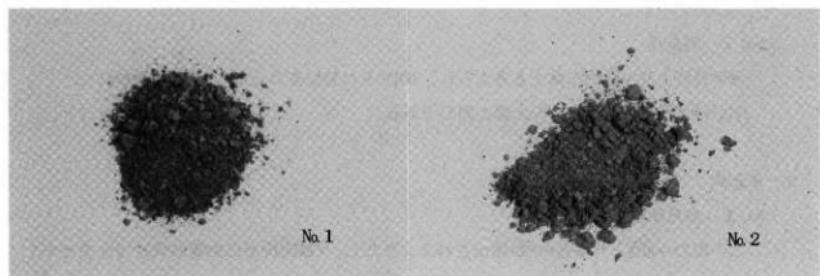
鉄滓は化学成分より砂鉄系精錬鍛冶滓と推定される。ガラス質にウスタイトとファイヤライト及び少量のウルボスピニエルが晶出した組織となっている。

• No. 7 羽口片

化学分析より一般的な粘土と考えられる。羽口としては耐火度は低く特別に羽口用として選別されたものではないと考えられる。また羽口は内面に竹を中子にしてできた筋様の痕跡が見られるが定かでない。羽口の全体像が不明なので更に不明確になるが、もし羽口に竹の中子が使用されたと仮定すると、中子があるまま使用すると送風の障害となる可能性が大きい。使用目的からして、中子を燃やし易い中空の竹を用い、一度焼成して竹を除去して使用したと考えた方が妥当である。化学成分分析値から焼成、非焼成の判断は困難である。

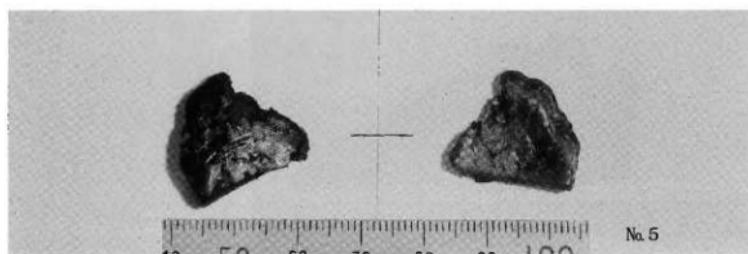
参考文献

- 1) 小川太一：2002/1「分析側から見た鉄開迷遺物発掘調査への期待」『鉄の歴史－その技術と文化フォーラム』 論文集、日本鉄鋼協会、鉄開迷遺物分析評価研究会
- 2) 岡原他（川鉄テクノリサーチ）：2003/3「古志本郷遺跡V」『第9章 古志本郷遺跡官衙遺構に作る鍛冶闇 遺遺物の分析・調査』



出土した赤彩土器片
(No. 4 試料含む)

図 1 供試試料 (1)

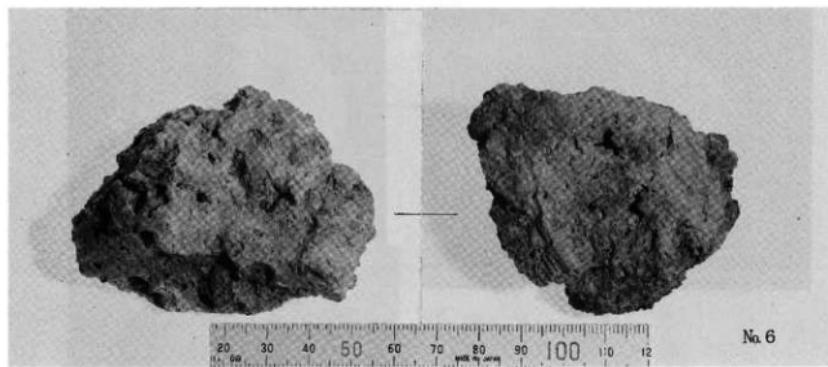


No. 5



No. 5 赤木焼

←
切断前



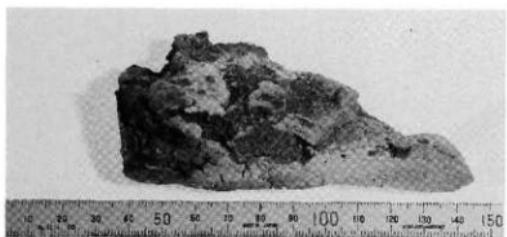
No. 6



No. 6 鉄滓試料

←
切断前

図2 供試試料(2)



No. 7 羽口片



No. 7



No. 7

No. 7 羽口片

→ 切断後の内面状況

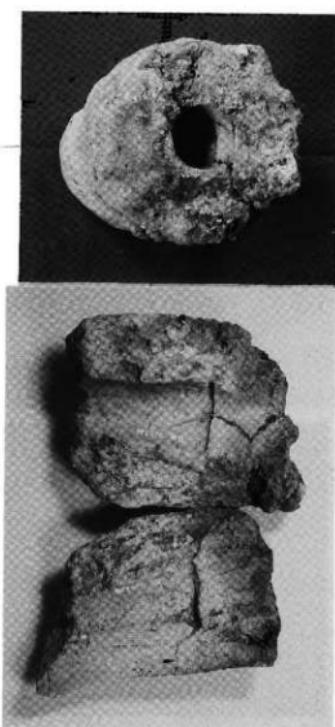
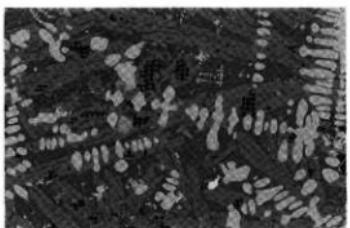
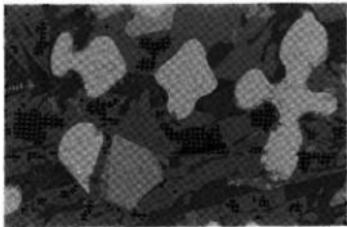


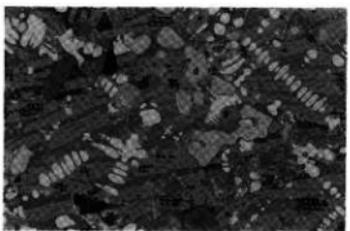
図3 供試試料 (3)



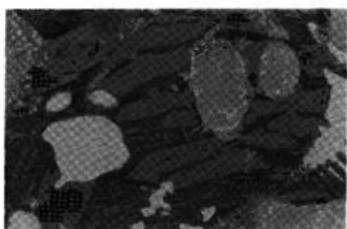
($\times 100$)



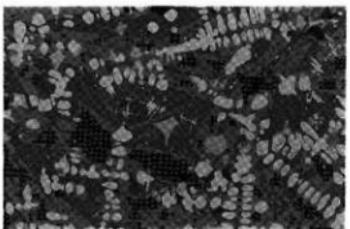
($\times 400$)



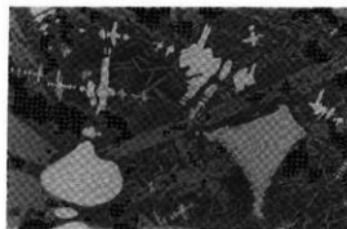
($\times 100$)



($\times 400$)



($\times 100$)



($\times 400$)

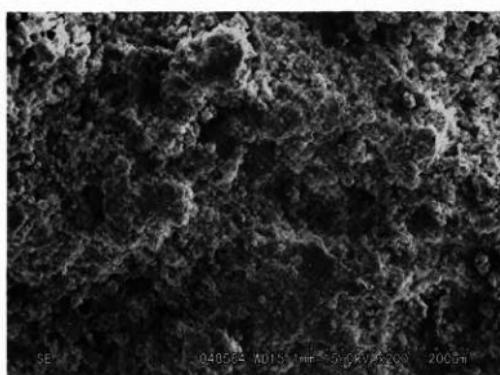
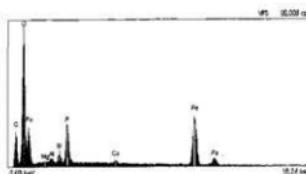
図4 鉄滓（No.6）の顕微鏡組織



(A) 低倍率



(B) 薄色部分（左側）



(C) 濃色部分（右側）

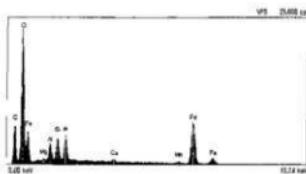


図5 赤泥物質（No. 1）のSEM像とEDX微小部分析

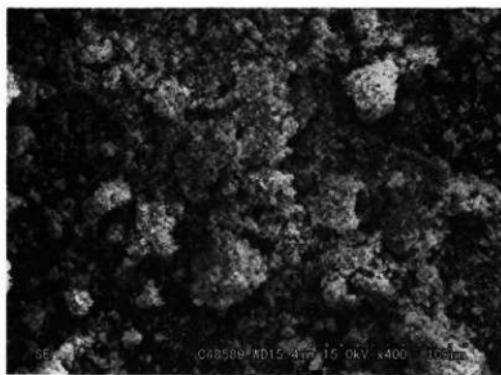
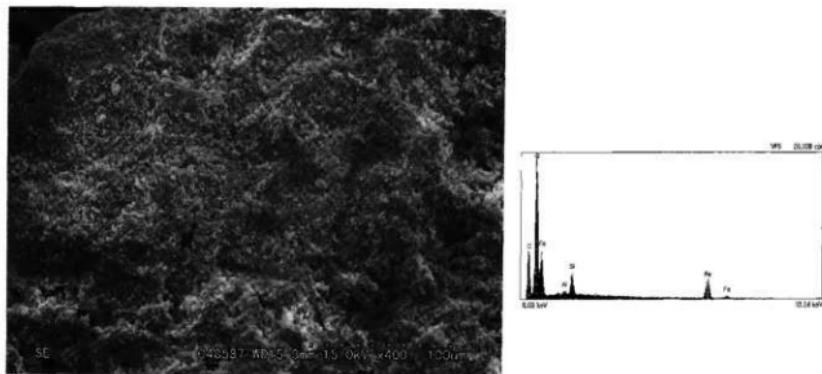


図6 沈着かなけ（No.2）のSEM像とEDX微小部分析

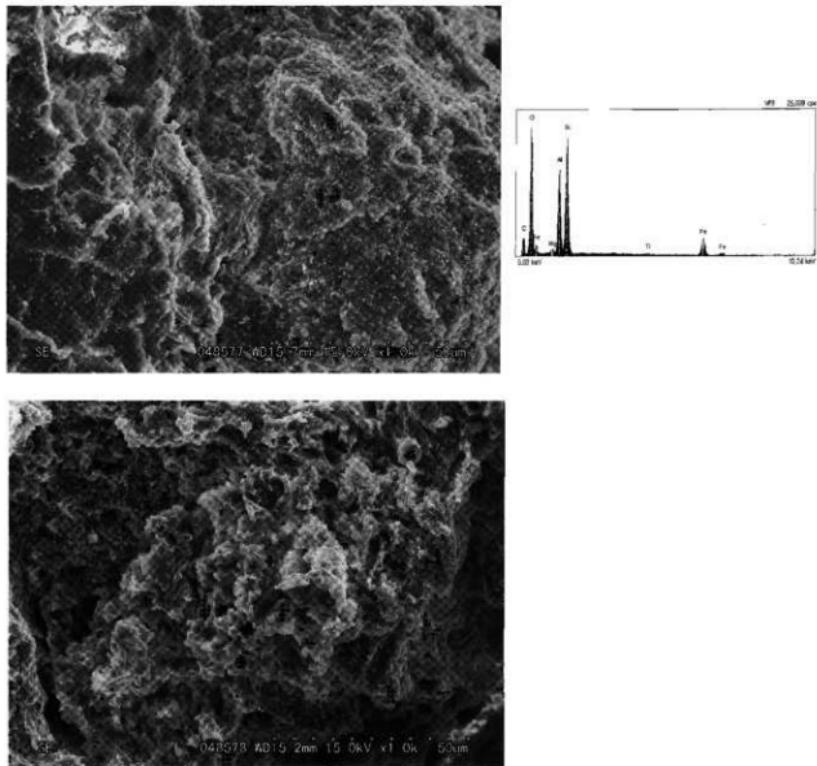
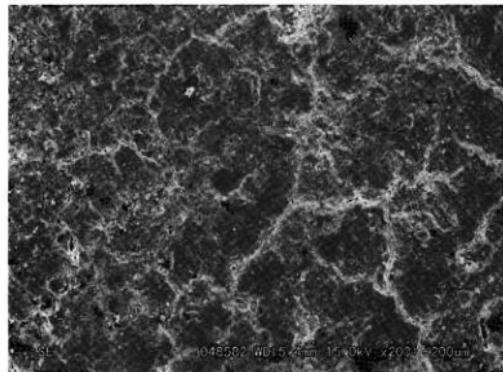
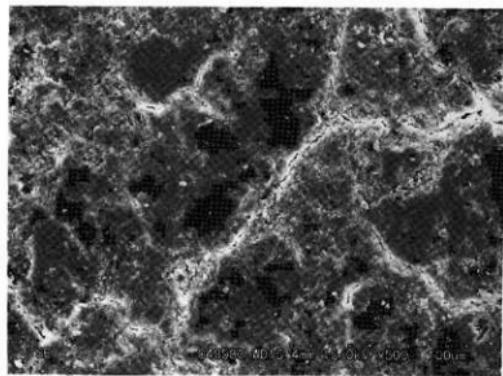
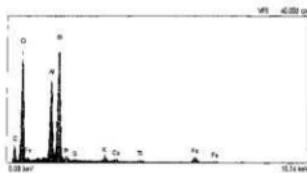


図7 赤色土(No.3)のSEM像とEDX微小部分分析



(A) 赤色付着物



(B) 土器

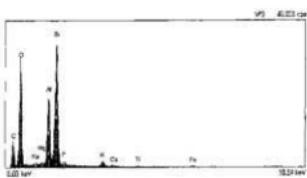


図8 赤塗土器片（No.4）のSEM像とEDX微小部分析

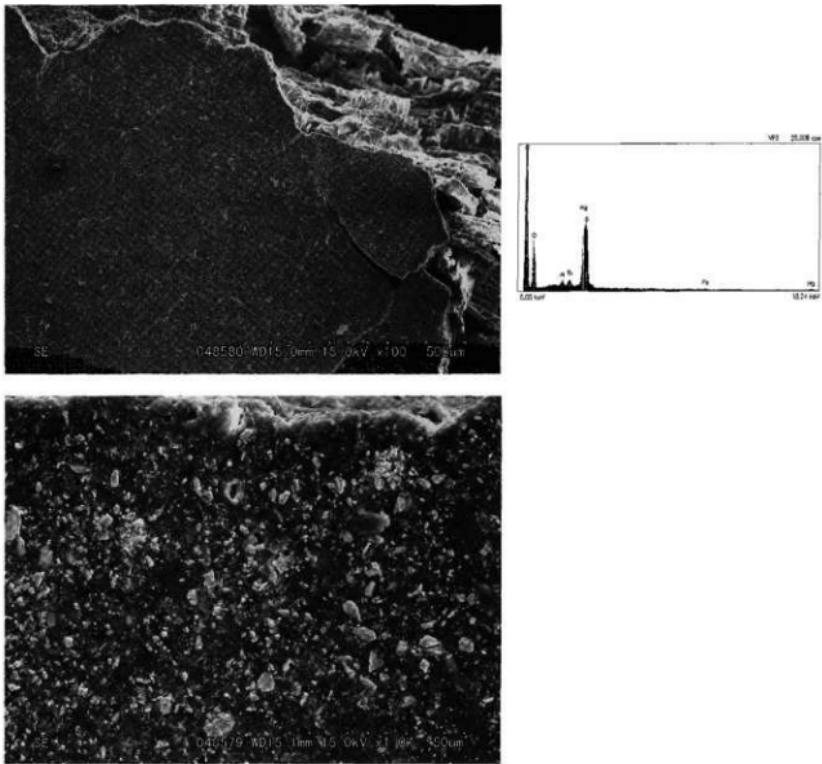
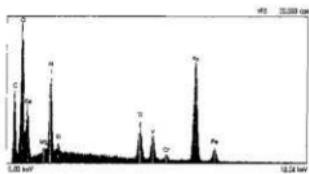
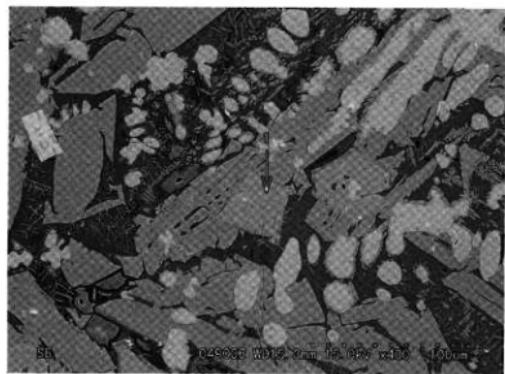
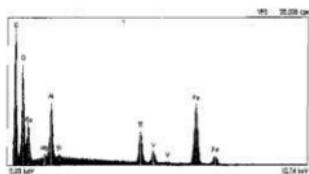


図9 赤塗木片（No.5）のSEM像とEDX微小分析



(A)



(B)

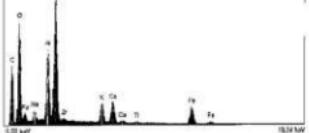
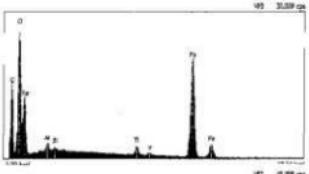
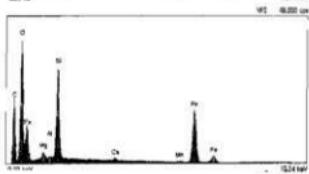


図10 鉄滓 (No. 6) の SEM像と EDX 微小部分析

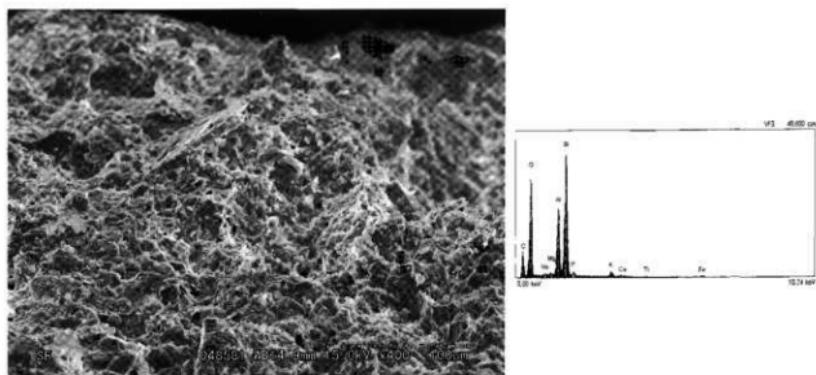


図11 羽口片（No.7）のSEM像とEDX微小部分析

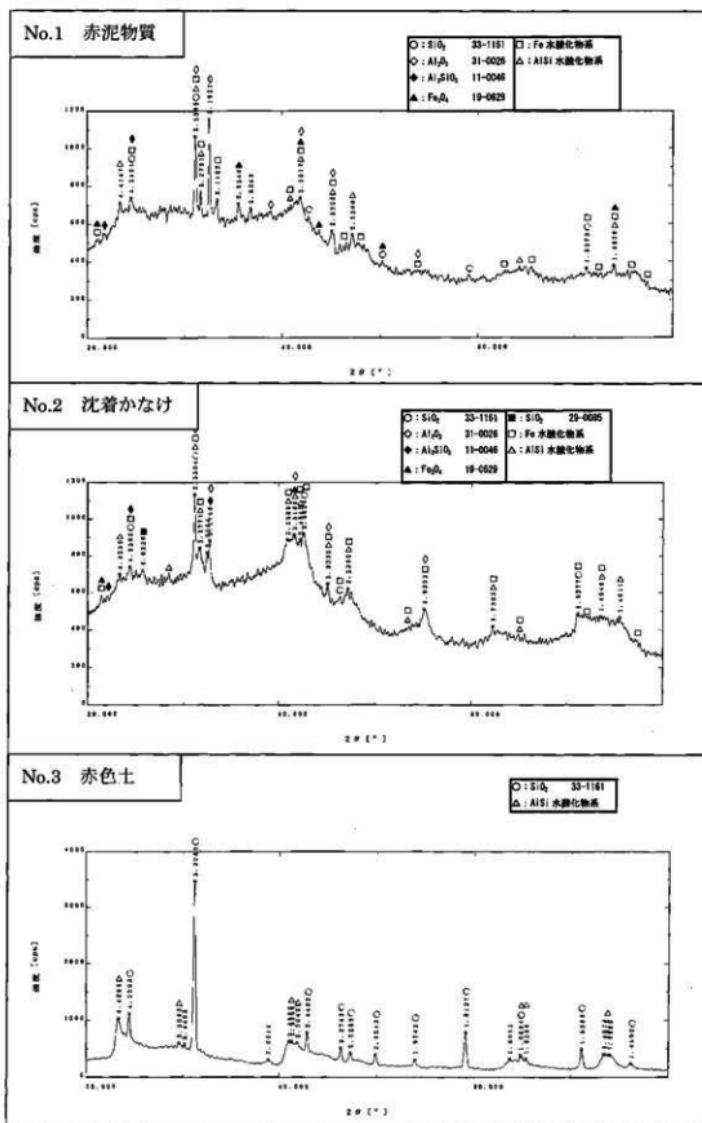


図12 調査試料No.1～3のX線回折結果

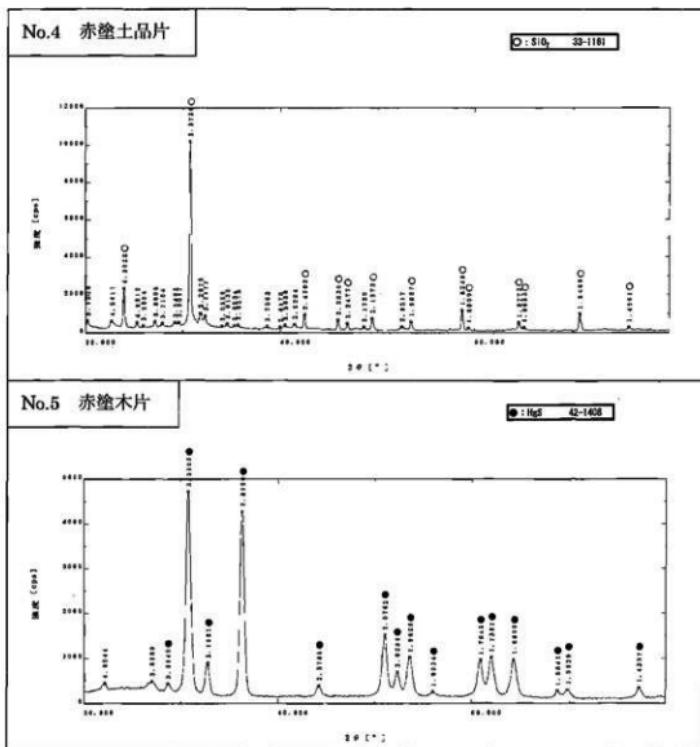


図13 調査試料No.4、5のX線回折結果

図 版



2-6次
Ce区周辺
石の間に詰まる上器



2-6次
De区
甕と土製支脚



2-5次
Cd区
土馬検出

遺物出土状況 (1)



3-1次
調査区全景



3-2次
Dh区



2-8次
De区
遺物出土状況（2）



3-5次
Ff~Fg区周辺
遺物散布面に
中世の柱穴ピットあり

3-5次
Fi区
横瓶と壺頸部



3-5次
Ff~Ff区
須恵杯と土師甕



遺物出土状況（3）



3-6次
作業風景



混入していた
吹子の羽口
Ee区 3-2次



3-8次
Ge区

遺物出土状況（4）



Ce区 2-2次
ステージA祭壇遺構
上面



同上
—倍 畳 —



2-4次
ステージA下底面

祭壇状遺構 -ステージA-



2-1次
Be区作業風景

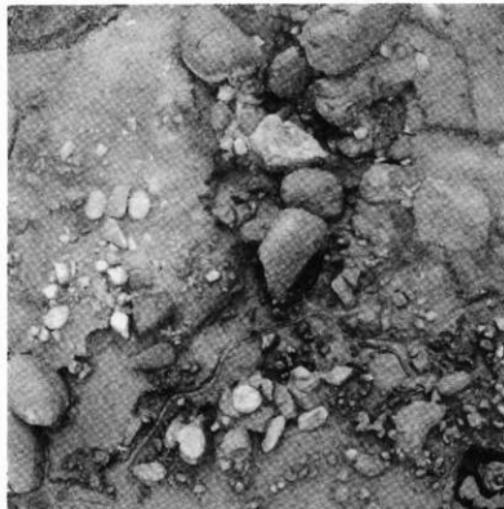


De区
被熱粘土敷きの
上も下も上器堆積
2-6次



Ce区
巨石の狭間にも
粘土敷き、上にも下にも
土器片散乱
2-7次

粘土敷きと遺物の散布状況



Fe区 石敷祭壇付近
…俯瞰…



1. 石敷祭壇
(上段の部)



2. 石敷除去下の
赤泥沈着状況
(分析試料を採取)

ステージC 石敷祭壇部 -上段の部-



3. 赤泥沈着物除去
下詰めの山石



4. 下詰め石除去
やはり赤泥物沈着



5. 赤泥物除去の下に
下段の石敷祭壇

石敷祭壇部 - 下段の部 -



和田先生他 視察

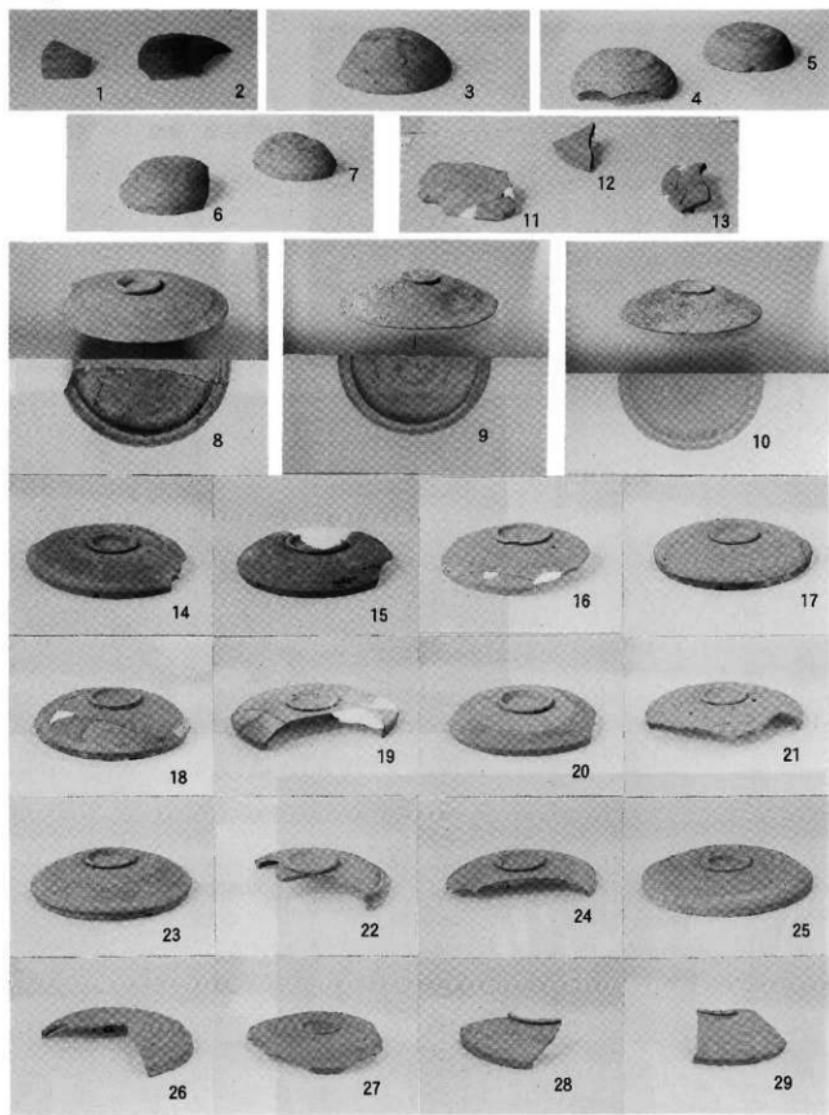


調査指導検討会



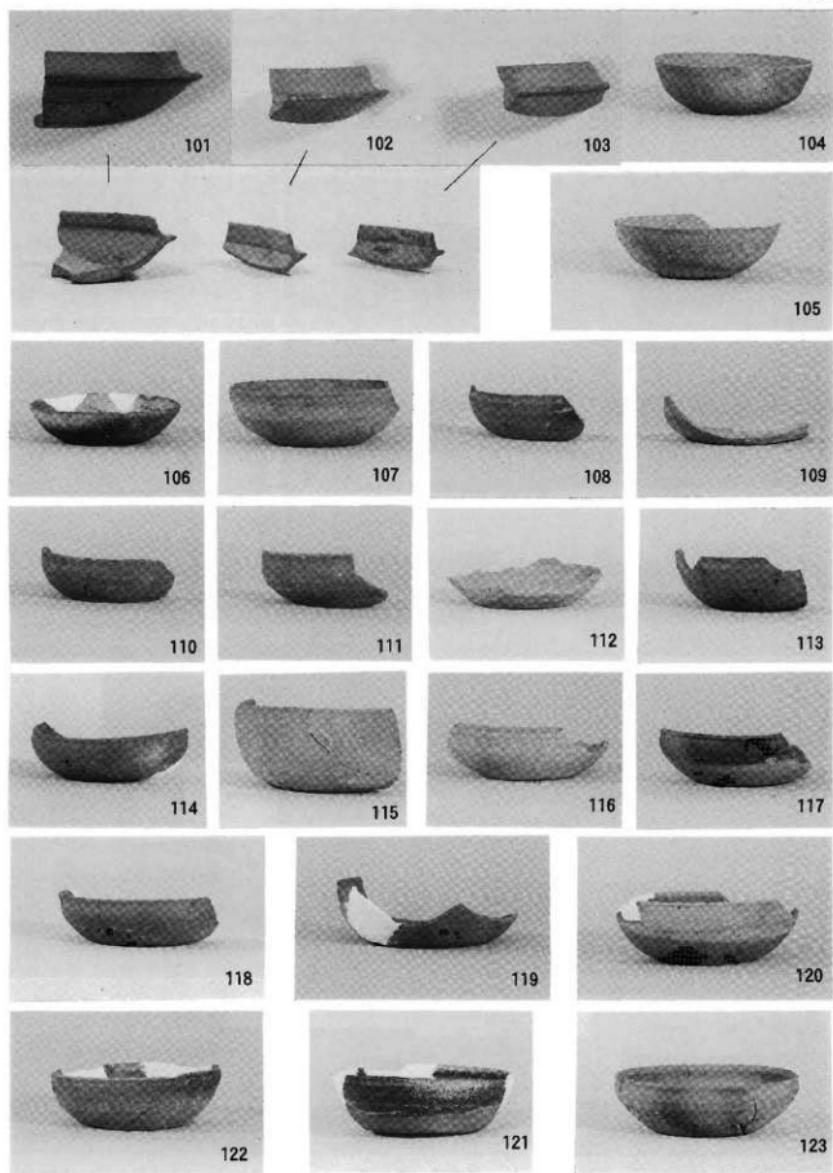
現地説明会

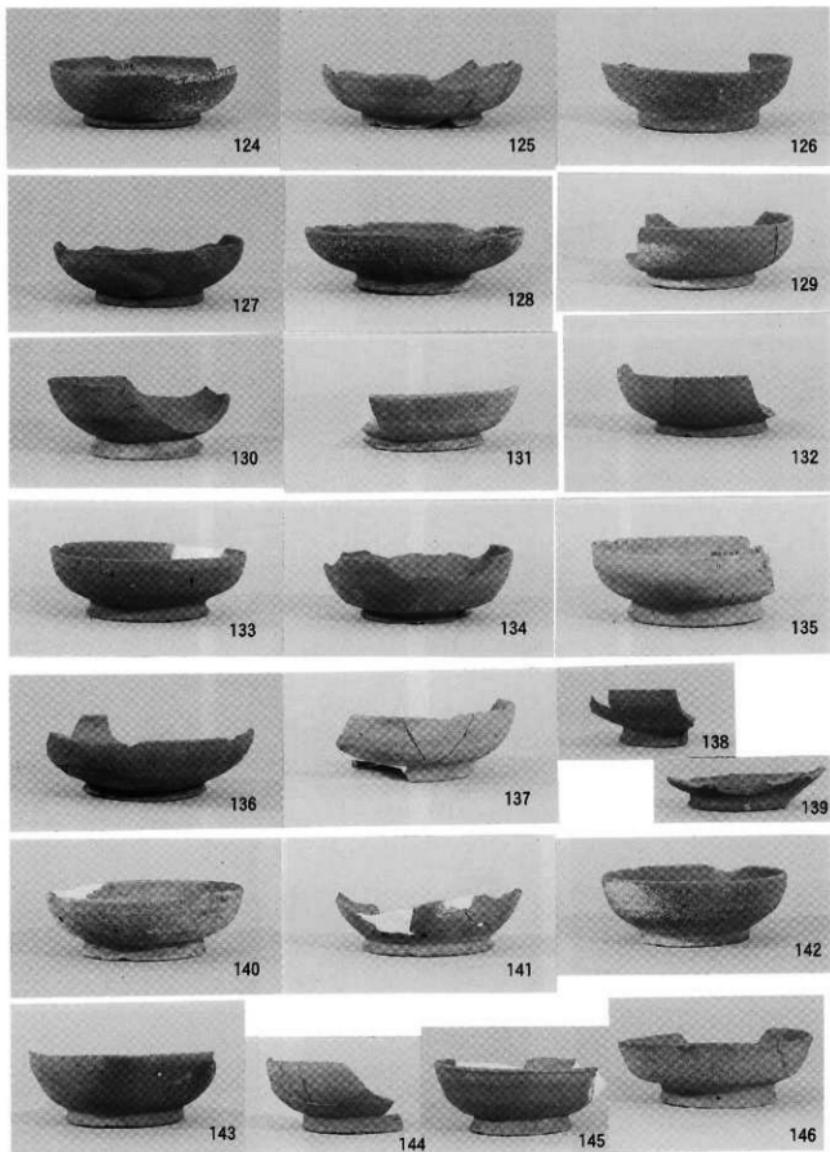
現地説明会と指導会



須恵器（蓋）

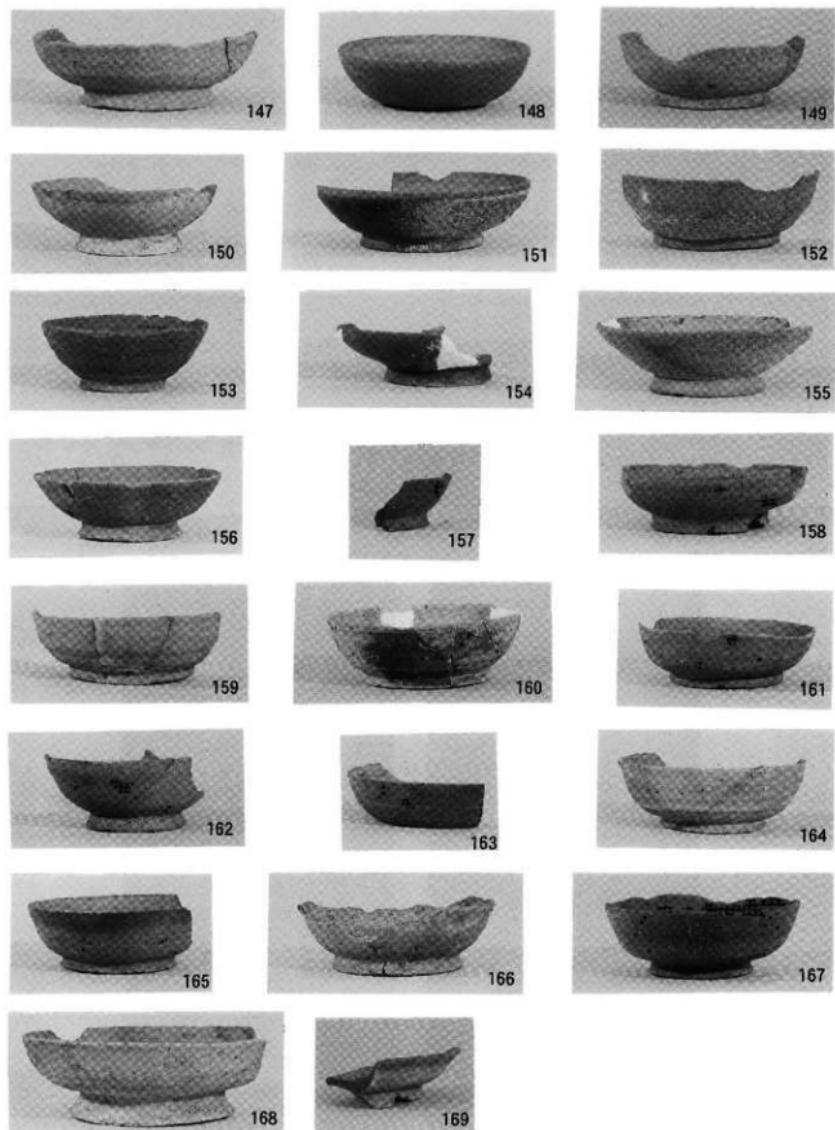
(図18)





須恵器（高台坏）

(図20)



須惠器（高台坏）

(图21)